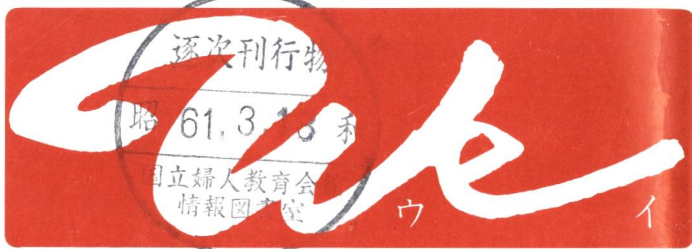


新しい家庭科

自立した男と女を  
人間らしい生活を

差別のない社会を  
育み 創り出す



—— 幼い日—— 大人は忘れてしまった ——



国立婦人教育会図書

冊

104186

1986

4

## 季節のうた



民話に花咲爺さんのはなしもあります。

桜は日本の象徴でもあり、又いろいろな想い出もたくさんあります。

春は私たちを暖く包み、冬の寒さから自由な解放感を与えてくれます。

幼稚園から小学生と中学・高校・大学。

そして社会人の一年生。

人生の原点にもどり、不安もあるが今年こそは何かやってやろうと意欲もわきます。

いじめにも負けず、いじめもせず。

この一年生がみんな、桜のようにけんろんと才能の花を、満開にさせて欲しいと思います。

(田沢 茂)

幼い日の罪

永畑道子

幼いとき。ほんきで小説書きになるつもりでいた。目にうつるものはすべて材料にする、情死の寸前で自分は逃げねばならない（心中ものが好きだった）、あらゆるタイプのひととつきあい、観察して、第三者の自分を保つ、そんな生き方を想定していた。小学二年の八歳ころをあえて「幼い日」といわせていただく。小児結核を病んでいた。一年くらい床のなかにいて、江戸・明治・大正の小説や戯曲をよみあさり、性のめざめを知り、親にかくれて春画も描いた。ねていてみあげる天井は、そのまま舞台になった。

たしかに何もわかつてはいなかった。しかし、自分だけのときを持ったことはたしかである。学校にいかないで文学をかじり、いまのオトナの私より、想像力は奔放であったようだ。さいわいにして病気になるってそして生

き残った私だ。当時は結核になるとほとんど急速に死んだものだが。

幼い日の甘い記憶よりも、心のおくに、罪の意識がある。——そのあと数年たつて、こんどは姉が、結核になった。腸を病み、透きとおるほどやせて医者にも見放されたころ、敗戦直後のアメリカ軍放出のストレプトマイシンで、ようやく命をとりとめた。姉を病ませてしまったのは、妹の私ではなからうか。死んだ母も、いま元気な姉も、いちどもそのことをいわない。あのころの私の病名は、「気管支炎」となっている。しかし、レントゲンでは石灰沈着が胸部にのこり、「結核既往症あり」と診断されてしまうのである。姉を慕いつづけて、きょうに至っている。

（フリージャーナリスト）



# 幼い日—大人は忘れてしまった

## 一〇 発 言 〇——

幼い子とともに……………	横浜市立公田小学校三年生の子供たち	54
子育ての中で育つ……………	上野 昭	58
カンボジア難民キャンプを訪ねて……………	加藤 邦子	60
	押切 郁	62

## 一〇 新しい家庭科を創るために 〇——

小学校では 家庭科の先生なんてイメージ合わないよ！……………	村田 尚子	22
中学校では 家庭科の教師やっています……………	磯部 幸江	26
高等学校では 男女共学は自然です……………	立山ちづ子	31
投稿——なぜ、家庭科を学校で男女必修に しなればならないのですか？……………	高山 雅代	37
私の望む家庭科とは……………	石川 由紀	40
こんな家庭科が欲しい……………	富岡恵美子	42
学習の主人公たち ちいさかったころのこと……………		

## 一〇 特 集 〇——

小さくなあれ……………	村瀬 学	4
幼い日—大人は忘れてしまった……………	藤村 美津	9
幼い日のうた 岩崎 健、岩崎 愛、丹原茉莉、中井 哲、 杉本 愛、平井あすな、平井有太、内山大輔……………		14

## 〈巻頭言〉

幼い日の罪……………

永畑 道子

1

○Weになんでも言おうなんでも聞こう 70      ○わたくしからあなたに 88

○Weの読者会だより 86      ○編集室からあなたに 26, 36



母子保健法改「正」は許せない 女性「障害者」として

新井 純子

車いす迷惑(?)旅行

栗原 実抄

66 64

季節のうた

田沢 茂

✓研究ノート「性」

変わりゆく性意識と性行動(若者の性)

女と男の関係を考える会・善積

44

教育のなかの心理学

体罰をめぐって(1)

小沢 牧子

48

教室の窓

詩をつくる

植垣 一彦

50

いま中学校で

新しい生活の場を作る

仲野 暢子

52

読書つれづれ草

序にかえて

武田 秀夫

72

ワンポイント

女子教育の夜明け

秋枝 蕭子

74

近代日本女子教育史

生きることは闘うこと

吉田 和子

75

刺冠の中に輝く星

娘は発掘をする

羽生 模子

76

赤かぶだより

わたしの身体はわたしのもの

酒井 和子

78

季節のおべんとう

第1回はなぜか「肉べん」

小林カツ代

79

経済の目

生活サイドからみた経済 貿易摩擦

福島 遼香

80

CMの中の女と男

愛情に名を借りた役割押しつけ

吉田 清彦

81

いろいろな十代人

6を8にするとママはよろこぶ

鈴木みち子

81

○情報 臨教審「審議経過の概要(その3)」を発表 69  
○波 幼い日 半田たつ子 84  
○ひと 善積京子さん 39

表紙デザイン 加藤由美子  
目次イラスト 馬場洋子  
本文イラスト 編集部

○今月の読書から 82    ○アンテナ 94    ○十字路 92  
○泉 90    ○"We" EDITOR'S NOTE 96

# 小さくなあれ

村瀬 学



園でもう何年も使ってきた遊戯のレコードに

“小さく 小さく 小さくなあれ

小さくなつてアリスさんになあれ”

という一節がある。詩片集『小さくなあれ』の書名の出所になった個所である。このリフレインになるとわたしは子どもたちと一緒に頭を両手でおおって床にしゃがみこむ。アリスさんになるわけだ。この詩片集が出たのち「そうなんですね、小さくなあれなんですね」といったお便りをいただいたりしたのだが、ちょっと違うんだなあという感じをもったことがある。

「小さくなあれ」は「小さくなりましょう」と言うのではなく小さくなつて「アリスさんになあれ」という所に行くもので、単に「小さくなる」という所にとどま

るものではなかった。その所が書名からでは伝わらなかったかも知れないと後になって思った。

この一節につづく次の動作は

“大きく 大きく 大きくなあれ

大きくなつて 天までとどけえ”

というもので、その時わたしたちはみんな両手を大きく広げて、床から飛び上るのだった。つまり「小さくなあれ」とは、アリスさんになったり、天までとどくような大男になったりすることの全体をイメージしていた。この辺が「小さくなあれ」を考えるための、そしてわたしたちが「小さくなあれ」との何事かがあるような気がしている。つまり「小さく」はなつても「アリスさん」にはなれないわたしたちの——「一歳半」と題した詩片はこうなっている。

なんでもお姉ちゃんと同じことをしようとする  
同じように人形を抱いて

同じようにイスをはこんできて

同じように笑ってみせて

同じように「あかん」と拒否をする

私が帰るとスリッパをはけとさいそくし

ここに座れとザブトンを指さす

これを着ると着物を指さし

ちゃんとパパのはしをもつてきて並べてくれる

どうやってそんなことを覚えるのだろうか

きゆうすからお湯をつぎ

トックリからお酒をつぎ

フタをまわして化粧品を上手にひねり出す

(略)

今はウサギのお人形を背中におぶつて

そのまま私におんぶされて眠っている

ウサギが眠り

あの子が眠り

私も一緒にねむくなっている

不思議としか言いようのない光景がここにある。姉のまね

をし、母親のまねをし、パパのまねをする——なんでそんな  
ことができるのかとたずね出したら、そうできるようになっ  
ているんだとしか答えられないことがそこに起こっている。

「模倣の能力」などといった能力の現れではなく、まさに生き  
方そのものとしてそういう一連の真似が生成しているみたい  
である。一人の子どもがいて大人の真似をしているというの  
ではなく、次から次から何物かを真似つづける仕組みを生  
きること——その仕組みそのものが子どもであるかのように。

確かに彼らはひたすら「複数」を生きている。ある時はア  
リさんで、ある時は大男で、ある時はピンクレディで……と  
いうぐあいに。この見たもの 聞いたものになんでも成り込  
むという複数性を拒む者として「大人」が現れる。「なにを  
してんのお!」「そんなことをしたらダメでしょ!」。そこで  
子どもはふと立ち止まる。

パパだいてよ

といいたげにふいに手を伸すまで

なぜあの子がそこにじっと立っているのか

わからないことがあった

(「透けるまで」)

二人の娘を育ててみて、長女は早くから立ち止まることを

覚えたような気がする。「お姉ちゃん」だからと言われて、早くから「複数」を生きるより「単一」を生きるように仕向けられていった。「お姉ちゃん」などというのは、その辺の「アリさん」や「お姫さま」と変わらないもののなに、いつの間にやら強制的に「ひとりのお姉ちゃん」を生きるように仕向けられている所があった。

下の子がおばあちゃんとおふろへ入ると  
さつとあーちゃん（お母さん）のひざに座って

「だっこして」といっている

「なあぜ」とふしぎそうに あーちゃんが聞くと  
妹がおふろ入ったからと答えているのが  
新聞をよむ私のうしろで聞こえている

（「おかあさん っって言えるもん」）

ゆうべ『宇宙戦艦ヤマト』をみながら娘がこんなことをいった。  
った。

パパ おしごとのとこへ行かんと ここにいてや  
このテレビすむまでここにいてや  
パパ おしごとのとこへ行ったら  
ひとりぼっちになるさかい

（「このテレビすむまで」）

考えてみたらわたしは、子どもの光景でただ印象に残ったものをスケッチしてきたふうに感じながら、その実は家の中で見え隠れする三角関係の場面に意識的に気を止めてきたことに今では気がつく。おばあちゃんと母屋おふろで寝ることになった姉のことを書いた「わたしのシンデレラ」という詩片も、結局は祖母―母―娘の三角関係に心を痛めていたわたしの位置がよく見えて心苦しい。

一〇時になると 娘は母屋へかえる、

役場のサイレンが遠くにかすかに聞こえただけで  
娘はあそんでいる手を止めて パツと立ち上がり

「もう一〇時や

おばあちゃんのとこいく」

という

そして私たちとサヨナラをする

下の子ができて 上の子が母屋で寝るようになって

もう一年半以上になる

はじめはよく泣いて こっちの隠居に來たがっていたのに  
今は一〇時になると おじいちゃんが戸をしめるから  
とかいって出かけていく、



この小さなシンデレラ

わたしは笑いながら おやすみ またあしたね という娘はあーちゃんにもおやすみをして行つてしまふきつちり一〇時になるとあわてて行くようになったのはいつからだろうか

私はなぜか そういうことが気にかかつていたそれでもわたしはできるだけ自然に

「おやすみ またね」と

言うように心がけてきたような気がする

わたしの小さなシンデレラ

「小さくなあれ」とは、小さくもなり、大きくもなり、その間の無数の複数性を生きる融通性、その変幻自在性を意味しているのだが、現実の家庭で生きる時には、その変幻自在性はしばし矯正させられる。三角関係とは人間関係が変幻自在ですまされない場面への直面の仕方を言うのだと私は思う。

たぶん人間の関係とは、基本的には誰かの関係の中に割つて入るような関係として存在しているのではないだろうか。キルケゴールが人間の存在の仕方を「関係に關係するような関係」と規定したのは、まさに三角関係の別な表現の仕方であることがわかる。先にある関係に対して横から關係するよ

うな関係——「精神」というものが創られてゆくのは、そういう關係に關係する體驗をへることによるのではないか。

『小さくなあれ』を読みかえしつつ、私自身改めて気がつくのは、大人というのは一人であるだけで關係に關係している存在だということだった。その大人の前で抱いてほしいのにも何も言えず立ち止まっている子は、二人しかいないはずの關係の中に十分三角關係を感じて入れないと諦めているかのようだった。そんな大人がただ小さくなった所で、子どもとの關係が生まれるというわけではないだろう。

おそらく大人は一人でも三角關係を生きている。妙に氣をまわしつつ、自足し、他の關係を寄せつけない時がある。しかし子どもはそうではない。關係すべきものはつねに自分の外にある。一人では子どもはまだ何者でもあり得ない。

同じように複数を生きる人間同士なのだが、片や大人は自らの中の複数を生き、片や子どもは自らの外にある複数を生きる。この複数性の生き方の違いが、両者をとんでもなく隔ててしまうことがあり得るのだろう。

あつちであそんでおいで  
いそがしいとついそういうことを言う  
かまってもらうために

またトコトコとあの子が部屋に入ってくる

そして近くへ来て笑ってみせたりおどったりする

しばらくするとその辺に座りこんで小物をいじったり  
何やら口をとがらせて機げんよくしている

それでもそれもちよつとの間で

もう立ち上るとこつちへ来て顔を合わせてニコツとしたり  
唄を口ずさみながら つま先上りでくるりくると回って  
みせる

わたしがあいてをしているという感じをみせるだけで

あの子はいよいよ上機げんで浮かれています

そんなこともそう長くはつづかない

いつまでもかまっちゃいられないから

いいかげんな頃になると

あーちゃん（お母さん）とあそんでおいで

ということになる

いつも誰かと一緒にいなくてはならない頃だから

そして自分ひとりであそぶことができないから

パーパーあきて（開けて）

パーパーおいで

とガラス戸の向うから

しきりにわたしを呼んでいる

この「あけて」という詩片の中で、わたしは関係を開けつ

づけられないでいる。しかたがないと言えば、しかたがない  
のだが、ここでもわたしは「小さく」なれないでいる。「小  
さくなる」とは、結局背をかがめたり、縮少することなので  
はなく、自分の外の無数の複数性にどこまでも成り込んでゆ  
こうとすることであつた。大人はそういう自失には耐えられ  
ないから「もうおしまい」と言わざるを得ない。子どもの  
戯れの本質がまさにこの複数性へのはてしない転身にあるの  
に對して、大人はどうしても身をかがめるだけでごまかさな  
くてはならない。おそらくその一点に注目せんとしたのであら  
うか、次のニーチェ流「小さくなあれ」のすすめは。

精神の三様の變化。ラクダから獅子へ。そして幼な児へ。

（むらせ・まなぶ 心身障害児通園施設職員）

# 幼い日——大人は忘れてしまった

藤村 美津

〈子どもにわかること、

大人でもわからないこと〉

「男は泣かないの、泣いちゃいけないんだよ」といいながら、くつ入れの場所から離れずに、毎朝、大きい声で泣いていた三歳児S君の入園当初の姿です。

「泣いてもいいから、おかあさんと離れて幼稚園にいられるのは、いいことなのよ」と声をかけると、「男は泣いちゃいけないって、おとうさんがいったの」といいながら、また、大きい声で泣きはじめるのです。

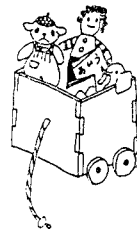
「どうして泣いているんだろうね、聞いてみようか」と保育者は、まわりの子どもたちに声をかけました。「おかあさん、いないからじゃない?」

「おうち、かえりたいんだよ」「泣く子は弱虫なんだよ」と、他の子どもたちは、自分も泣きたい気持をおさえて、口々につぶやきました。

「えつ、泣く子は弱虫なの?」と聞きかえすと、少し泣きやんでいたS君「男は強いんだよ、男は泣いちゃいけないんだよ」とまた大きい声で泣きはじめました。

これだけ、たたき込まれていれば「りっぱりっぱ」としか言いようがないが、また泣きはじめるところが、なんとも、三歳児らしくてかわい。

先輩の五歳児たちは、こんな光景を見ていて、一緒に心を痛めながらも、そこを乗り越えてきた体験を通して、「おかあさんはね、お迎えにちゃんとくるから大丈夫だよ」とか、「おもしろいこととして遊べば、泣かなくなるよ」とか、「とも



だちつくれば」とか、言ってあげています。

その五歳児たちに、S君がいつている「男は泣かないの、泣いちゃいけないの」っていうの、どう思うと聞くと、「エッ」と聞きかえし、ニヤニヤ笑いながら、「男だって泣いていいんだよ」といい、「女だって泣いたっていいんだよ」とまじめにつけ加えてくるから、おかしくなります。

ここで大事なことは、五歳の子がわかること、

男だって、泣いていいんだよ、

女だって、泣いたっていいんだよ

ということが、別ルートで育っていくと、大人になっても、

「男は泣いちゃいけないんだよ」になるという事実です。

### 〈男は手伝わなくていいの〉

幼い子どもたちにとって、幼稚園や保育所は、社会生活の場としての営みの意味をもつところです。

どんな活動の一つ一つも、そこで過ごす、ほんの数時間の間は、仲間と一緒にいう共同活動なのです。

特に、生活々動とよんでいる、人間のくらしにかかわるとりくみは、仲間を意識し、仲間とかかわりながら、活動の目標を達成できるように、準備しています。

例えば、お弁当を食べるときの用意に、机運びの活動があります。三人とか、四人とか、六人とか、小グループを生活

の単位としてつくっているのですが、その小グループの子どもたちが、相互に力を出しあって、協力し、一個のテーブルを運ぶという活動があります。狭い部屋の中ですから、歩いても、ほんの十歩たらずのところですが、仲間を意識し、協力しあう力を育てるための有効なことであります。ところが、その時、グループからはずれて、一緒に行動しない子がいます。

ある子は、まだ自分のやりかけの遊びが終わらずに、あそび続けています。

ある子は、活動から活動へと移行するとき、すぐ次の行動にならずに、フラフラと部屋の中を歩きまわり、絵本をいじってみたり、ドアを開閉してみたり、窓から、外をながめてみたりしています。

この場合、次の活動がよく見通せないためにウロウロする子もいるし、次に何をするのか、わかっていても、その間に、自分のあんなつもり、こんなつもりをすべり込ませている子もいます。

そんな中で、みんながテーブル運びをはじめると、お弁当の入った鞆と椅子をひきずってきては、ちょこんと座っている子がいます。そして、自分の同じグループの仲間にむけて、「コッチ、コッチ」と合図をおくっているのです。

「どうして君は、テーブル運びしないの？」と聞くと、「男

は手伝わなくていいの」というではありませんか、保育者はびっくり仰天。「ネエ、ちょっと、ちょっと、みんな聞いて」と全員の子どもの活動をストップして、「K君『男は手伝わなくていいの』って、自分の鞆とイス用意して待ってるけど、これでいいの?」とよびかけました。

子どもたちは、ダメー、男だって、やるの、といっているんですが、当のK君は、ニコニコして、テーブルが運ばれてくるのを、「コッチ、コッチ」とてまねきして、待っているのです。早くお弁当の用意さえ出来れば、いいようなものですが、保育の現場だからこそ、この「男は手伝わなくていいの」のことは、聞き流すことはできません。

一方、ダメーといっても、やり続けてしまう子どもたち、この関係のありようを変えていくとくみをしないと、人格の形成にふれるとくみには、ならないのです。

それにしても、生れてから、まだ三年か四年しかたっていない幼い子どもたちの生活場面に、なんと気になることがばが満ちみちていることでしょう。

これは、まだ、ほとんど意識化されていないかもしれないけれど、若い家庭がもつ、価値観のあらわれであるのです。

そして、その時期に、幼い子どもたちは、まだ、よくわからないままに、まわりにある価値観の中で、その子どもたちの人格の形成がはじまるのですから、私たちとしては、気に

せざるを得ません。

しかし、これは、幼稚園や保育所のような、子どもにとつての社会生活の場に出てきて、はじめて、そのおかしさが浮いて出てくるのですが、家庭の中だけにいたら、ほとんど見えにくい事柄であるわけです。

それにしても、若い家庭、ほんの数年前まで、中学生や高校生であった若い人たちの価値観の形成がどんなものであったのか、との関連でとらえてみると、もつともっと気にしていることばだと思えます。

### 〈先生は、怒るときは、顔も怒るんだね〉

おかあさんからは、消極的な子で、と評されているY君は、おとなしいというより柔かい感じのする子どもです。どんな遊びにも、子どもたちのイザコザにも入ってこないのです。それでは、知らん顔かといえば、そうではなく、いつも、周辺にいて、事物の動きや、人々の関係、表情などは、じーっと見ているような子どもです。

一学期も終わりに近づいた頃、少しづつ友だちに、とけこみはじめ、よく話をするようになってきました。つい、おしやべりに夢中になり過ぎて、グループの仲間が、一生懸命に伝達しているのに、それを聞いていませんでした。そこで、担任が「自分たちの仲間が発言している時、そのことを大事

に思つて、話を聞ける人になろう」とやや強い口調で注意したのです。

その日のお弁当のとき、「今日はY君、めずらしくおしゃべりしていたね。なに話してたの」と話しかけると、それには答えずに、「先生は、怒るときは、顔も怒るんだね」というのです。「エッどういうこと?」と聞きかえすと、「さっき、先生、僕のこと怒ったでしょ。あのとき、先生の顔も怒ってた」というのです。「顔も怒らないで、怒れるの?」と変な会話をすると、「僕のおかあさん、怒るときも、顔は笑ってるよ」というのです。

「そう、ことばは怒つてても、顔は笑つてるのか、気持ち悪いな! そういうの」というと、「僕も、いつも、そう思つた」というのです。五歳になると、子どもといつても、本当によく見ているので、こわくなるくらいですが、「へんなの」と思える感性を育てるところか、失わせているのも、大人なのかと、Y君によって、気づかされました。

「子どもは、大人の半人前じゃなくて、一人前の子どもなんだ」。子どもの人格を認めるということの大事さを伝えあうときに、よく聞くことばですが、子どもには、子どものものの感じ方があるのだ、ということ、つい大人は忘れてしまつてゐるようです。

### 〈うそっこの世界〉

砂場でどろだんごを作っている子どもたち、それは、ただ作るだけでも、とてもたのしい遊びなのですが、それを「一つください」というと、それはそれは、うれしい顔をして、自分が作ったおだんごを、大事そうに差し出してくれます。それを、「おいしいね」といいながら食べると、子どもは、ニコニコしながら、じーつと見ています。手にしているだんごのやり場に困つて、今度は、お砂糖をたくさん入れて、甘いおだんごにしてください、という、そのおだんごを受けとつてこわし、白砂をまぜて、また作り出します。今度はきな粉、今度は塩まんじゅう、と、どんどん注文を出しても、子どもたちは、せつせと工夫をして、「はい、出来上がり」といつて、おだんごが並びます。

あまりおいしそうに食べていたからでしょうか、U君の手がスーとのびてきたかと思つたら、砂のおだんごを、本当に口に入れてしまったのです。「ああ、U君」まわりの子どもたちが叫んだ時は、U君は、ペッペッと砂を出し、水のみ場に向かつて走り出していました。その姿を追うように、「うそっこのに」とK子ちゃんがつぶやくと、まわりの子も納得という目つきでK子ちゃんを見えています。

「うそっこ」って知つていて、楽しくあそべる子どもたち、

砂場は、この楽しいあそびの世界の入口ですが、ここでよく遊びこめていないと、あそびなのに、本気で怒り出したり、こわがったり、泣いたりして、あそびを楽しく発展させられないのです。

絵本をよみあつて、共通のイメージを伝えあつて、遊びに入つたはずの「七匹の子山羊」や「三匹のヤギのがらがらどん」も、おおかみやトロルが出てくる度に目をおおい、耳をふさいで、本当にこわがつていては、あそびにならないのです。でもそんなとき、仲間たちの「うそつこだから」ということばに支えられて、一緒に逃げたり、追いかけてたりしているうちに、うそつこがわかつていくようです。

### 〈ユーモアを育てる〉

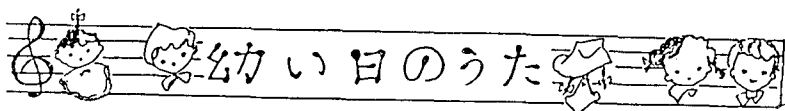
健康診断に見えた園医さんが、お医者様をこわがる三歳児を相手に、「アレ、君の背中のおへそは立派だね」などと、背中に聴診器を当てながらおっしゃると、まさか、と思つていても、思わず、手をうしろにまわして、うしろのおへそを探している子がいるし、暴れん坊には「君のうしろのおへそ食べられちゃったのか、ついてないぞ。もう一つになっちゃったおへそ、大事にしろよ」などとおっしゃると、パンツでかくして、神妙な顔をしている姿をみて、「この間、食べたへソモチ、とってもおいしかったけど、あれ君のだったのか

な」と合づちを入れると、うそつことわかつていても、おへそをおさえる手に力が入っているのが見えて、おかしくなります。でも、子どもって、本当に敏感な反応があつて、うらやましい限りです。子どもってと書きましたが、正確には、こういう反応をする子どもをうらやましく思うのであつて、子どもの中にもくそまじめな子もいて、こんな冗談も通じなくて、「何をバカなことを言つて」という冷たい目つきで、にらまれることもあります。

### 〈おわりに〉

こうやって、子どもというものを、子どもの生活を通してよくみつめてみると、随分とそばにいる大人たちの影響をうけながら、生きているということがわかります。だからこそ、大人の都合で、子どもたちを小さい型にはめこんではならないと思うのは、私たち大人になつてしまった者の反省ですが、子どもたちは、子ども時代を、もつとしなやかに、もつとみずみずしく生きて欲しいと願っています。子どもたちの感性は、大事にされると大事にされただけ、ふしぎに輝いてくるということを、私たちは、子どもの育ちの中に、みつめていきたいものです。

(ふじむら・みつ 平塚幼稚園)



岩崎健・岩崎愛

健「お母さん、雲が赤いよ」

「お母さん、雲が水色になったよ」

「お母さん、雲が動いてるよ。空も動いてるよ」

(夕暮れの空に向かって。健三歳)

健(早朝五時半)「お母さん、朝だよ」

「けんちゃんが手を持ってあげるからね、お母さん、起きて」

母「けんちゃん、おはよう」

健「お母さん、おはよう パジャマ全部脱いだよ」

(丸裸で立っていました。健二歳半)

愛「愛ちゃんが大きくなったら、お父さんとお母さんと、愛ちゃんと健ちゃんと、みんなでアフリカに行こう」

母「そうね」

愛「お弁当持って行ってあげようね」

母「お弁当？」

愛「雨が降らないんだからね」

(愛五歳)

愛「空飛ぶジュータンに乗っているんだよ」

母「どこまで飛ぶの？」

愛「えーとね、天の神様のところまで」

母「ふーん、天の神様に何かお願いするの？」

愛「皆を元気にさせますようにって、お願いしてくるの」

(風呂敷をジュータンに見たてて)

愛「人間は神様がつくったのだから、自分を大切にしないで

や」

母「(一瞬無言) それ先生に教わったの？」

愛「愛ちゃんが考えたの」

(愛はカトリック系幼稚園の年中組)

愛「今日ね、探険してきたの」

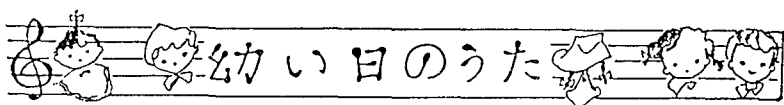
母「素敵ねえ、どこを探険したの？」

愛「知ってる道と知らない道！」

愛「愛ちゃん、イエズ様だーいすき、マリア様だーいすき。こうして(胸の前に手を合わせて) 目をつぶって静かにしていると、神様の声が聞こえるんだよ。『そうだよ、そうするのがいいんだよ、そうしてごらん』って」

(夜、眠りに落ちる前に)





健「パジャマ着られない！ズボンはけない！

お母さーん」

愛「けんちゃん、こうすればいいよ。じゃ一緒にしよう。そうすればできるでしょ」

（お風呂上がり）

愛「お店のおばあちゃんの家に最初にいくの？」

母「お池のおばあちゃんのところよ」

愛「なあんだ、お父さんがずっといたところですよ。お店のおばあちゃんはお母さんのいたところ、それから二人は結婚した！」

愛「世界にはひつくるめて何人いるの？」

母「五十億かしらね」

愛「億は髪ぐらい多い？」

保育室のおばさん「今日、健ちゃんとおもしろいのよ。『健ちゃんのお母さん、岩崎さんだよ』って言うのね。『じゃ健ちゃんは？』って聞いたら『けん／＼』」

（公民館保育室に健をお迎えに行ったとき）

愛「おばあちゃんも最初は赤ちゃんで、子どもで、お母さんだったの？それから年とって、しわしわができて、おばあちゃんになった。そして愛ちゃんが生まれて、愛ちゃんが赤ちゃんを生む！」

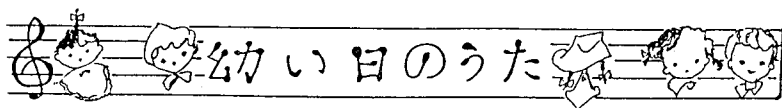
（愛四歳九か月）

子どもと共に育ち合う関係を願っていたはずなのに、気がつくときとげとげしい声になっている情なさ。道端の名も知れぬ雑草に心ときめかすとき、気忙しい時の流れから解き放たれて、この一瞬が我がものとなる。

半田さんによって口頭詩を知ってから、聞く耳を持つよう心した。子の言葉を書き留めながら、私も、自然に感じる心、老いたる人をおしむ心、天上に憧れる心を取りもどせた思いがする。

働く母親の唯一良い所は、子どもに対して心の痛みを持つこと、と半田さんは言われたけれど、仕事を持たぬ私にとっても子は心痛む存在。互いが自分らしく生きられるような一日一日の積み重ねを大切にしたい。そんな感受性を育てることが豊かな明日へつながるのだから。

（母 岩崎久美子）



丹 原 茉 伊

—— 大きくなったら…… ——

「茉伊は赤ちゃんの時、

梅干し食べてた？ 人参は？ ごぼうは？」

「食べてたよ」

娘のほっぺがニッコリ笑う。

「もう茉伊は、赤ちゃんじゃないよね？」

「そうね、もうおねえさんね」

「茉伊は大きくなったら何になるの？」

「小学校へ行くの」と言って胸をはった。

—— もういいかい ——

「森が危い」というテレビを見ました。酸性雨で森の木がしだいに枯れ始めているというのです。

「木がなくなると、どうなるのかしら？」と私。

「そりゃあ、大変なことだよ」と夫。

「かくれんぼができなくなるよ」と娘。

—— 洗濯 ——

「おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました」

むかし話をしていると、

「川へお洗濯に行くの？」

「川じゃないでしよ、うちでしよ」

「えっ うち？ 川じゃないの」

「川は汚ないでしよ」

フーン、確かにきれいな川は少なくなってきました。

—— バク ——

「おかあさん、バクって、夢を食べるんだって」と娘

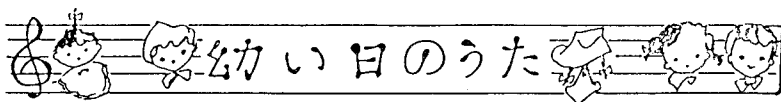
「どうやって食べるの？」と私

「焼いて食べるの」

「どんな音がするの」

「チン」

どこかで、オープン・トースターの音がしましたか。



## 幼い日のうた

### 遅刻

ある梅雨の朝、娘を保育園に送っていく私の頭の中で、時計の音がせわしない。

保育園に着くと小雨が降ってきた。

「ああ、また雨か」と思った時

「静かな雨」

「えっ」

「静かな雨だね」と娘の声

ふと、時計の音が消えた。

### ——バンドエイド——

魚屋さんに鰯を買いました。袋に入っている鰯をみて、

「おさかなさん血がでているね」

「痛いのかなあ」

「バンドエイドはってあげようか」

と娘が心配そうに言います。骨抜きしている手もともとまったりして、父母は苦笑。

今夜のつみれは、バンドエイド入り。

### ——ナウシカ——

親子三人で、「風の谷のナウシカ」を見終わった帰り道

「赤いお目めのオームは、おこってるの」

「青い目の時は……」

次を言おうとした時、ちょうど茉伊の目の前に信号

「早くわたりなさいっていつてるの」

以来、青信号をみつけると

「やさしいオーム」ですって。

### ——夏バテ——

父親の顔に流れる汗、タオルを持ってきてくれる茉伊。ダ  
ラリとしがちな私。

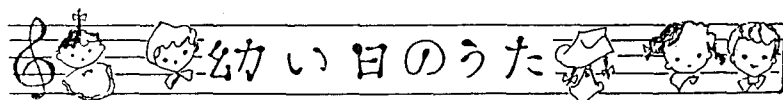
「アツイアツイ言ってるの」

「ビシッとやろうか」

子どもに気あいを入れられてしまいました。

(茉伊三歳)

丹原愛子・恒則(男も女も育児時間を！ 連絡会会員)



——はっぱのトンネル——

中井 哲

ママ ミテ ミテ

「なあに？」

ホラ ハッパノトンネルダヨ！

(三歳)

(目の前にあったのは、道の両側にある木々が上の方で重なりあって作ったトンネル。風に吹かれてはっぱが心地良い音を出し、私たちは、はっぱのトンネルをぬける間、不思議な空間にひきこまれていくようでした)

——コドモハオトモダチ——

ヤネヨリ タカイ コイノボリ

オオキナ マゴイハ オトウサン

チイサイ コドモハ オトモダチ

オモシロソウニ オヨイデル

(すぐ作詩をしてしまったり、作曲をしてしまう、むすこです。この歌も、まちがっているのか、作詩をしたのか、わかりませんが、訂正してしまうには、おしいほどの詩なので、そのまま、歌わせているのです。)

母 中井三枝

杉本 愛

ママ

大きくなったらね

あいちゃん

おもちゃ いっぱい かってあげるね

(三歳)

(柱で身長を測りながら。休日に)

ママ

あいちゃんの影と

まざらないで。

(保育園に迎えに行つて、帰る途中に。外燈に照らし出される自分の影をととても大切に思っているようです)

幼い日のうた

私 ママ おうちにいようかな 役所にいかない

で 愛ちゃんと太郎くんといっしょにいよう  
かな

愛 役所のおともだち 泣くよ

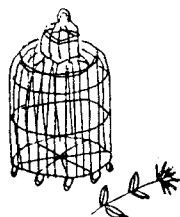
(夜、寝床で。とても疲れてしまった日に)

愛 ママ これ なあに

私 しもばしら よ

愛 ありさんのおうち

(庭の霜柱をみつめて。朝)



「ね、お母さん 風は生きてるの?」

「どうして?」

「だって、窓をガタガタゆすぶって、  
うおーうおーってほえてるじゃ」

(86・1・6)

お母さん! あすなの髪ね

お日さんがあたるところは、きいろになってね  
お日さんがあたらないところは、  
くろいの。

(酉陽があたる部屋で鏡にむかってすわっていて、台所に  
いる母の所へすつとんできて)

(86・1・11)

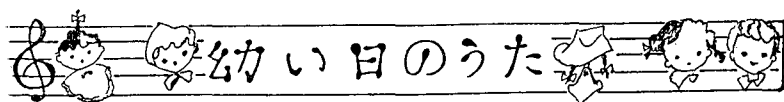
初めて子どものことばに気をつけてみました。

この子の青色の瞳が、いつごろから、私のように濁った  
目になるのでしょうか?

あすなも四月から保育園です。

(母 平井和子)

平井 あすな



平 井 有 太

あ、  
びんが なかよししてる

(空瓶が並んでいるのを見て 二歳八か月)

あ、

まんまるいお月さま きえちやった  
有太のおうちまでこなかった  
もう おうちかえるんだって……  
くものカーテンに はいっちやった

(満月が雲に隠れるのを見て 二歳十か月)

ふじさんの雪はねえ  
雲がたべちやったんだよ

ふじさん 雲にかくれてるねえ  
ねんねしちゃったのかな  
もうすぐ雪のおようふくきて  
おっきするかなあ

(毎年行く山中湖で 三歳)

ねえ

どうして にんげんは  
ことばをしやべるんだろう

人は死んでも

また夏がまわってくるの？

(四歳五か月)

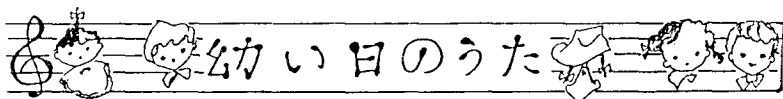
ねえ

地球がまわっているよ！

(唐突に 四歳六か月)

今一〇歳の有太が幼いころ言った言葉を書きとめてい  
ました。二歳半の下の子は、まだ親がハツとするような  
ことを言ってくれず——あるいは親が気づかず——残念  
ながら今回はパスです。

(母 幾島幸子)



## 内山 大輔

これはいへんなことになってしまった……

(しばらく無言)

(はじめて浦島太郎の絵本を読んであげた時、なに気なく読んで上げた昔話ですが、この結末はとてもショックだったようです。でもよく考えてみると、恐しいエンディングですよ。四歳)

今日はなんの夢をみようか？

ママとジェットコースターにのって、ハンバーガーをもって、お花畑にいく夢にしよう！  
じゃー手をつないでね。ゆくよレッツ・ゴー

翌朝

ママ、きのう夢の中でどこにいったの？ ぼく一人でジェットコースターのつたよ

(母と子と二人ならんでねましたが、彼は手をつなげば、いっしょに夢の中にいけると信じて、毎日なんの夢をみようか相談しました。五歳)

ボクのうえ木鉢は、ボクがおじいさんになって

も、アサガオの花、咲かないよ

「どうして」

種をなくしてしまったの

(一年生になってアサガオのたねまきを学校でした時のことです。六歳)

ぼくは気は長いが、髪の毛は短い

(真面目な顔でいうので、おかしいのです。七歳)

シンデレラってこんな重いクツをはいて、ダンスをおどったのね

(お店においてある手づくりのガラスのハイヒールは、ずっしり重いのです。お客様のお嬢さん——四、五歳くらいかしら——は手にもって、驚きながらいました)

次男の翼は一歳八か月、まだ小さくてことばも、ブツとかワンワン程度なのです。それで長男の大輔(現在八歳、三年生です)のおさないころ、心に残って書きとめたり、記憶していたことばを書きました。

(母 内山裕子)

新しい家庭科を創るために  
——小学校では——

村田 尚子

家庭科の先生なんて  
イメージ  
合わないよ！

「先生こんにちは！」  
「あらいらつしやい。どう、中学  
生になった気分は？」  
「まだゼーゼン気分出ないよ  
う。オッカナーイって感じだよ、  
中学って」  
「先生さ、今度何年？」  
「え、それがネ、何年でもない  
の。あのねえ、家庭科の先生にな  
ったんだよ」

「えーっ、ウツソー、ウソでしょう？」  
「ホントよ。ホントにホント」  
「えー、ヤダー、先生が家庭科なんて、イメージ合わないよ  
う、ねえ」  
「そうだよ。全然合わない」  
「何でえ、なんで家庭科なのう。オッカシイヨー」  
もう大変なさわざです。  
八五年四月六日、私が家庭科担任として発表されてからと  
いうもの、三月に卒業していった旧担任クラスの子どもたち  
が連日押し寄せてきては、こんな会話がくり返されました。  
子どもたちだけではありません。校内や通勤途中で出会う  
お母さん方からも、似たような話が出ます。  
「先生、どうして家庭科の先生なんかになったんですか。も  
つたいないですよ」  
「ご自分から希望なさったんですか。それとも、ムリヤリさ  
せられたんですか」  
中には、かなりドキツとさせられることをおっしやる方も  
います。  
「先生、子どもとつき合うのがイヤになったんじゃないでし  
ょうね」——（家庭科の先生は子どもとつき合わないの？）  
「担任、持たせてもらえなかったんですか」  
いやはや、マイッタマイッタ。



それにしても、子どもたちといい、お母さん方といい、これは一体どういうことなのでしょう。ひとりくらい、アラすてきですねとか、守備範囲を広げましたねとか、前向き的好意的反応があってもよさそうなのですね。

職場の同僚にしてもそうでした。家庭科担任村田の校長発表のあと、不思議そうな顔をしたり、専科と〇〇は三日やつたらやめられないそうだなどと意味不明のことをおっしゃったり、何も今さら……と忠告めいたことをささやいたり、他意があるのではと、ウサンクサソウな目を向けたり……。

でもまあ、こうしたさまざまな、かなりホンネと思われる周囲の反応のおかげで、家庭科という教科や家庭科担任に対する子どもたち、親たち、教師たちの考え方や感じ方がわかって、私としては大いに参考になったというわけです。

子どもたちの「イメージ合わない」ということば。子どもたち自身は、

「どうしてイメージ合わないのさあ」

という私の問には、

「だってえ、ねえ」

「家庭科って感じじゃないんだもん」

などと、もっぱらフィーリングでしか答えてくれませんが、私なりに解釈するとこんなことになるのでしょうか。

家庭科、すなわち家の中のこと、おもに料理や裁縫という

とらえ方。ムラセンは、結婚こそしているものの、子どもはいないし、料理や裁縫が得意とは思えない。また、今までのウチの学校の家庭科の先生は、見るからにやさしそうな若い女性だったのにムラセンはちがう。あんまり女性的じゃない。したがって、家庭科の先生というイメージではない。わからなくはありません。私自身、いわゆる料理・裁縫はあんまり好きではありませんし、レース編みなんてしたこともないのです。ですから、家庭科の教師イコール「家庭的」な「女らしい人」というふうに考えるなら、全くイメージ合いません。

では、お母さん方のことばにある、「家庭科の先生なんか、もったいない」「担任を持たせてもらえないのか」などというのは、どう解釈したらいいのでしょうか。

「家庭科の先生なんか」というのは、子どもたちの言う「イメージ合わない」というムジャキなものとは少し違うようです。家庭科という教科やその担任に対する差別感が働いているような気がしてなりません。

事実、学級担任をしていた時、こんなことがありました。いわゆる主要教科（ダレが言い出したことばなのか——）と言われる国語、算数、社会、理科といった教科と、音楽、図工、家庭、体育といった教科とは、通信簿の成績が同等に受け取られていないらしいのです。

音楽、図工、家庭、体育は、ABC三段階のAなのに、  
国、算、社、理にはAがひとつもなかった子がいました。八  
教科のうち半分Aなら喜んでいいはずなのに浮かぬ顔。

「だって、うちのお母さんこんなのでとって、国語や算  
数なんかでAとらなきやダメって言うんだもん」  
というのです。

「そんなことないよ。どれだって同じだよ。半分もAがつい  
たなんてスゴイじゃない。先生がホメてたって言いなさいよ  
ネ」

こんな私の慰めも、その子にはあんまり役に立たなかった  
ようでした。

家庭科なんて、どうでもいい教科。だから、その担任もまた、  
どうでもいい存在。それなのになんでそんなものになん、かな  
ったのか。とまアこういうことなのでしょう。

「もったいない」というのも似たような発想。「学級担任を  
持たせてもらえないのか」というのは、発想は似ています  
が、これはもう少し深刻。

時に、マスコミ報道にも出てきますが、モンダイ教師が担  
任をはずされて専科担任になった、させられたということは  
よくある話です。このモンダイのなかみというものがまた問  
題で、管理職や教育委員会の言うことを聞かない、あるいは  
オカミの意に添わない教師という場合が多いようです。学級

担任としてはダメだが専科担任ならまあいいやというのもし  
どい話です。父母の方々からも、いろいろな理由で、担任変  
えろという要求が起こることがありますが、この場合も、専科  
担任にすることで一件落着。自分の子どもの直接の担任でな  
ければ納得してしまうという例も少なからずあるようです。  
(私自身、職場の暴力教師に対して、専科担任にすることで  
妥協した苦い経験があり、今思えば痛恨の極みでもあり、自  
分自身の専科担任についての認識不足が悔やまれてならない  
のです。)

まアそういった現実の中で、教師生活二十数年という私が  
初めて家庭科担任になったのですから、担任をはずされたか  
と思う人がいても仕方のないことかも知れません。私が学級  
担任としてしていたことは、決して管理職や教育委員会から  
歓迎されるようなことではありませんでした。

では、事実はどうだったのかと申しますと、担任はずされ  
たり、いやいやなったり、イメージチェンジをして女らしさ  
をアピールしようとしたりということでは全くないのです。

家庭科の先生というものになってみたくて、希望に燃えてな  
ったのでありまして。

でも、本当のことを言いますと、先ほどの子どもたちやお  
母さん方のことを責める資格は、私にはないのです。私自  
身、家庭科なんて、どうでもいい教科くらいにしか思っていな

かったのです。少なくとも数年くらい前までは。

ところが、Weという本を知り、家庭科に対する考え方が変わったのです。ちよつとオーバーな言い方をしますと、家庭科に対する意識革命ということになります。なるほど、家庭科とはこういうものであったのか、こんなこともできるのか、全くWeの言う通りだなア、というようなことで、私もいつかやってみたいと思うようにさえたのでした。

機会は思いがけず早々とやってきました。八五年三月、家庭科担任の若い女性が結婚のため転任。私の希望は、かなえられることになりました。

しかし、いざ実現という段になって、不安の雲がムクムクと湧いてきたのです。いくら、家庭科は料理・裁縫教科じゃないといったって、料理好きでもなければ、不器用この上なく、針と糸は全く苦手なんていうヒトが家庭科できるかな。

今までWeに登場したようなユニークな実践もできそうにないし、新しい家庭科の創造についての理論的裏づけも持ち合わせていない、大丈夫かなアなどなど。でもまア、いざとなったら、半田さんがいらつしやる、Weがある、Weの編集室に泣きついて……などとムシのいい理由を見つけて不安の雲を追い払ったのでした。

私が家庭科担任をすることで、かつての私が抱いていたような家庭科に対する誤った変え方や固定観念を、少しでも変えていけたらいいなア。少なくとも「家庭科なんてくだらねえよう」と言っていた旧担任クラスの男の子たちのような子を少なくすることができたらなア。そんなことを思いながら、私は、私にとってはかなりの決断をして家庭科の先生になったのでした。でもまさか、新米家庭科教師の一年間をWeに書くことになろうとは、この時の私には、ユメにも思えないことでした。

なお、家庭科だけでは私の担当時間が他の教師にくらべて少なすぎるということで、家庭科週十四時間（五・六年七クラス）の他に、四年生一クラスの図工週二時間、三年生の読書指導四クラス各週一時間を兼任し、三教科、四学年にわたって週二十時間を担当することになりました。

こうして、私は、家庭科の先生、図工の先生、図書の先生という三つの顔を持って、八五年のスタートを切ったのでした。

（東京都杉並区立高井戸小学校）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

# 新しい家庭科を創るために

——中学校では——

磯部幸江

## 家庭科の教師

やっています

### 一、自分を見つめる事から

八五年We夏季フォーラムが終わってから、ずっと考え続けただかまっていたことがある。「なぜ、不覚にも涙などこぼしてしまったのだろう」埼玉に住んでいるし、学校と家を往復している生活に変化をつけよう、実行する人になろうと、実行委員をかってでた。家庭科を考えてみ

たいという問題意識があったので、家庭科の部屋を担当し、司会も務めることになった。その分科会のある。家庭科教師としてどんな立場にあるとか、今の中学校はたいへんだとか、家のこともあつてと、自分では明るくさりと聞いたかったのに、話しているうちに涙があふれ出てきた——。会話はしなくて気まづくなったように思う。その場におられた人たちにどんなふうに使え止められたか、うまく表現できないのかもしれない。半田さんが上手にカバーしてくれて会が進んだのだが、私としては本当に不覚にもであった。だっ子的うで恥ずかしいという思いがまずあつた。涙は女の武器と見られるそんな甘え、泣けば私の怠惰が水に流して許してもらえようような打算のある自分への批判。あれが、私の自己表現だったのだと居直ってみたりもする。

きれいごとでない本音のところで書いて……という編集部の依頼を受けた時、あの場面がよみがえってきた。自分を見つめることから書いてみよう。そして、生徒とのかかわりを洗い出してみよう。新しい家庭科を創るためにというタイトルとは、ほど遠い内容であることを御容赦願ひ、御意見御批判をいただきながら、それをエネルギーにしてやっていきたい。

### 二、学校では——女性専科を返上したい——

教育学部を卒業し、教員になって十三年目。現在勤務して

いる中学校は、生徒数一五〇〇名（三六クラス）もあるマンモス校。家庭科二名、技術科三名の教員で、技術・家庭科という教科を担当している。全面共学ではなく、一年生の途中まで共学で食物と金属加工の学習をし、その後別学になり、女子は家庭科、男子は技術科となってしまうのである。なぜそうなのか、制度、教員数、意識の問題と原因は多々あるがそれら一つ一つ解決し改善していくのは、これからの課題である。一年生を担当しなければ、クラス担任にならなければ、教科担任制の中学校では、まったくの女性専科になってしまう。

廊下を通ると、「まだかな、まだかな〇〇のオバさん」と、某コマーシャルではやしたてられたり、保護者会がある、「保護者の方は体育館ですよ」とひやかされたり。私と男子生徒との接点は、そんなところか。授業や部活動などがかかわりがなければ、私はただのオバさん。多少うるさく注意されようが、聞き流していればよいという存在。とは思いたくないが、先生も生徒も過密状態で、そのような面も大いにあるのが現状である。

家庭科——家庭的イメージ。お母さんの存在感を持つ人。太めで口やかましい私は、いつもそのイメージで見られていく。時々、そのように装う時もあるのだが、できるだけそれは碎いてしまいたいと願っている。余談だが、夫はそのイ

メージにすっかりだまされたと、今でもぼやいている。授業や生徒とのいろいろななかかわりの中で、仕事をしている姿、日々の生活を大切にしながら生きている人間であることを出していきいたいと思っている。

### 三、授業から——一時間目の授業——

四月。桜咲く春。桜の便りは四月末まで聞けなかった東北育ちの私にとって、満開の花の中で迎える入学式は、とても心はずむ。気分は、新しいランドセルを背負い、やる気いっぱいだった小学校の時代までさかのぼる。「今年こそは、もっとまじな授業のできる先生に」と思い続けて十数年たってしまった。出会いは刺激である。教師にとっては、同じことの繰り返しのようなではあるが、生徒たちは違う。その表情から、私の初心を思い起こさせ、新たなやる気を起こさせてくれる。

一時間目の授業。生徒たちとどんな出会いをするか、わくわくする時である。

#### （一）一年生に（小学校とは違って）

標準服が決められている本校は、男子は詰めえり学生服。女子は、ブレザー、ひだスカートである。少し大きめの服に包まれてかしこまっている一年生。家庭科の授業一時間目は

私をピーアールすることから始める。「家庭科の先生」と呼ばれるより、「磯部先生」と言つてほしいと強調する。家庭科だよりで紹介することもある。生徒会機関紙に載せられたものを配った時である。「似てない」「うそだあ」と声が上がリ、砕けた雰囲気になり、彼らの緊張感がとける。ひとしきりワイワイやつてから、家庭科って何だろうという本論に入っていく。

#### ア、教科の名称 技術・家庭科

イ、学習の内容 食物と金属加工の学習。食物では、健康に過ごすために何をどのように食べればよいのかを考え実行しようという目標を話す

ウ、学習の方法 授業をしていく上でのいろいろな約束を決める。最初が肝心であるので、これらは、しっかりとやるうと思う

小学校の授業で思い出に残っていることとか、これからやりたいことなどを話してもらう。こういう発表がスムーズにいく時もあり、聞く態度もなくして何度も注意しながら進めることもある。その様子が私も今年は楽しくやれそうだななどと、判断してしまふ。小学校の思い出は、圧倒的に調理のことが多い。そして中学校でも作って食べたいという要望は高い。

二時間続きの授業が週一回行われる。行事などでつぶれて

月に一〜二回のこともある。家庭科の時間が待ち遠しいと思われるようになるのがささやかな願いである。先生がキライだから教科がキライになることもままあるが、できるだけそうなるのはくないと思いつつも、生徒に迎合して教えた内容とかけ離れるのも本意ではない。理論的に科学的に学習するのだと、小学校との違いを述べ、期待を持たせるようにして一時間目の授業は終わる。

#### (二) 二年生では（生活を学ぶ）

持ち上がりで教えることが多いので自己紹介などはやらず、「家庭科とは」という話から始める。教科に対する生徒の意見や感想では、家庭科は作って食べること、縫うことというのが多数をしめる。

「家庭科って、およめさんになるための修業。はっ！これからはまじで、やつぱり生活していく上に大切なこと（ぬったり、作ったり、考えたり）を教えてくれる教科」（永井）というのが本音か。ましてや、本校では二年生から別学になつてしまふのでなおさらである。生活を大切にして、生活を学ぶという、家庭科の学習の目標を繰り返して話す。

「今日、初めて授業があった。私の二年生の家庭科の目標は友達と協力しあうことです。一年生よりむずかしいのががんばりたいと思います。あと、授業を大切にしたいと思います」

(中山)

「他の教科とちがい実習することが多いせいかなりきらいな教科ではありません。器用ではないので上手にはできませんが、がんばりたいと思います」(山本)

「一年生の時は技術もやっていたのだが、さすがにのこぎりや木を切ったりすることはとても大変だった。二年になってから家庭科だけということだが、一年間ずっと家庭科というのなんとなくつまらないような気もする」(小林)

生徒たちが今まで気づかなかったことや、見方を変えていくような学習内容を考えて、授業を組み立てていく一年間の始まりである。前年にやった授業を反省し、こんなふうに行うつもりで意欲に燃える時である。日々変化していく生活の中で、その生活をどう教材の中に生かしていくか、自分の力が試される。次の中村さんの問いかけにどう答えていくか、私への挑戦状として受け止める。

「私にとって家庭科はおもしろくありません。小学校の時はまあまあだったけど今はキライです。本当言ううと技術の方が良かった!! 女だからって、どーして家庭科を、男だからってどーして技術をやるのでしょうか!! 私には分かりません。これこそ男女差別! 体育は男女の体力の差だから仕方ないし、まあ許せるけど、家庭科や技術科はどうしてでしょう。その答えが分かるまで私は家庭科がキライでしょう」(中村)

#### 四、家庭科をどうする——私なりに模索して——

家庭科をめぐる情勢。「家庭科教育に関する検討会議」の報告を新しい制度に生かす教育課程審議会が発足し、一九八八年六月に答申が出される。今、変化の時。裏がえせば、どのようにでも変えていけるのだ。だったら動き出さねばならない。グチることから一歩踏み出し、主張し、実践していくことだ。ところがやはり、グチの域から脱するのはむずかしい。職場の人間関係や生徒との関係、はたまた家庭の問題、時間がない、力がない……。でも、自分に言いかけせる。お上が変わらないからだめなのだと言任転嫁はたやすい。今の私にとって、楽をしたいという自分との戦いなのだ——。自信を持って仕事をしているわけでもなく、いつもうじうじとああでもないこうでもない落ち込んでいるのだが、根が陽気なもので、中学生ぐらいの精神年齢がびったりじゃないかとからかわれながらの毎日である。

最後に、家庭科だよりもあるように、同じ職場で家庭科教師としてがんばる小島輝子さん。まだ未熟だからと謙遜しながらも、若さと情熱でいいねいにわかりやすく授業をしておられる。We読者であるという共通項から、授業や悩みを語りあう頼もしい仲間である。次号からは、彼女と共に模索し失敗と反省を繰り返しながらの授業の記録を報告していき

い。よろしくお願い致します。



1-2組  
藤部先生

「生徒会機関紙」から

調理実習の時は、毎回プリントを刷ってくれたり、スカートを制作の時は、布を使って、各部分の説明をしてくれるなど、とてもまめな先生です。

先生の特徴といえば、子供っぽくって、みんなとよく気が合うところや、私達のように、髪が段カットで、パーマがかかっていないというところなどです。

(大宮市立大砂土中学校)

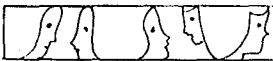


3-12組  
小島先生

とってもやさしくて、職員室でも、割とおしゃべりしてくれます。何となく、先生という感じがなくて、気軽に話せるいい先生です。

授業の方では、家庭科を教えながらも、調理実習なども心待ちにしている楽しい授業です。一つ一つ、ていねいに指導してくれるので、いろいろな面で助かってしまうこともあるので、頼れる先生です。

### 編集室からあなたに



出会い、語り合おう！ We '86年春の公開ゼミナール  
「育つ・育てる・育ち合うー今、自分が生きる場でー」

いじめ！ 体罰！ 学校や教育をめぐる論議がまき起っています。育てるとは、何なのでしょう。自分の位置を固定したまま、自分に都合よいように子どもをいじくることを、私たちは、“育てる”と錯覚してはいないでしょうか？ 家庭で、地域で、職場で、私たちは自分を育てているのでしょうか？ 目先の対応に追われる日々の中で、一度じっくりと語り合ってみませんか？ 育ち盛りの人たちの参加、大歓迎！

\*ゼミの後、『私塾霞国語教室風景』の出版を祝い、武田秀夫さんを囲む会を中野サンプラザ地下食堂で開催します。ふるってご参加を。会費4000円。ご参加の方ウイ書房に至急ご連絡下さい。

- \*主催 ウイ書房、Weの会
- \*日時 3月29日(土)PM1:30~5:00
- \*会場 中野区勤労福祉会館(国電中野駅南口から徒歩3分)  
Tel. 03・380・6941
- \*参加費 600円(18歳未満300円)
- \*内容

シンポジウム(育つ・育てる・育ち合う)

武田秀夫・森幸枝・属 静

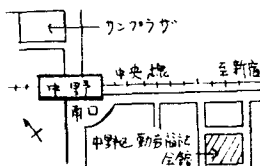
寸 劇(男ならやめてみなー新“男の道”のススめ)オットコ一座

司会 芦谷薫・丹原恒則

\*保育室 あり、先着順15名 3月25

日までにウイ書房にご連絡を。

Tel. 03・326・1380





☆ ☆

新し

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

はじめに

と私は考えているからである。しかし、科学技術の進歩は、自然界での人間の支配力をますます強める方向に突っ走っている。こんななかで、人間の豊かな生活の追究は、自然界の営みやしくみをよく理解することがより一層重要になつていゝると思われる。家庭科が生活文化の継承と発展の分野を担つてゐる教科であるならば、授業内容に自然界での人間と他の生き物たちとの共生のあり方を考える視点が欠かせないのではないかと思う。

家庭科を担当して一〇年以上が過ぎたとはいへ、前述したようなことを考え始めてまだそう長くない。これから一二年間私が家庭科で何を、どう教えたらいいかを試行錯誤してゐる姿をここで映し出していかうと思う。みなさまのご指導・ご批判をよろしくお願いします。

### 甲佐高校での家庭科男女共学の歩み

家庭科教師が「家庭科は男女ともに学ぶ教科である」と職員会議で発言していつて、三年普通科Aコースに「家庭経営」の男女必修二単位の履修が始まつたのは一九六八年のことである。そののち、共学は三年間実施された後、職員の見解が契機となつてしばらくなくなり、七六年から「食物I」と「被服I」と、商業科目との選択履修に変わったが、八一年度まで継続した。

導・ご批判をよろしく願います。

家庭科教師が「家庭科は男女ともに学ぶ教科である」と職員会議で発言していつて、三年普通科Aコースに「家庭経営」の男女必修二単位の履修が始まったのは一九六八年のことである。そののち、共学は三年間実施された後、職員の定員減が契機となってしばらくなくなり、七六年から「食物Ⅰ」と「被服Ⅰ」と、商業科目との選択履修に変わったたりしたが、八一年度まで継続した。

ラスの予定である。

### 生徒のようす

八五年度の共学クラスの授業が終わったところで、次のような調査を実施した。今回は第一回目なので、本校の状況の紹介と私の家庭科のとらえ方や授業の反省を、調査結果の考察をしながらまとめていきたいと思います。

回答者 普通科 A コース 三年男 58 名・女 62 名、計 120 名  
設問 1 あなたの家には田畑がありますか

①ある 男 47 名・女 44 名、計 91 名 (76%)

②ない 男 11 名・女 18 名、計 29 名 (24%)

校舎の周囲は田んぼである。米、麦、ハウス園芸などの耕作は季節折々の美しい風景で私たちを楽しませてくれる。九州山脈から水が集まり、緑川という一級河川が形成され、川幅が広がった地域に本校は位置する。生徒はこの水と同じように、周囲の農山村から登校してくる。しかしながら、24%の家庭で田畑は所有されていない。

設問 2 田畑からの生産物は

①わが家の収入の全部又は大部分を占める 男 9 女 10 %

②わが家の収入の一部となる 男 19 女 12 (35%)

③すべてわが家で消費してしまっている 男 15 女 17 (35%)

④どうなっているか、わからない 男 4 女 4 (9%)

八二年度の教育課程改訂に対して、事前に職場での学習会がくり返され、家庭科の履修形態・内容が検討されたという。そして、教務部の教育課程係を家庭科教師が積極的に引き受け、職員の家庭科男女共学の理解がはかれるよう努力していった。その結果、職員は、現在のような生活環境のなかで生活について学ぶ家庭科を女子だけでなく男子にも学ぶ必要性があると理解はした。しかし、高校生にとつての身近な目標は、進学希望者にはそのことを達成することである、という意見が強く出た。したがって、普通科では一、二年次に女子のみ家庭一般四単位履修、三年次に A コースで男女共学必修家庭一般二単位、選択で家庭経営・住居を共学で二単位、商業科では二、三年次に家庭一般を履修してきたが、その三年次二単位を男女共学とすることになった。

A コースの女子は家庭科を必修で六単位、選択を加えれば八単位の履修となる。男子は必修二単位、選択科目をとれば四単位の家庭科履修となる。商業科の男子は必修の二単位のみである。八五年度は、A コースの生徒数が男子 58 名、女子 64 名、計 122 名、三クラスであった。このなかで家庭経営・住居の選択は男子 33 名、女子 11 名で、一クラス編成。八六年度は男子がさらに増えて 35 名、女子 4 名の一クラスの予定である。商業科は男子 15 名と女子 26 名の一クラスと、女子のみ 40 名のクラスであった。八六年度は男子 22 名、女子 58 名で二ク

わからない生徒が約一割いる。農山村地域とはいえ、㊦と㊧の兼業農家が約七割を占める。よく遅刻する生徒にその理由を尋ねると、両親ともに本人が眠っているうちに勤めに出て、寝坊したという。朝食ぬき、一人食はこんな状況のなかで、当然出てくる問題である。

**設問3** 今まで農作物を育てた経験がありますか

④ある(28%) 男23・女11 ㊦ない(72%) 男35・女51

「ない」が約七割、特に女子は82%と高い割合を占める。田畑の有無でみると、田畑のない家庭の女子は18名中17名が作物を育てた経験をもっていない。

**設問4** 家畜を養ったことがありますか

④ある(33%) 男29・女10 ㊦ない(67%) 男29・女52

農作物と同じように女子に経験なしの割合が高い。「ある」は「鶏に餌や水を与えた。牛にはたまに雑水や草などを食べさせる」が代表的なもので、豚の世話もある。

設問3や4は、生命の重みや尊さをつかみとる力を養うために、子どもの発達上、欠かせない経験ではないかという私の思いこみがある。さらに、人間の食べ物とは何かについて、膚で感じとることができないのではないか。食べ物の安全性が問われている現状のなかで、本能的にその是非をかき分ける力が育つ源となる原体験ではないか、と考えている。

第三五回(八六年一月) 日教組全国教育研究会家庭科分

科会では、神奈川県湘南教組小出小分会の山崎公江先生から小学校低学年からの家庭科のとりくみとして、一年で動物とあそぼう、草花あそび、いろみずあそび、木の実で作る、和紙づくり。二年で豆腐づくり(栽培から)、パンづくり、朝市、米づくり、野菜づくり、養鶏場・養豚場の見学。三年でそばづくり(栽培→そばがき、そば、お手玉、まくらづくり)。四年でじゃがいも(栽培→くず湯づくり)、大豆、落花生(栽培→調理)。五年でさつまいも(栽培→おやつ作り)。六年で米(田起こし→もちつき、わらを使って縄ない、ぞうり作り)、野草を食べよう。飼育部の活動としてウサギ・アヒル・チャボ・タヌキ・ヤギ・ニワトリなどの飼育を、保健部で石けんづくり、児童活動部で縁日集会(手作りおもちゃ作り)といった活動の報告があった。「これ等の体験を通して、生活事象の中の原点・原型、原材料を学んだり、自然と共に生きる大切さを理解したりすることができないのではないだろうか」(全国教研レポート、11頁)という考え方は、私の五年前からの視点と重なる。

**設問5** 昔どんなものを食べていたか、祖父母や親たちから話をきいたことがありますか

④ある 男50・女50 ㊦ない 男2・女7

話をきいたことがない者の9名中8名が、農作物も家畜も育てた経験をもっていない。

**設問 6** 食べ物がもともと「生命あるもの」であつたことを考えていますか

① いつも考える 男 3・女 1 ② ときどきそう思う 男 41・女 53。③ 考えたことがない 男 13・女 6。回答無 女 2

男子に「考えたことがない」は約二割で女子の二倍である。農作物や家畜を育てた経験の有無との関連性は両者の経験をもたない者が、「③考えたことがない」の男 13 名中 6 名、女 6 名中 3 名を占めている。相関性が高いといえるのだろうか。

**設問 7** 人間の赤ちゃん（一歳未満）を抱いたことがありますか

① ある 男 36・女 52 ② ない 男 18・女 10

男子で抱いた経験をもつ者が三分の二を占めるのは、「意外に多い」という感想である。

**設問 8** 現在、わが家での食事の準備や後片づけについて

① 祖母や母、姉、私など女性の仕事になっている 男 45・女 52

② 母が中心だが父や兄・私など男もする 男 11・女 4

③ 父や母も家族全員でやっている 男 0・女 6

④ その他 0 無回答 男 2

食事の準備や後片づけが女の仕事とされていることがよくみえる。ただ④の男もときどきはしているという家庭が女子より男子の家庭に多い。④の家族全員の分担は女子の家庭に

のみみられる。女性の主張によつて分担が実行されてきたのであらうか。

### 家庭科学習一年間をふり返って

次の項目は、家庭科学習の効果をもみようと、学習前からであれば△、学習後は○をつける形で回答とした。

**設問 9** 自分の食べる物を料理する

△ ○

ことはできますか

① 楽しんですぐできる

男 女 20・28 10・23

② めんどくだが健康のため料理する

3・7 8・2

③ 誰かに作ってくれるよう頼む

12・1

④ その他

4・3

⑤ の内容、男では「誰も作ってくれないから作る」2、「時々自分でやるがなかなか時間がかかる」「楽しんではやるがすぐはできない」。女では「自分でできる限りはつくるが誰かに作ってもらう時もある」「気が向いたときだけ作る」「めんどくなのでなるべく簡単なものを作る」で①や②に近い。

家庭科学習の前から、食べ物作りを楽しんでいる者が男女ともにかなりある。家庭科学習がさらに①や②の姿勢に動かしている傾向もよみとれる。

**設問 10** 食糧の生産の状況について関心をもっていますか

① いつもニュースなどをきいて  
関心が高い  
2・1 男 女 2・1 男 女

② 説明があれば興味深くきく  
13・9 22・32

③ ほとんど関心がない  
18・20

学習後に②が増加している。二学期に大豆学習をし、その発展で日本と世界の食糧生産の課題をVTRや図書『食糧』岩波ブックレット）を資料として、肉食や飽食と飢餓、日本の食糧の対外依存の現状と問題点を主に取り上げた。機会さえ作れば、単に作って食べるだけの学習に止まらない姿勢のあることがわかる。

# 設問11 食べ物の安全性を保障していくには

① 消費者が安全なものを生産者に  
作るよう主張する  
2・5 男 女 31・42 男 女

② 生産者を行政が指導するとよい  
8・3 16・13

③ 生産者に任せておけばよい  
4・0

④ よりも①が、学習後で男女とも過半数に達している。  
肉加工品の品質表示について、一般の市販品と生活協同組合の無添加品とを比較し、原材料の安全性と生活協同組合のシステムの説明をしたことが、①の姿勢についての理解を深めたようである。

# 設問12 家庭内の仕事についてあなたの 考えに最も近いのは

① 家事を家族全員で分担する  
15・2 男 女 13・16 男 女

② 家事を母だけに任せるのでなく父も  
する  
1・1 2・4

③ 家事を父にさせるのは無理。しかし  
私たち男女(夫妻)でやりたい  
1・2 19・24

④ 家事を男がするには抵抗がある  
2・3 6・4

⑤ 男は社会で働き、女は家の仕事をす  
るという役割分業がよい  
7・8

①②の家事を男女でやろうという姿勢が学習後で男女とも大幅に増えている。③④の保守的姿勢は男女ほぼ同じで四分の一の割合を占めている。

# 設問13 家庭科の一年間をふり返って

① 男女共学が自然である  
51・53 男 女

② 男女共学は無理な点はあるが今後もやり  
続けるべき  
2・8

③ やめた方がよい  
1

④ その他  
4・1

⑤ の男子の理由は「同性どうしの方が大っぴらで何かとやりやすく研究心や積極性がでると思うから」という。家事を男がすることに抵抗する気持ちもある。③と答えた男子の〇

## 宇都宮辰範さん逝去

昨年1年間「フウフウフウふうふ」の連載をしていただいております宇都宮辰範さんが、2月20日午前8時49分、肺閉塞のため帝京大学附属病院でお亡くなりになりました。32歳

2・3月号最後の原稿をいただいて1週間後、12月11日の入院でした。

話がしたいから、と原稿の受け渡しは中野のご自宅に行っていました。

わずかな時間でしたが、いつもエネルギーを充電させてもらっていたような気がします。そんな方でした。

連載を終え、これからWe誌上でもっと発言してもらいたかった。“差別語”について書きたいと言っていた。貴重な方を失った。合掌（馬場）

君は授業内容の感想として、「自分は自分なりの作り方で料理を作って食べたいから、学校でおしえてくれなくてもいい」。さらに「一つだけ言いたいことがある。それは材料のむだ使いだ。残飯にするのがもったいない。食べ物こそまっすぐにしているだけだ」と厳しい。残飯の量が必ずしも目立ったとは思っていなかったこと、また、目立たない存在でいつも黙々ととりくんでいた生徒からの発言であり、おおいに反省させられた。大部分が生活に役立つ学習であったと評価してくれたのはあるが、彼は「あなたが食べる物のなかで、次の材料を使って作った食べ物の名前を知っているだけ書きなさい」に対して、「米↓ご飯、小麦↓麦ご飯。砂糖↓（無）。

## 編集室からあなたに



### ◆7月号原稿募集

テーマ「性・小・中・高校生は何を思う？」

現在、小・中・高校生を対象とした調査を実施中です。そのナマの声を出したいと思います。あなたの「こんな時いいなあと思った、うれしくなった、驚いた、がっかりした……」など、実際に体験したことを寄せていただきたいと願っています。2000字程度、メ切りは4月10日です。

### ◆夏季フォーラムへのご意見を

早いですね。もうフォーラムを企画する季節です。大テーマ、分科会テーマ話をききたい人のリクエストを。実行委員のお申し出も待ってます。

牛乳↓ホットミルク。魚↓フライ・さしみ。肉↓カレー・肉じゃが。卵↓卵焼き。大豆↓豆腐」の回答であった。この内容ではあまりにも貧しい。やはり学習してほしいと思う。一クラス四〇名余の男女共学クラスを四学級担当して、一歳過ぎの子どもを育てながらの過去一年間は、毎日が自転車操業であった。八六年度はO君のような生徒にもひびくような授業をやらなければと思う。

これから、野草・野菜・砂糖・牛乳、小麦、大豆、水といった食品中心の授業実践を報告していく予定である。

（熊本県立甲佐高等学校）

4

☆



☆

✕

;

1998

10

味で、私は疑問です。このように、洗濯は不得手ですが、日々の暮らしを通して、洗濯は気持ちのいい仕事であることは実感しています。そして晴れた空が「楽しみ」に思えるものだと思います。

掃除も、子どもの頃から好きでしたし、母も上手でした。又、母が働くようになって、時間的に、家のことがあまりできなくなったことを契機に、自分で母のやり方をまねしながら法則を生みだし、それにのっとって今にいたっています。その法則は、「ほこりは、上から下へ落ちるし、舞うもののであるから、二階から一階へ、棚の上から床の方へむけて掃除をする」とよい。そして、掃除機かほうきかによって、窓の開閉を調整することが望ましい」というものです。大学の研究室でも、「高山がいると研究室がきれいになる」とよく誉められました。ふり返れば、掃除について、学校の家庭科で学んだことは何もなかったと思います。

親子関係に関しては、親との関わりを通してすべて体験で学んできました。一般的にいわれているように、母子関係・父子関係とは、あたたかく、美しいことばかりではなく、時に血みどろとも言える関係であることを実感してきました。

親は、常に子どもの成長を願うことが、又、具体的に援助をすることができただけではなく、自らの価値観も判断力に応じて、子どもと関わっていくのだと思います。そして、子

ものの心理も、常に「育ててもらっている」とか「感謝している」という肯定的状態ではなく、嫌いになってみたり、頭にくきたりすることもあると思います。

過去の二十六年間を振り返って思うことは、親子関係、次に記します夫婦関係とは、常に流動的關係であるということです。あたたかくなったり、冷たくなったりするのだと思います。そして、私にとって親子関係・夫婦関係は、人間理解のために、欠くことのできない礎だと思っています。

夫婦関係は、親の在り方、関わり方を通して学んできました。私にとって、夫婦（かてい）そして社会は、表向きは、男尊女卑であり、内実は、女性が男性を支えていくものです。つまり、男をたてながら、家庭生活・社会生活を通じて、女性が男性を支えていく、男性が快く、気持ちよく働けるのは、女性の力量と深く関わっていると思います。もちろん、女性でも、現在の社会で活躍する男性と同等の仕事ができる人はたくさんいると思います。しかし、男女同権とは、女性が男性と同じ仕事をする以上、女性にしかできない仕事をみだし、男性と協同して生きていく権利を、個人個人の問題として、獲得していく過程だと思っています。これらのことを、私は親をみて、学び、自分自身の女性としての在り方に、とりこんできたと思います。

以上のように、私は家庭に関することは、すべて学校外の



自分の家庭を中心に体験を通して学んできたと思います。これは、「学校では、何も教えてくれなかった」という不満ではなく、学校で学ぶ必要がなかったという事実だと思います（もちろん、家庭科の授業は楽しく、好きでしたが）。

私は、「学校」とは、学習者一人一人が、好みや必要性に応じて、学びたいことを、学ぶために、仲間・空間・時間・人材を常時備えているところだと仮定しています。つまり、この考えに従えば、「必修」という科目は、ありえないわけ

です。お母さんが教えることができて、子どももそれを望めば、その科目は、お母さんが教えればよいと思います。家庭科は、家でお母さんとお手伝いをしながら一緒に考えていく。そして、その分、学校ではコンピュータを使って数学を学ぶ、ということがあってよいと思います。最近、特に親の教育レベル・知的能力が向上していることを考えても、こういうことは可能だと思います。何故、家庭科を、学校で、男女必修にしなければならないのでしょうか。

## \* と \* 研究ノート “性” の

### \* ひ \* 善積 京子さん



日教組の全国教  
研集会が大阪で開  
かれた。女子教育  
もんだい分科会や  
家庭科分科会では  
ともに “性” をど

う教えるかが一つの柱となった。そんな中、大阪におすまいの善積さんを勤務先の大手前女子短大に訪ねた。  
連載では「先生にむかって語りかけたい」でも「スタッフ自身も問題をかかえているんです」と。

「女と男の関係を考える会」は、「女性自身が自分の性をとらえよう」「自分自身の感覚を大事にしていこう」と、'83年発足した。

「性意識」は私のライフワークという善積さん。大学の卒論は「性意識の調査」。まだ性に関してタブーの時代だったと。十年後の'83年には、十年間でどう変わったかと「性規範による女性差別」を発表している。

研究テーマの原点は生い立ちにある。

ご自分は家庭的なことが好きで、幼い時、人形を作ったり、料理を作ったり。家庭科は好きだった。父親は、家族を大事にしたけれど、くわしてやっているという態度。母親は、耐えて、報われているという感じ。高校の時、そんな姿に反発を感じ「女は仕事を持つことが必要」と思う。'70年代のリップ運動に共鳴

し、性の問題に関心が深まっていく。

他大学の男女学生にも教えている。そして思う。彼らははじめに知りたがっている。相手（異性）のことを考えようとしている。先生や大人が伝えていない、つくづく大人が問題だと。

二児の母。特に性教育はしていないが、赤ちゃんはどこから生まれるの、女の人と男の人どこが違うのという問いにいていねいに答えてきた。自分の性を大切に育つことを願って、働くって？「生きること」「もっと女と男、交流したい。語り合うことでお互いを知っていくことは楽しい！」と。

私も連載とともに自己確認していこう。そんなことを思った。  
(馬場)

☆

活することを前提としないうところに基礎を置いて欲しい。だから、家族が力を合わせて家事をやるから、生活が成り立っているというような感覚でみるのではなく、自分が生きていることの周りには、どのような仕事が起こっているのか、自分はどれだけやらなければならないのかを自覚すること、自分のことなのに自分がやらないことで、どれだけ他人に世話をかけているか理解できるような人間を育てる教科になって欲しいと思っている。そうすることで、自分の生活が見え、自律的に生きることが出来るようになれば、どのような構成で生活することになるかと、自分の人生を、主体的に自分が主人公で生きて行けると思う。

そのためには、学校教育の初年度から始めて欲しい。小学校一年から三年位までは食生活を中心に、健康な生活をするにはどのような事柄が大切か、自分で何ができるのかなど。四年から六年までには、衣食住についての基本的な考え方、及び技能を理解させる。出来れば体得もして欲しいものであるが、学習時間の問題を思うと、せめて理解だけはして欲しい。

次に中学についてであるが、中学ではライフサイクルの全ステージについて学んで欲しい。生きることと働くこと、個人と社会の関係、異性との関係、誕生から老衰まで、生き抜くこととはどういうことなのか。

だから私の欲する家庭科では、例えば育児技術に近いようなことはいらないのである。対処する基本的な考え方を理解しておけば、育児という場面に直面した時に、技能的なこととは学習できると考えるからである。技能よりも育児の持つ意義をしっかり理解しておくことだと思う。性に関しても、老人介護に関してもそのように思う。

家庭科教育に関する検討会議では、高校家庭科については、男女同一課程で、選択必修としたようであるが、私自身としては高校家庭科には、さほど関心がない。なぜならば、高校は義務教育ではないから、人間生活に必要な不可欠なことは、小・中学の義務教育の内に学習すべきことで、小・中学の内に充分に学習する機会と時間をとるべきだと考えるからである。そのことが前提にあつての高校家庭科だと思う。

技術的なことを修得するには時間がかかる。学校教育では生徒が日常生活にフィードバック出来るように指導すること、生徒の生活技能を高めるように努めて欲しい。最も力を入れて欲しいのは、生活者として自己を主体的にとらえる思考と消費者としての目を育てることである。

家庭は生命の生産の場ですらなくなろうとしている今、私たちは生活の全てを選択することによって創り出そうとしているのであるから、選択眼こそ、生きる技となろう。



だから、私は、家庭科に期待したい。生きるための力をつけること、生活者として自立する力をつけること、家族の一員として理解や協力を学ぶことなどが、ぜひとも必要なのだから、中学はもちろん、高校でも家庭科の男女共修を実現したいのである。

## ところが、群馬では

私は、「男女共修は当然よ」と言いながら、私の住む群馬県のことを考えると、気が重くなる。

なぜって、群馬県では、男女別学校が多い。だから、どう議論したところで、結局のところ、男女共修になるはずがないのだ。男女別学校では、どうせ男女別修に決まっているのだから。

群馬県の公立高校普通科を例にとると、よくわかる。

全 体		男女共学校		男女別学校	
学校数	五二校	二三校(四四%)		二九校	
定 員	四、〇〇人	一五、七五五人(三八%)		三三、三三一人	
在籍人員	四、五一人	二五、〇四八人(三八%)		二四、九七一人	

(一九五・五・一現在)

しかも、この共学校の内容が、また問題なのである。戦後の新設校はどれも共学校ということになっているけれども、実は男女別クラス編成をしているところが多い。同じ教室で

同じ教科書を使って学ぶことが共学のはずなのに。この共学校のなかで、男女混合のクラス編成をしているのは、半数以下とのこと。こうなると、群馬県の公立高校普通科のうち、真の共学校はわずか十数パーセント以下しかないのだから、驚いてしまう。

それに群馬県には、私立校が少ない。高校は全部で百七校あるけど、私立高校はたった十三校しかない。だからこそ、公立高校で男女共学を実現して欲しいのに。

しかも、群馬大学や高崎経済大学があるのに、近年県立女子大が新設された。「娘は、親許から通学させたい」という親心にこたえたものだという。娘の自立や成長よりも、幸せな結婚をして夫に愛される妻になって欲しいということだろうか。

これがまた、女子大生の就職の時、会社が「親許通勤」を条件にすることにもつながるのではないだろうか。男子には、決してこんな条件はつけないのに。「女は家庭」ときめつけられては、女が一人前の人間として成長し平等に働くことは難しい。女子校で良妻賢母教育をうけながら、平等に社会参加できるはずがないのだから。

戦後四十年もたったのに、まだ「女は家庭」ときめつける教育や社会のあり方が残念でならない。私たちの子どもが個性を伸ばして生きてゆけるよう、教育や社会を見直してゆきたいと願っている。

(弁護士)

## 変わりゆく性意識と性行動 (1)

若者の性——教育現場からのレポート

### 女と男の関係を考える会

#### はじめに

女と男の関係を考える時、当然、性のテーマを抜きにして語ることはいらない。しかしこの当然のこととが、これまでの学校教育において、いかに無視されてきたことか。私達の研究会では、これまでの家庭科教育の内容を検討し、男中心に語られてきた性（セクシャリティ）のあり方を、フェミニズムの視点からとらえ直す作業をしてきたが、その成果を一年半にわたって報告していきたいと思っている。

「性革命」が叫ばれてから、十数年経つ。性商品、性情報が氾濫し、ソープランドばかりか女性のためのホスト・クラブまで登場し、一見、性抑圧の社会から性解放の社会へ移行してきたかのような印象を人々に与えているが、はたして私達の性は、そして若者達の性は

解放されたであろうか。これから三回にわたって、若者達の性の意識や実態を追ってみることにする。まず初めに、今月は、マス・メディアから発せられる性刺激を日常的に浴びている若者が、それをいかに受けとめているか、高校生の段階で性関係をもつ生徒に対して、教師集団はいかに反応・対処しているかを中心に、教育現場からレポートしよう。

#### 大学生とマスメディア

大学で社会学の講義をしていて、セックスや避妊などに話が及んだ時の学生の反応は真剣そのものである。ふだんもこれぐらい真剣にきいてくればと思うほどである。学生から性教育をもっと早い段階でしてほしいという声が多く出ている。以下、学生の授業の感想の一部を紹介してみよう。

「多分、僕が大学へ入って以来、初めて真剣に考えた講義だと思う」(男)

「中学・高校の時、全然性教育というものを受けなかったので、全くと言っていいほど性知識がなく、今日の授業はとても参考になった。性教育を小・中・高校生にするべきだと思います。その時には避妊方法なども教えるべきです」(女)

もっとも、彼らの中には、すでに性関係をもっている者もあり、雑誌や仲間からの性情報も多く得ている。ところが、その情報があやふやなものや、明らかに誤ったものであったりするから、恐ろしい。たとえば「月経中は性交しても妊娠

する事はない」という質問に対して、彼らの四割以上が「はい」と誤った解答をしている（なぜ誤りかは、いずれ性教育シリーズのところで説明する）。それに関して学生は、

「僕の周りの人達は（もちろん僕を含めて）でも、しっかりと避妊の知識を本当に持っているのだろうかと思うと怖くなった。日常会話で、毎日のようにセックスにいそしんでいるという人がいたりするので、特にそう思った」（男）

「今日の授業をきいていて、今まで雑誌などで得ていた自分の性に関する知識がどれほどまちがっていたかを思い知らされた」（女）

と語っているように、マス・メディアの大学生へ及ぼす影響は大きい。そこで、代表的な男性週刊誌である『プレイ・ボーイ』から、いかに性を取り扱われているかをみてみよう。

一九八五年五〇号で、フランク永井の自殺未遂事件を取り上げ、この事件は「これまでオマンコに付属している物体Xでしかなかった」女が、時に男を死に追いつめるコワイ怪物なのだということをわからせてくれた」とし、いかに「キョーカツ女」を撃退するかを特集している。これは、女性を性対象の物体としてしかみなしていないことを露骨に表現した差別文章であり、何よりも女性の立場からすると、避妊せず「ナマ」でやったあと「さようなら」で済ませようとする男の無責任性が批判されるべきだ。それをさておいて

も、その特集で「射精一秒ガキ一生」を標語にしているのであれば、徹底的に正確な避妊知識を男が身につけるようにと企画すれば、それなりに有効性はあるだろう。しかし残念ながら、デタラメな性情報を流すだけに終わっている。

簡単に妊娠する女はそれだけ「キョーカツ女」になりやすいとし、避けた方が無難な女として「着やせするタイプ」をあげている。「裸になるとヒップがパンと張り出している女」は、「あそこが精子を吸い込む力が強く、一発で命中しちゃう確率が高い」。また、「セックスで感じやすい女」も「ヤッている時に全身がヒクヒクいれんするような女は危険だ。この場合、それだけ精子が子宮に入りやすい」とのこと。よくまア、嘘八百ならべられるワ〜とあきれるばかり。書いている当人も、まさかこれを信じる御仁もないだろうと思っているかもしれないが、これを本気に信じる人がいるから恐しい。悪い冗談と笑ってはいられない。

五二号でもデタラメな性情報が流されていた。「生理中のセックスは妊娠しないのがわかっているのに、コンドームするのもシヤクだ」と。この記事から読者が、「あつ、そうか。生理中のセックスは安全なのか」と解説しても不思議でない。

さらに、現代のマス・メディアは、誤った妊娠・避妊の知識の提供ばかりか、歪んだ性のイメージを与えている。「女

は強姦されたがっている」「今どき処女を大切にしている女子大生は国宝級」とか、「現代のギャルはセックス大好き、中絶も平気でする」など。実際性関係をもっている女子学生は16%ほどであり(次からの号で性意識・性行動の実態を取り上げる)平気で中絶手術を受けている女性もいない。学生は、「雑誌などで、中絶することを最近の女の子は何とも思っていない」とあったが、実際そうではないと聞いてホツとした」

(男)

「女性が雑誌などで軽く扱われているようで、それについて女性自身もあまり自己の性のとらえ返しが無いようだ。女性自体が性について軽く考えていると、こちらもつい無責任になってしまう」(男)

「雑誌なんかで性が軽いことのように取り上げられ、自分もその影響でそれほど重要なことではないと思っていた。今日の授業で、やはりそんなに軽いものではないことを認識させられた」(女)

大学のスタッフの中には、「大学の講義であえて性をとり上げなくても彼らの周りに性情報はいっぱい飛びかっているのに」という人もいるが、私達は日頃大学生に接していて、それは明らかに誤りであると感じている。学生達も持っている、マス・メディアによって作り上げられた歪められた性のイメージ、誤まった性情報をチェックしていくことが、今ま

さに重要な課題としてあるのではないだろうか。

### 性にめざめる高校生と性に囚われる教師

大学生の感想文のように、性教育を全くせず、逃げの姿勢に徹している高校もあるが、一方、保健や家庭科で積極的に性を取り上げている教師も存在している。しかし、そこで問われるのは、何をどこまでどのようにして教えるかである。

次の文章は、『家庭一般』の「母性と保育」の領域で、妊娠・分娩のメカニズムを学習した後、女生徒が書いたものである。

「甘美であるはずの恋愛もたった一度の過ちで暗く苦しいものになる。新しく芽生えた生命を断つということは、あまりにも淋しくそして非人間的な行動であると、しみじみ感じた。望まぬ子供を作ることとはやはり二人の責任、特に女性なら十分に注意すべきことである」

この文章を書いた生徒が数カ月後に妊娠し、母親が学校に駆け込んでくる。この家庭科の教師は性教育に取り組もうとしていただけに、妊娠を知って大きなショックを受けるが、その教師は、自らの授業を振り返り、次のように語っている。「これまで私は性のしくみ、妊娠のしくみをきちんと教えたが、生徒自らがそこから避妊につなげていけると考えていたが、彼女の事例に関わってみて初めて、避妊を教えていなかったことは、私自身やはり逃げていたと言わざるを得ない。



「中絶は悪いよ」と、感情に訴えるだけでは何もならない」と反省している。

このケースの場合、相手の男性は同じ学校の生徒。当初、彼女は「退学して結婚し、子供を生みたい」と言っていたが、もし妊娠が公けになれば、男子生徒の方も退学せざるを得ないかもしれないという状況判断のもとで、秘密裡に中絶手術を受ける。

この事例のように、性関係をもち、妊娠する高校生もいる。ただ多くの場合、闇のうちに処理され表面に現れないだけである。十代の中絶が増加の一途を辿っている今日、現実を直視し、真正面から性の問題に取り組むことが教師集団に迫られている。にもかかわらず、一部の教師が積極的に取り組もうとしても、「寝た子を起こすな」式の論法で反発が返ってくる状況が今でもある。

たとえば、この事例の高校で、以前ある教師が性意識調査を試みようとしたところ、「我が校には、調査が必要なほどの実態はない」と一蹴された。また、生活指導部の会議で指導の重点項目を検討した時、性教育の必要性とともに教師の校内研修を提案したところ、「一瞬座がしられ、「難しいな」の声がボツボツと出て、最年長者の「やめときましようや」の一声で終わったとのことである。

またある高校で、二年生の男女が共に家出した事件で（夏

休みにアパートを二人で借りて生活。経済的に破綻して、九月初めに帰宅）、職員会議がもたれ、「性関係をもったことが明らかな生徒を、しかもその男女が共に本校にいるという状態は誠に好ましくない。他生徒への影響が大きい。退学させるべきだ」という強行意見が続出。生活指導部の教師の「一人一人の生徒の将来を考えてやって欲しい。こうした生徒を排除してはいけなのではないか」という必死の説得でかろうじてその男女は学校にもどることができたという例もある。

今なお、「純潔教育」「不純異性交遊」という時代錯誤の感覚で生徒を管理しようとしている教師が少なからずいる。また、性教育に積極的な教師でさえ、「高校生で性関係をもつのは早い」という観念にのみ囚われ、具体的に避妊方法まで踏み込んで教えることに躊躇している場合が多い。光源氏の例をもち出すまでもなく、十五、六歳で結婚していた時代もあり、「早い」「遅い」の基準はあくまでも歴史的・相対的なものである。身体的成熟が早まっている昨今、「なぜ高校生が性関係をもつてはいけないのか」を問い直す作業も必要な時期にきているのではないだろうか。（善積京子）

会員（大手前女子短期大学・善積京子、湊川女子短期大学・楠崎ルリコ、大阪府立守口北高等学校・長沢保子、大阪府立鳳高等学校・村上昌子、高槻市立第四中学校・森陽子）

## 教育のなかの 心理学



小沢牧子

### 体罰をめぐって (1)

大学で「教育心理学」の授業を受け持って、数年になる。教員をめざす学生たちの、必修科目として置かれている授業である。

この連載欄をいただいて考えたことは、授業のなかで若い人びとと共に考えあつてきたテーマのいくつかについて、語っていかうということだった。学生たちのレポートも大いに紹介させてもらいながら、学校とは、子どもとは、教師とは、などについて読者の方々とともに思索する旅を試みたい。

#### 教えられる側の体験をとらえ返す

はじめに、この旅の舞台、私の「教育心理学」の授業についてすこし紹介しよう。教員志望の学生たちは、大学でたくさん必修単位をとってから、都道府県の教員委員会がおこなう教員採用試験を通過しなければならぬ。この採用試験がまことに問題で、雑多な暗記ものの知識を要求する中身になっている。大学での必修授業をそれに合わせて、採用試験を通過するための知識を与える時間にするならば、たくさんの人名や学説や用語を覚えることで一年がすぎってしまうのである。

しかし、そのようなこま切れの知識をつめこんだところで、教師をやってゆく上に役にたつとは全く思えない。通過儀礼としての採用試験のための暗記ものは、自分たちで参考書と向きあつてがんばってもらおう、と私はわりきっている。そして授業のなかでは、「十五年間にわたって学校教育を受けてきた自分」をふり返り、自分にとって学校教育とは何だったかをていねいにとらえ返してほしいと考えている。

まるで、自分に子ども時代がなかったかのように、子ども時代を忘れてしまった大人や教師が多すぎる。子ども時代に自分が大人から何を感じていたか、何を喜び、何を辛いと思いい、何を求めていたか。勉強がわかるといふこと、また、わからないといふことは、自分にとってどういふことだったの

か。教えられてきた自分、そして教える側にまわっていく自分のはぎまで、教室で出会う仲間たちと体験を交流し、討論をふかめてほしいとねがう。そうでなければ、教師になったとき、子どもと深くつきあう力はつかない。また、同じ教室で仲間たちと出会った意味もない。まして、大学という場を生かすこともできないだろう。

そんなわけで、私は、学生たちにたびたびレポートを書いてもらい、それをもとに討論する場として、授業を組みたててきた。私の役割は、教材の提供者、司会役、時に講義者、討論の仕掛人と深め役。もっとも学年末には、単位認定者としての権力的役割もとらねばならないのだけれど。

ことは、体罰論議を数回した。この連載の旅の一步を、体罰をめぐる思索からはじめることにしたい。

### ぼくのような頭の悪い者は……

私事になるが、息子が小学四年生のときの担任教師が、子どもを簡単にたたく人だった。分厚い教師用指導書を数冊重ねてたたくため、小さな子どもがすっ飛んでしまうという具合であった。ある日、息子が言うには、「お母さん、K先生ってひどいんだよ、子どもは犬や猫とおんなじなんだから、犬や猫みたいにたたいて育てなくちゃだめなんだ、って言うんだよ」。そして続けて、「そんなこと言うなんて、犬や猫に失礼だよねぇ」と憤慨した。

息子は、自分たちがたたかれることではなく、自分が飼っている犬や猫のために怒っているのだった。子どもからすれば、動物もたたくことは許されない、たいていはいかいそうだと感ずるのである。それは、暴力というものに対する、弱い者の拒否感情である。また、たたかれることを屈辱と感ずる、自尊の感情でもあるだろう。ところが、体罰が日常化し、たたかれ殴られることが続くと、人はそれに慣れる。そしてそのなかで、何よりもひとは自尊の感情を捨ててゆく。あるレポートの次のくだりは、それを伝えていたましい。紙数がないので、今回はその紹介だけにとどめる。

「私は、中学・高校を通じて、今社会問題にもなっている体罰をかなり受けた。現在は傷もなくなったが、以前は多少残っていた。……FとKという二人の教師には、一日につき平均十発くらいやられた。彼らは棒をもっていて、モップの柄やしないて殴った。一番ひどかったのは合宿のとき、ちよつとした事で夜中に呼びだされ、正座させられて、けりを入れられ、耳を引っぱられて、耳が裂けた。……でも、私は体罰は賛成だ。なぜなら、私みたいな頭が悪いのは、殴られなければわからないからだ。ある程度内の体罰ならいい……。」

彼は、このままではきつと殴る教師になっていくだろう。暴力の再生産と自尊心の喪失の図式とが読みとれて、寒々とせざるを得ない。

(次号に続く)

# 教室の窓



植垣一彦

## 〈11〉詩をつくる

詩や作文——といえば、さもないやそうに、「エー!」の反応が返ってくる、というのが相場。遠足や夏休みなどのあとは、昔も今も決まって書かされる。この、相も変わらぬ学校の通過儀礼が、子ども達をして嫌いにさせている、とは断言すまい。

ただ、苦手な野菜も、それがスूपになつて出されれば苦にならぬと同様に、わずかな工夫しだいでは、彼らと

て必ずしも嫌がるわけではない。いやそう遠慮がちな言い方はよして、「喜んで書きたがるのですよ」と言おう。

たとえば作文。「ファンレター」に仕立ててみる。あるいは、初めての来客を想定し、その人に教えてあげるため、駅からわが家までの「道順」をわかりやすく文章にする。少なくとも私の実験では、この類の工夫をいくつか試みると、「先生、作文書こうよ」の声が子ども達の側から起こってくる。それほどに、子ども達の表現の欲求は、混沌と渦巻いているのだ、と考えてよい。その欲求が、「エー!」「ヤダー」と屈曲してかき消されるのでは、あまりにも不幸だ。詩や作文を書くという行為が、言葉による感情の浄化作用という側面を持つことを考え合わせる、なおのことそう思わざるを得ない。そして、これを保証するには、教師が、古典的な作文指導の枠組から、わずかばかり自由でありさえすればよ

い。

たとえば、つぎの詩。入門段階で、私が決まって扱う方法によって書かれた作品である。

まげる

四年 小山大輔

まげる／足をまげる／首をまげる／手をまげる／骨もまげる。

まげる／棒きれをまげる／かさをまげる／ヘルメットをまげる／物ほし

ざおをまげる。

まげる／まげる／まげる。

心もまげる／気もちもまげる／友情もまげる。

なんでもまげて／一人ぼっち。

たかい

四年 富岡良介

そうでんせんが高い／でんしんばしらが高い／いちようの木が高い／綱島公園のてっぺんの木も高い。

ダイヤモンドが高い／土地が高い／人間が高い／百億も高い。

おとうさんは会社で／はなが／たかい。

「リフレインの詩」なんぞと、私はちよつぱり氣どつて説明するのだが（じつはここがミソでもある）、要するに、あるひとつの言葉を繰り返すという「型」を持っている。だから、この「型」にはめれば、あとは着想と認識力と想像力で、バリエーションはいくらでも可能である。

たとえば「ほる」でやってみよう。穴をほる／壁をほる。つぎに、「○○を」がまた続くと単調になるので、山もほる／空もほる、とリズムを変えてみる。四行一連で、二連ぐらい作る。そして三連目で、ちよいとポエジーを感じさせて締めくくる。たとえば、なんでもほって／テストをうめろ。という具合に。

もつとも「型」にはめて詩を作るなんて、詩の自由の精神に反するのかもしれない。

知れない。でも私は、子ども達が表現の楽しさを満喫するのと引き換えのつもりで、こだわらないことにしている。それにもまして、こうやって興に乗じて作っていると、「型」が壊れてくるからおもしろい。むしろ子ども達は、無意識のうちに「型」を壊しにかかっているのではないか。恐らくそうなのだ。「型」にはまっていけないから「生、書こうよ！」という声の、起こるはずもない。ここがきつと、ひとつの、跳躍点なのだ。

心ばだけ 四年 千葉真由美  
ここは

心ばだけです。  
みなさんの心をあずかつて  
そだてます。  
みなさんがおとなになったら  
わたします。  
きつと

きれいな心になってます。

フォーク スプーン ナイフなど

かなものるいも

そだてます。

まだあります。

おやさい おにくも

さいてます。

本もそだてます。

とりかえもできます。

心ばだけは

人の心や

ものの心を

美しくします。

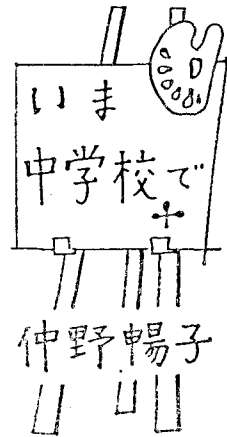
不思議な

はだけです。

ひとりの子どもが「型」からたしかに跳躍し、何ものかを表現してゆこうとするきわを見せたとき、私はしみじみと、そのきわを味わうのである。

（横浜市立日吉南小学校）

## 新しい生活の場を作る



学校の四月はやはり入学式で幕が開く。校庭に大きく張り出した桜の枝から、白い花びらがはらはらと真新しいセーラー服や学生服の肩にかかる。大きな図体の三年生を卒業させたばかりの新年担任には、女も男もない「子供」たちの少し緊張した腫がただ可愛らしく感じられ、世話をする上級生はまた、急に大人っぽい様子を見せる。……これはいつもの風景だけれど、最近は何をやって「お預かりします」と言い切れない心苦しさがある。この子たちのこれからの三年間に

待っているのは、たっぷり呼吸できる場だろうか。私たちは彼等にどんな場を用意できるのだろうか。靴の色から靴下の線の太さ、下着のワンポイントの直径までいちいち指定され強制される管理の下におかれなくてすむのだろうか。わけもなく心身を脅かされたり、暴力を受けるようなことを防ぎきれだろうか。

まず親子とも「制服」と信じこまされている「標準服」だけれど、公立中学校で、制服を強制することができないことは言うまでもない。それでも社会習慣であるとか、経済的で親の希望が強い、指導の都合がよい（生徒の支持が考えに入られていない学校はまれ）などで、便宜的に「標準服」を選定して、事実上強制しているのだから、少なくとも親の同意が前提となっていないはずだ。ところが「学生には制服制帽がつきものである。必要不要の問題ではない。形である」といった調子で、疑いも怯みもなく押し付ける管理職や、それに続きたい教師の「規律」を言い立てる声が大きい。でなくてもそんな感覚を引きずっている教師もいるし、若い教師たちがヘンに思いながらでも従っているうちに、「こんなもの」だと慣らされていく学校の閉鎖性はとても恐ろしい。子供の代弁者になるなどおこがましいことだから、子供たちと一緒に自分たちの中にあるものを見つけ、育てて、生きる場を作っていくしかないと思う。

毎年一年生が「カラーが痛いヨ」「スカートがひきずる、暑苦しい」と訴えているのに、取り上げられることを押える圧力がかかり、うやむやにされることが多かったらしい。いわゆる「業者が迷惑する」(???)、「PTAの賛成が得られない」(なげかけていない)、「制服を変えた学校が、生活指導上問題がないとは限らない」(別に根拠はない)等。

いつも事件に追い回されている生徒指導(この言葉は好きでないけど)係の中で、「今年は生徒会を通して、生徒の実態を元に徹底的に討論をおこしてみよう」という合意がやっとできた。いちばん新鮮な一年生の感想を一部あげてみると、「脱ぎ着がめんどろ」が男女共に一年生では特に多い。

「ボタンが多すぎる。今まで被るだけでよかったのに」

「スカートのホックもすぐ外れるのにいつばい並んでる」

「動きにくい。クリーニングが大変。いつもほこりくさくって、汚なくて、洗いにくくって……」

「ねエ、こんなこと言っているの？ 校長先生に叱られない？」(洋服を着る人、買う人は誰なのかな?)

「みんなばらばらもみっともねエよナ」(そうかしら。真っ黒なカラス軍団がみっともないというウワサもあるように)

「わたしセーラー服って好きなの」

「でもさア、暑くっても脱げないし、下に重ね着もできないし……いつそジャージで一日いる方がラクなんだ」

「だって学生は学生服に決まってるんだから、ゴチャゴチャいわなくていいんだよ」

「誰が決めたんだヨ、そんなこと」

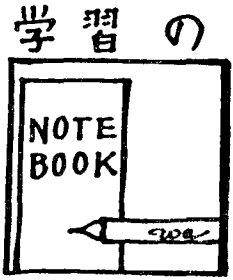
「いちいち何着ようかなんて、考えんのめんどくせエよ」

「二、三種類とか、大まかに決めたらどうかナア」

一人ひとりからこんなに自分の生活に即した意見が出る問題というのは、お互いに素晴らしい教材だと思う。衣服の機能をはじめ、規則と人権について、個人と社会との関りなど次々に考えることができる。実際に生徒が自分たちが調べたり、問題を整理して討論を進めれば、実りある活動になりそうだ。

「中学に入る前から心配だったのは、科目によって先生が違うことだったけど、いろんな先生がいておもしろいね」と子供たちは笑っている。

「先生にいろいろモンクつけていいなんて、最初ヘンな担任だと思ったヨ。今でもちよっと??だけどネ」とだんだん批判精神は旺盛になってきた。教師の方も、年齢・性別を越えて自分らしさを生かし、磨きあっていかなければ、とても新しい場を作る共同作業は難しい。



## 主人公たち

### ちいさかったころのこと

横浜市立公田小学校三年生の

子どもたち

池田 周吾

◆ぼくは昭和51年5月の8日にうまれた。病  
いんでおしっこやうんちをいっぱいしたりし  
てたいへんだった。

小さいころきかんぼうで、いたずらばかり  
していたいへんだった。ぼくのまえかつて大  
のトニーのうんちをたべたりした。おばあ  
ちゃんがきたときぼくはまだちいさくて、お  
ばあちゃんは「このことが大きくなるまでい  
てられるかね」といったけど、ちゃんといま  
も生きている。

ぼくはそのころうたがだいすきで、いつも  
ねるとき10きよくぐらいうたった。となりの  
いえにはいりこんだりしたり、べんきの中  
はいったりしていたずらをしたりしたけど、  
からだがよくてよくのどのへんとうせんが  
はれた。だけどこのごろ体がつよくなってげ  
んきに学校にいっている。

ぼくは小さいころずいぶんおもしろいこ  
をしたんだとおもった。

松井 一恵

◆わたしが赤ちゃんのときは、ちゅうしゃを  
しても、いつもなかなかったそうです。

小さいころは、お母さんとスーパールに行く  
と、わたしは、すぐお母さんの手をはなして  
1人でうろちよろして、まいごになってお母  
さんは、わたしをさがすのをたいへんだった  
そうです。

2才のときは、お父さんと公田だんちの方  
にさんぽに行った時も、お父さんの手をはな  
してまいごになったそうです。そのときは、  
すぐくさわぎになって、お父さんもすぐく  
心配したそうです。わたしは、なきながら1  
人で、ヤマザキショップのところまで、帰っ  
てたそうです。そこを公田ハイツの1号と

にすんでた工藤さんが、ぐうぜんとおったの  
で、わたしは、うちにつれていってもらって  
うちに帰れたのです。

そのことをお母さんはまだ「あのときは、  
よくパン屋さんまで帰ってこれたね」と言っ  
てます。わたしは、公田だんちからうちま  
で、道をまちがえたら、今はちゃんとうちに  
帰ってくるかなと、今思うとなんかしんじられ  
ません。

それから、わたしはよくころんで、公田ハ  
イツのかいだんからころげおちてました。そ  
のことは、まだよくおぼえています。かいだん  
の一番上から下のへんまで、でんぐりかえし  
をしながらかころげおちました。そのときは、  
よくたんこぶをつくったそうです。そのとき  
のせいか、わたしのおでこは、すこしでっぱ  
ってます。今、小さいころのことを聞くと、  
いろんなことがあったんだな、とおどろきま  
した。

橋本 健作

◆ぼくは、2才のとき一人で駅まで3りん車  
でいったことがあります。自分でもよく2才  
なのに3りん車で駅までいったなと思いま  
す。お母さんが目をはなしたとたん、3りん



しゃにのつていったとお母さんがいいました。駅までいったわけは、おばあちゃんがくるときいつも駅までむかえにいったから、今日もおばあちゃんがくると思っていたと思います。

2才の時友だちとスーパ―にいつて、かごにやさいとくだものを入れてあそんでいたと言っていました。今からみるとおもしろくてたまりません。よくそんなことができたなおもいます。

3才のときならにいつてしかをおっかけまわしてあそんだことがあります。なんでしかを、おっかけまわしたんだろうと思います。ほんとうにおっかけまわしたのかな。

ようちえんにいくまでぼくは、女の子にまちがえられていたとお母さんがいつていました。とこ屋にいつたとき、とこ屋の人がぼくが女の子だと思って女の子のかみがたにしてしまいました。おもしろいな。

3才のとき友だちとどろのみずの中をおよいだと、お母さんがいつていました。お母さんは、どろの中であそんでいるのをしつているのにとめないで、おふろをわかつていたといつていました。

1才のときふすまのかみをぜんぶはずした

といつていました。1才なのによくできたなと思います。きいたときわかつてしまいました。

今からみるとよく、小さいときに駅までいつたりできたなと思いました。

#### 矢島 由理

◆わたしが小さかつたころは、今とずいぶんちがいます。とくにかぜをひきやすくてにゅういんするところだつたんです。でも今は体も強いし、赤ちゃんのころとはちがいます。わたしは、はいはいをしなくて、ころぶとよく顔をけがして、ないて帰つたおぼえがあります。じてん車でさかに行つてあそんだときすべつてころんで大けがをしたのです。今でもそのきずあとがのこつています。

人なつこかつたので、自分のお母さんじゃなくよその人についていつたりしておこられたおぼえもあります。体そう教室に行つても体がかつたのです。それは、今も同じです。だから顔をよくけがしたのです。いい顔は(くしやくしや)な顔をしていました。それは、いちばんとくいです。よくわたしは、男の子とあそんでいたのです。今では、何で男の子なんかとあそんだんだろうと思いま

す。ほんとに小さいころは、どじだつたんだなと思います。

#### 中田 貴弘

◆ぼくが小さいころは、目がまんまるしていて外人そっくりでした。二才のたん生日の日、いとこがあつまつて、家でたん生会をしました。ぼくがといれにいくとき、おばあちゃんに、よその人とまちがえられて「この子だれ」とお母さんのところにつれていかれてかあさんが「家の子ですよ」とまちがえられて、ものすごいこえでないたから、かあさんが「あめあげるからなきやめなさい」といつたので、なきやんだけど、おもらしをしてしまいました。

おむつをとりかえたら、かあさんが「ねなさい」といつたけど「あつかんべー」といつてトイレの中にとじこもつておかあさんたちをこまらせました。だけど五分くらいしてすぐ「こわいー」といつてでてきました。こんどはムスツとしていきなりギャーギャーなきはじめて、たいへんでした。

だけどたん生日プレゼントをくれるといつたら、すぐなきやみました。プレゼントは、ちようごう金とおむつでした。そのちようごう金は、いまでももつています。今ではすぐ

なかないし、ごうじようだからむかしとちつともかわっていません。

# 川島 利葉

◆わたしは、昭和五十一年の十二月十九日にびよういんで生まれた。わたしは冬に生まれたので、よくおしっこやうんちをして、おかあさんはたいへんだった。わたしは、にのみやのくらたびよういんというところでうまれた。おかあさんは、冬だったのでおしめのかずがたりなかったそうです。わたしはそんなにおしっこがちかかったのでしょうか。わたしは、びよういんでは、おかあさんのあたたかいところで、すこしばかりねるときがありました。わたしは、よくたくさんおしめがあったと思います。びよういんの先生は、さいしょう、わたしがたいじゅうがすくなかったそうです。でも、先生はたいいんさせてくれたそうです。わたしは、いまではこんな大きいのに、小さかったので、おとうさんがかわいがってくれました。

# 高橋 広

◆ぼくの小さいころわはやねはやおき。よるねるときは8じくらいであさわ6じ半ごろに

おきた。あまりおねしよをしなかった。1日に4回くらい、あさおきたときと1回とりかえておひるに2回、ゆうがたに1回したそうです。

小さいとき友だちとけんかをしたけどあまり中なかつたし、いえでもあまりなかなかつた。小さいころお友だちとすなばで山をつくった。

ぼくが小さいときくるまのうんでんしにしたいといった。ぼくが3さいぐらいのときミニカーで一りごとをいってよくあそんでいた。ばとカーとかしうぼうしやとかであそんだ。マンガのうたをよくうたった。ハットリくんのうたをうたった。小さいときぼくはおねえさんのようちえんにいって、よくおどったまねをしたりした。ぼくが小さいとき、おばあちゃんちにいってうみでうきわをもつておよいでいたらうづまきのちかくにいちやつておぼれそうになった。

# 田淵 清美

◆わたしのうまれたときは、みじゆくじでうまれ、たいじゅう2000gしんちよう35cmくらいで、とても小さかった見たいです。でもほいくにははいりませんでした。なぜつ

て、ちよつと、しんぞうが強よかつたからです。わたしは、とても小さい赤ちゃんでうまれました。でもあばれんぼうで、男の子見たいだったそうです。でも、今でもあばれんぼうです。

うまれて2年間たった1才か2才のころは男の子にそっくりで、あう人、あう人「まあかわいい男の子さんですねえ」といわれていったんだとママ（おかあさん）がいつていました。

2才3才のときは、まるまる太つて、まりのようでした。そして、きんじよの3年2年1年生のおねえさんたちに、かわいがられていたそうです。そしてあばれんぼうでいたずらばかりしていたそうです（今は、そんなことおぼえていません）。そして一人子なのでよく一人でサッカーボールやまりで遊んだりパパ（おとうさん）とよく遊んでいたみたいです。だから、よくふりかえて見ると、パパやママに、1才から9才までかわいがられて、たいせつにされてきたと思います。

いままでをふりかえて、見ると、わたしはみじゆくじだったのに、こんなにげんきに大きくなれたのも、パパとママのおかげだと思っています。今までは、パパやママにおせわをし

ていてもらっていたので、こんど（今年）からは、わたしがしんせつにしてあげようと思います。

ママババこまでそだててくれてありがとう。これからさきもよろしくね。

### 松元 隆行

◆ぼくはお母さんに3才ころの話をおしえてもらいました。ぼくは横浜市保土ヶ谷区のかすみ台という所で生まれました（でも生まれたのは、けいゆう病院という所だったそうです）。そのときお兄ちゃんは2才6か月でした。ぼくが6か月の赤ちゃんだったとき、3か月の子犬をかくてくれました。今でもその犬（ラン）は元気です。ぼくと同じ9才です。お兄ちゃんもその犬をかわいがったしぼくもかわいがってきました。ぼくが小さいときは、かおがまあるくって女の子みたいで女の子にまちがわれたそうです。二才のころまで指しやぶりをしていました。とってもおとなしくお母さんをこまらせなかったそうです。

指しやぶりをやめたきっかけは、お母さんの手に、しっしんができてお母さんがひふ科の病院に行ったときぼくもついていて、ち

りようをするところをそばでみていてこわい思いをしてすぐ指しやぶりをやめました。

家の二階のおえんにブランコがおいであって、お兄ちゃんとお友だちとよく遊びました。そのころはガッチャマンやウルトラマンなどがはやっていました。よくテレビを見ました。スーパーカーやレゴのブロックも好きだったそうです。そして3才のとき 今の朝日平和台にこしてきました。

### 川崎 なお

◆生まれる前、わたしはおとうさんに男だろうといわれていたので、なまえを男のように「てっぺい」とかんがえられていました。わたしはそのことをきくと、いつも「やーねー」というのです。おとうさんは、いまでは、男がいいとはいいません。

生まれた日九州でうまれて、雪はたくさんふってたそうです。九州までおとうさんは、東京からいそいでかけつけてくれたそうです。ほかの赤ちゃんより大きくて、みるくもたくさんのだそうです。それになきごえも大きかったそうです。おばあちゃんがわたしをあずかったそうです。わたしが東京へか

える日おばあちゃんは、もっとあずかりたいといったそうです。たぶん長くあずかりすぎだったのでしょう。

1才中じえんによくかかり1か月に一かいぐらいかかったそうです。いまでは、しんじられません。また、きんじよのおばさんにあずけられたそうです。いまでは、だれにあずけられたかわかりません。2才しものばはいくえんにかよったそうです。

3才いますんでとこにひっこしてきました。ほいくえんはかみごうほいくえんにいきました。近いからよく大ふなフラワーセンターにいった。4才バイオリンをはじめました。さいしよはゆみのもちかたからはじめました。いまではもう、たくさん曲がひけるようになりました。

5才かいだんからよくおちた。そのたんびになきました。きょうだいのみずぼうそうになりおばあちゃんがきてくれた。6才ランドセルをおじいちゃんにかつてもらった。とてもそのときうれしかった。そしていまではときどき犬のマリーとまちがえられる。ふりかえってわたしは、小さいころのことしんじられません。とくにびようきのことです。



## 幼い子とともに

上野 昭

とんとんとん子どものへや、この小さな保育室は、昭和四十八年、市の公民館講座「女の生き方」で出会った四人のメンバーで構成されています。学習を重ねながら公民館の保育活動に参加し、母親や子どもがもっと広がりのある人とのかわり合い——そして地域の中で生き生きと育ち合う場を作りたいと思って開設したのです。

ここの保育室を利用する方たちは、週に二〜三回、あるいは二〜三ヶ月、そして一日だけという利用者がほとんどです。その子どもたちと生活をするうち、ただ子どもの世話をするという事ではなく、一人の人格に触れている事が実感でき、心の引きしまる思いで過ごし、もう五年になります。

日々、子どもと過ごす中で、特に心にとまる事を取りあげてみます。

Eちゃん（二歳十か月） いつも機嫌よく来るのですが、

その日は泣きながら来る。母親は、いい子でねと出掛けてしまう。しかし保育者に「Eちゃんも泣きたい時があるのよね」と語りかけられ、大きくうなずき泣き止む。受け止めてもらえ安心したのでしよう、機嫌よく遊び出し、やがて昼寝から覚める頃、母親が迎えにきます。まだ眠いEちゃんを抱き「今日はごめんね。ママ急いでいたの、ほらおみやげ」と他の子どももいる前で人形を出し与える。

この場合、自分で立ち直り元気で過ごしたEちゃんに、今一番与えて欲しいのは、物より母親の確かな愛と気持でしょうに。そして、大人の都合だけで子どもの生活のリズムを崩して欲しくないと思うのです。

又、週一回やって来る子どもは、あれこれと模索しながらやっと夢中になれる遊びをみつける頃に、迎えの時間になる事があります。そんな時、大人の生活のペースで子どもの生活のリズムは崩されます。楽しそうに遊び続ける子どもに、迎えの時間を告げながら、子どもの気持を大切に見守る事の難しさ、そして大人の生活も子どもの生活も、同じように大切にするにはどうしたらいいのか、それが私たちの悩みであり、今後の課題です。

Aちゃん（二歳六か月） コマーシャルソングが大好き

で、気に入りの友達が来ると「白さと香りのニュービーズ」と歌って迎える。遊んでいる時も、突如として歌い出す。日頃私たちの語りかけに対しては、全く同じ言葉をオーム返しにするか、関係のない意味の言葉が返って来るだけで、対話が成り立たないのです。しっかりと向き合い語りかけるのですが、視線が合わず時々ケタケタと笑い出すのです。母親と二人だけ、テレビとの対話の生活から急に環境の違う生活に入った戸惑いがある形で見れるのかと、Aちゃんと根気よく向かい合ううち、少しずつ友達との生活を楽しめるようになってのです。

そんなAちゃんが、みんなと外遊びに出ようとしている時、一人部屋の中で縫いぐるみに布団をかけているのです。Aちゃんの細やかな行動にキラッと光るものを見、ホッとする思いでした。つい見逃してしまいそうですが、少し心にゆとりを持つ事でAちゃんの素晴らしい一面に触れました。

**Mちゃん（二歳）** 泣きながら母親を見送る時も、抱かれていまする時も、しっかりと目をつぶっています。しばらくして落着き遊び出すのですが、家でも叱られたり、気に入らない事があると、目をつぶってしまうそうです。Mちゃんは、むしろ大人に目をつぶって欲しいが、それを言えず自分で目をつぶってしまうのではないかと思うのです。大人の目から解放され、自由になりたいという願望と意志が育つ大切な時期な

のだとつくづく感じたのです。

**Sちゃん（三歳）** 切り紙が大好きで、ハサミと紙を持てば自分の世界が広がっていくような子どもですが、友達との絵など大切にしているものを平気で切ってしまう事があり、ハッとしめます。絵を切られた子どもの心を労わると同時に、無表情をよそおっているSちゃんをすぐたしなめる気にもなれず、何故なのか、彼女の心の内側を知りたい思いで見守る事があるのです。

子どもの遊びには常に喧嘩や物の取り合いがみられ、「あーまた」と思う事はしばしばです。又、遊びの仲間に入りたいが入れず、友達が遊んでいる玩具を蹴ったり、放ったり、友達を背中を小突いたりして反応をみながら、少しずつ仲間に入っていく。そんな子ども同士は、仲間であり、ライバルなのです。楽しみを共に出来るまでは、時間と助けがいりますが、大人が言葉をかけるより、実際に楽しく遊ぶ体験を繰返す事で、互いに受け入れる気持を育て合うのだと思うのです。

このような子どもたちと接していると、幼かった頃の私の体験、成長したわが子の想い出等が鮮やかによみがえってきます。テレビ等の影響を受けながら育っているといわれる今の子どもたちも、その心の内側は、私自身、あるいはわが子の幼かった頃と変わるところがないことが実感され、改めて子どもたちの心の動きに共感させられます。



## 子育ての中で育つ

加藤 邦子

We 編集部から「子育ての中で育つ」をテーマに以前に送った小冊子「若い娘たちのための子育てガイドブック」を踏まえて原稿をとの依頼を受けて、少々とまどっている。というのは、このガイドブックをつくった「女の自立と子育てを考えるグループ」はすでに解散し、メンバーは別々に活動しているからである。それでもということなので、その辺の事情も含めて書かせていただくことにした。

一九七五年国際婦人年に愛知県でも「国際婦人年あいちの会」が発足し、その中で女の自立と子育ては切り離せない、その点をさぐるということが集まったのが、前記のグループである。女と子どもは常にワンセットにされ、仕事に出れば、「スキシッップの不足」や「非行の原因」とされ、家にいれば「過保護」だ「過干渉」だ「教育ママ」だとレッテルを貼られる現状を、どのように打破していけばよいかを話し

合ってきた。

まず女たちが子育ての中でどのような意識を持ち、どのような展望を持っているのかをさぐるために、東海各地に住む十六名の方たちに、一年間にわたってアンケート調査に応じてもらって、小冊子にまとめることができた。この結果わかったことは、夫と育児の喜びを共有し、かつ経済的にも、自立できる道があるにもかかわらず、そのための情報が、若い時に届いていなくて、卒業、結婚、出産、退職、の道を送らざるを得なかった女たちの姿が浮きぼりにされた。これを変えていく方法をさがさなければと、メンバーたちは話し合いを続けた。自分たちもその中でもがいているという人も多かったので、同じ轍を若い人々に踏ませないためにも何かをしたいということになって、ガイドブック作製に至ったのである。

ガイドブックの内容は、まず女の人生は、結婚・子育てが全てではなく、あらゆる可能性が開かれているし、結婚し、子どもを生んだからといって自分の人生を生きることが可能である上に、子どもにとってもそのほうが良いことを訴えた。では具体的にはどのような方法があるのかということ、就職、結婚、出産、育児をテーマにあらゆる情報集めをした。

「働きやすい職場はどこか」と云うテーマでは、企業等で母性保護を手厚く実践している職場の紹介、就職する前のチェックポイントを、「結婚とは？」のテーマでは、結婚が人生の全てでないこと、名古屋地方の婚礼批判（女は物とセットで貰われていくのではなく、人間同士の結びつきを強調した）や、結婚する前に離婚のことも知っておこうと、くわしくのせた。「出産」「育児」のテーマでは、子育ては母親のみに責任があるのでなく、父親にも半分の責任があること、出産方法のアレコレ、良い病院や育児書（フェミニズムの視点に立って書かれた）の選び方、自分の体を知ることのたいせつさなどと共に、0歳児保育についても、良い保育の場であるなら、そして親がしっかりした子育て観を持っていれば心配がいらななどの私たちの結論を書いた。しかし現状の保育園には、子どもを一人の人間として遇する面が、制度や、人的配慮などで欠けている場合も多いので、親となった時はもっと発言し改革すると共に、若い時から子どもたちと接する機会を多く持つてほしいと訴えた。

最後に世界各国（ソビエト、中国、東ヨーロッパ、西ヨーロッパ、スウェーデン、オーストラリア）の女たちと子育ての現状をまとめたが、各国の女たちが、自立をめざして法の整備を闘いとり、男も女も子どもも、人間らしく生きられる社会をめざして、がんばっている姿を描くことによって、若

い人々に少しでも何かを感じてもらいたいと思った。特にスウェーデンの男女が、二通りの役割（家庭生活で、職業人として）を果たすためにつくられた諸制度や行政の姿勢に、メンバーたちも感銘を受けたものである。以上のような内容ができあがったのは、一九八一年八月で一五〇〇部発行し、愛知の各地で若い人々に読んでもらうことができた。

これらの作業を通してメンバーたちは、その後の生き方の足がかりをみつけていった。公務員のメンバーは婦人労働部門に転勤希望し、それまでに得た情報をもとにいつその活躍をしている。専業主婦であった人もフルタイムの仕事に就き、子どもは学童保育所でいきいきと放課後をすごしている。年輩のメンバーは息子のつれあいが仕事を続けられるための良きアドヴァイザーになっているし、夫と共に事業を始めた人もいる。幼児教育の職場にいた私なども、このガイドブックをつくることによって、現在の教育の矛盾をしっかりと見ることができた。現在は自由な学校「野並子どもの村」をこの四月にスタートさせるべく準備中である。

ガイドブック発行によって、グループとしては解散したが、メンバーたちは、若い人々に機会があれば私たちの経験や、情報を伝えたいと思っているし、私たちは愛知県を中心に情報を集めたが、各地方でも同じようなものがつくられ、新しい情報も集められ広がっていくことを願っている。



## カンボジア難民キャンプを

訪ねて

押切 郁

昨年十二月初め、日本ユネスコ連盟のコーアクシオンスタディツアーに参加し、タイを訪れた。民間ユネスコの協力対象事業の視察が目的で、今回は、タイ・カンボジア国境の難民キャンプと、サイト2と呼ばれる避難民キャンプがその訪問先である。

首都バンコクから真直にのびる道を車でおよそ五時間、途中で、数か所の検問所を通り国境の町アランヤプラテートに着く。さらに北に一時間、ラテライト（赤土）地帯にカオイダンキャンプがひろがる。一九七九年に開設されたこのキャンプは十二〜十四万人の難民を収容し、結核やマラリヤ、栄養失調で失明する子ども、ミイラのような新生児など悲惨を極めたが、国連機関のもとで国際民間ボランティア十五団体が援助活動をしており、飢餓状態は一応脱している。この中にある「幼い難民を考える会」の運営する保育センター「希望

の家」を訪ねた。ニッパヤシと竹で造られたその建物に入ると、子どもたちは一斉に「チョムレプツワー」と小さな手を合わせて挨拶した。地面にビニールの敷物、その上にぺったり座り、グループに分かれて絵をかいていた。保母さんの合図で歓迎の歌をうたうその無心な表情がかわいいた。採光は十分といえず、教材も乏しいが、竹製のボールやブランコ等の生活用具・教材に目がとまった。難民の木工さんたちの手づくりという、人の心のぬくもりの伝わる美しい作品であった。このセンターの中には、母親たちのための洋裁や織物などの技術指導の場も併設され、子どもを見守りながら母親自身も学習できるという配慮が成果をあげているという。また、自国の教育は、自国人の手でおこなわれることを原則に、すべて、カンボジア人が直接指導にあたるよう側面からの援助に心を砕いているのがボランティアの人たちである。そのキャンプには、現在二万三千人が残っているが、そのほとんどは、第三国への定住に希望を託し、その日を待っている人々である。そのためには試験があり、教育・技術のある人たちからキャンプを去ってゆくので、指導者不足がますます深刻になっているという。

サイト2は、カオイダンから、さらに北に三十キロ、国境



まで二キロの地点にある。一昨年の乾期大攻勢でタイ領内に越境した避難民十三万人が、国連機関の援助をうけながら飢渴をしのいでいる。私たちが訪れた前日、子どもが一人で国境にたどりついたという。近々また、攻撃されるらしいとの情報もあり、地雷が埋めてあるともいう、危険な地帯である。どちらのキャンプも、今なお、砲火に脅やかされており、乾期大攻勢で学校も教科書も灰になってしまったところも少なくない。長い戦乱が続き、その破壊はさまざまに、生命はもちろん、人間として生きる基盤である家庭・共同体・社会の崩壊による苦悩は深い。教育も十分にうけられない状況にあったから、八割が文盲という。特に、女性の識字率は低く僅か一〇％にすぎない。カンボジアの未来をになう子どもたちへの期待は大きく、教育援助、とくに指導者の養成・確保が緊急な課題となっている。

キャンプの中には、どこも子どもが多い。おとなの男がいなという異常な人口構成で、七割を占める女性、とくに、母親への教育も目下の課題である。が、子どもたち自身は、自分の置かれた状況もわからず虐げられていることも意識できない。人なつこいクメール族の子どもたちは、外国人がくると、オーケ、バイバイ、サンキューを繰返し、手を振る陽気さ、大きな目と鼻の形がタイ人とは異なる特徴、子どもらしい好奇心にみちた目が私たちを追いかける。遊び道具もなく、

言葉も通じないので、「じゃんけん」を思い立つ。私の手のしぐさをみていた子どもたちは、すぐに覚え、遊びに興じた。けんけんそうだった顔の表情もいきいきし、歓声や笑声もあがる。こんなに柔軟な心を持った子どもたちに、今、教育が必要なのだとつくづく思う。……たいいていのことは待つことができるが、しかし、子供は待てない……子供に対して「明日」はない。彼の名は「今日」……ガブリエラ・ミストラルの詩の一節が浮かんだ。この子どもたちのために各地のキャンプをまわり、教育指導にあたるのは、ユネスコ・バンコク事務所のラテナイケ氏、最後の日、ラテナイケ氏と話す機会に恵まれた。「人間が人間としての尊厳を育てるような配慮や人的協力なくしては援助は十分と言えない」と言い切るその言葉が、キャンプから帰った私たちの心により深く響いた。物から人への民際協力は、ますます相互理解が必要となるであろう。

(注) コーアクションとは、

Cooperative Action の略称で、ユネスコが主に発展途上国の教育振興と社会開発のために実施している運動をいいます。

コーアクションとは、援助を要請する(国の)人も、支援する(国の)人も、共に手を携えて行動することを意味します。



## 母子保健法改「正」は

許せない

——女性「障害」者として——

新井 純子

国は母子保健法を改「正」して、十六歳から四十歳まで（案）の全女性に「母性手帳」を配布し、女性の健康管理をチェックしようとしている。これは女性を母性のみで価値づけ、生き方を一方的に決めつけ、先天異常早期発見のための「モニタリングシステム」として先天異常Ⅱ「障害」児が生まれないように監視し、チェックしようというものだ。「障害」児が生まれる要因を、その母親や家族、親族にまで遡って手帳に記録し、コンピューターを導入し、強固なチェック機能で監視しつづけ、万一の事態にもすぐ対応できるようにするのだそう。

厚生省は「万一の時」の例として、サリドマイド禍や森永ひ素ミルク中毒事件をあげているが、これら人災にとどまら

ず、ある一定の確率で生まれてくる「障害」児に、はるかに多く適用されるに違いない。

恐ろしいことだ。国の福祉施策やサービスなどの立ち遅れで、現在の「障害」者の生きにくさがあるというのに、今生きている「障害」者たちの暮らしを切り捨てて、より生きにくくさせ、なおかつ生まれないようにするというのだから、「障害」者抹殺へ向けてまい進しようというのだろうか。

全女性に配布するという母性手帳により、十六歳という若い時期に「母性」が強調され意義づけられてしまうのは、私のような女性「障害」者にとって非常に問題だ。私だって妊娠する二十四歳の時まで、今の子供との暮らしを想像することとはできなかったのだから。

私は一年就学猶予の後、十六歳まで、群馬の治療を目的とする施設で、隣接する養護学校に通って過ごした。児童施設のために、中学卒業と同時にほとんどの子が施設から出なければならず、他の施設や作業所、または家庭へと移っていった。

卒業後しばらくして、友人の母親からこんな話をうちあけられたことがあった。

「うちのは今度、東京の成人施設に行くでしょう。そした

ら、中年の人なんかも一緒に、万一いたずらなんかされて、妊娠したら困るから、できないように手術してもらおうかと思ってるの。月経の時もきちんと始末できるわけでないし、汚したりするとみっともないからね。本人には内緒で、盲腸かなんかにして……」

友人は、日常生活程度ならほとんど自分でできる人で、だからこの話を本人が聞いたら、大憤慨して拒否するだろうことを母親も予想しての相談だった。

また、同じ施設の保母をしていた友人から、「月経について理解できない子に対してどうしたらいいか？」とうちあけられたこともあった。障害が重くて自分でトイレはもちろん、月経の始末もできなくて、また将来子供をもつことなど想像もできない子のトイレの介助をしていて、「一体どんな意義があるんだろうか」と考え込んでしまったのだそうだ。

彼女は、月経なんて周りに迷惑をかけるだけだし、いっそ子宮をとってしまったらどうかなんて考えも頭にちらつくのだと言っていた。

当時、私自身は食事やトイレも介助が必要で、他人事ではなかった。その後、私も東京へ出てかろうじて身辺処理を自分でするようになり、月経の始末に毎回30分以上苦戦していたときに、「手術をしてみようか」と思ったことさえある。障害の程度が重いため、身辺自立が第一義になり、子供をも

つことなどまったく考えられなかった。だからあの頃の月経は私にとって意味がなく、非常にしんどいだけのものではないなかった。

あれから十七年たって、私は三人の子供の母親として暮らしている。決して私の障害程度が軽くなったわけではなく、いろいろな人に手伝わってもらいながらの暮らした。だが今の私を想像できただろうか。

「障害」児を娘にもつ親たちにとって、初潮の訪れは手放しでは喜べない。障害が重ければ重い程、深刻な問題だ。今回、母子保健法が改「正」されて、母性手帳が配られるとなればこの親たちを刺激し、前述したような場合にも追いつくをかけるようになり、実行に導く圧力になりうる。女性の場合、一度避妊手術をしまえばもとにもどすのは難しい。障害があろうとなかろうと、誰にとっても未来は、選択権の多い、やり直しのきく人生であってほしいものだ。

(注)「障害」者の優生手術は優生保護法によって認められ、場合によっては、本人ぬきでも親の同意で行うことができる。



## 車いす迷惑(!)旅行

栗原実抄

沖縄の空は、真夏の青さだった。東京の初冬の景色からは想像もつかないまぶしさで、ハイビスカスや、名も知らない熱帯植物が、私の眼にとびこんできた。そして、一種の息苦しさを覚えた。それが、それから三日間、私が味わわなければならぬ苦しみの前兆とは思ひもなかったのだ。

昨年十一月二十二日から二十四日まで沖縄で、第七回車いす市民全国集会在開催された。メインテーマは、「豊かな心」であった。

私たちはこの会を、市民集会とか、車いす集会というような通称で呼んでいる。二年に一度、実行委員の出ている県で開催される。一九八三年には山形で、その前は大阪で行われた。車いすを使用している障害者が全国から集まって、会議を開くことは、並大抵のことではない。開催地までの移動や、

介護者捜しは、相当に大変なことだ。もちろんそういう問題も、市民集会で各分科会に分かれて話し合う。第四回の東京大会で、初めて女性障害者の問題を考える分科会ができた。その時の有志が後に集まって、「むかい風」が結成されるのだ。

私は一年前から、この沖縄行きをとても楽しみにしていた。ところが、開催の三か月前になって、あのJALのジャンボ機墜落のニュースがとびこんで来た。沖縄には、飛行機以外早く着ける交通機関がない。ブルートレインとカーフェリーを乗り継いで、なんとか行けないこともないが、障害者には長旅は相当にこたえるのだ。

「むかい風」の同志の堤愛子さんは、あの事故で友人のおつれあいが亡くなったこともあって、飛行機では絶対に行かないというのだ。彼女らのショックの激しさに、私がまた強い衝撃を受けた。堤さんのお父様が、心臓の具合が悪く療養中なので、なるべく遠くへの旅行は避けたい、ということもあって、結局「むかい風」からは私一人が参加したのだ。

飛行機墜落のショックは、日を追って強くなり、「決死の覚悟」で沖縄行きを決行する気持ちに、いつのまにかなってしまうていた。幸いに飛行機は往復とも、ANAだったのでいくら救われた気がした。座席もできれば後部にしてもらい

たかったが、団体扱いでは無理も言えないので、それは我慢した。

とにかく一番悪いことを想定しておけば、いざという時の心がまえになるだろうと思った。墜落した時に、家族が確認しやすいように名前と住所を記したものを、身に付けねばとまず思い、考えついたのが、18金のペンダントだった。デパートのアクセサリー売場の顔見知りの店員に、笑われるのを覚悟の上で相談してみた。

その店員は「このごろそういう注文がわりと多いんですよ」とあっさり言うので、私のほうは、いささか拍子抜けしてしまった。血液型のペンダントがあるそうなので、裏面に住所氏名・電話番号を刻んでもらうことにした。チェーンも18金にしたので、高価な買物になった。

心残りのないようにと思って、友人、知人にはなるべく会うようにした。一緒に行ってもらおうUさんにも、ご家族に了解をとってもらうように話した。遺言までテープに吹き込んで行こうと思ったが、あまりに大げさすぎるので、それはよした。なんでも完全にしなければ気がすまない私の悪い性格が、こういう時には特にいかになく発揮されるのだ。

万全の体制で臨んだ沖縄行きだったが、出発の前日に体の調子が狂い出した。軽い風邪の症状だったが、沖縄に着いた

とたんに気温の変化で悪化してしまったらしい。飛行機が無事に着いたという安堵感から、緊張が一度にゆるんだのも確かにあった。

そのころの東京の最高気温は、一五、六度がせいぜいなのに、この日の沖縄は日中二七、八度まであがっていた。飛行機の中でも汗ばんでいた私は、那覇に着いたとたんあまりの気温の変化に、体温の調節がきかなくなってしまった。

ホテルには冷房がはいっていた。私には持病の慢性気管支炎があるのだ。強い冷房にあたると、せきが出始めて止まらなくなる。一度悪化して、ぜんそくになりかけたこともあった。夕方からの開会式と交流会も、冷房があたりないところを、あちこち捜さなければならなかった。交流会も最後まで参加できず、珍しい沖縄料理も、あまり味がわからなくて楽しめないままに、途中で席をはずした。

救護室を捜して、そこにつめていた看護婦さんに熱をはかってもらったが、その時は平熱だった。いつも東京でかかっている病院の薬を飲んで休んだが、夜中にせきのひどい発作が起きて、明け方にまた看護婦さんに来てもらい、体温計をあてたら今度は三八度近く熱があった。

朝七時ごろに、実行委員会のボランティアの人と一緒にタクシーで病院に行った。その日は祭日だったが、救急病院なのですぐに診察してくれた。ぜんそくの発作が起きていると

いうことで、吸入をさせられた。以前発作を起こした時は、吸入器での治療はやっていなかった。口を開けたまま十分以上もそのまま吸入を続けるのは、私のように体がすぐ緊張してじっとしていられないものには、大変苦痛だった。

それでもなんとかがまんして吸入を終えると、発作のほうはいよいよ楽になっていた。木枯しが胸の中を吹きまくっているような、ヒューヒューゼーゼーは少しおとなしくなっていた。

午前中は、ホテルの自室で少し眠ったが、午後からは女性障害者問題の分科会に、一時間ほど参加した。前の晩に看病のためにあまり寝ていないUさんに休んでもらおうと思い、高校生のボランティア介護を頼んだ。その日の晩も、Uさんと一緒にトイレや着替えを手伝ってくれるボランティアに来てもらった。翌日もまた一人、別の人に頼んで、なんとかUさんの負担を軽くしようと努めた。

私は熱が出たりして寝つくと、体がグニャグニャになってしまうので、介護が一人ではできにくくなるのだ。トイレも一人がかかえて、もう一人が下着を脱がせたり、着せたりしなければならぬ。熱を下げるためにしょっちゅう水分を摂っていたので、一時間置きにトイレに行っていた。

沖縄でお世話になった人たちは、数えたらきりが無いほどたくさんいらっしゃる。皆さんがとても暖かくやさしいのに

は、ただただ感激した。本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。

女性障害者問題の分科会は、途中からの参加なので流れがよくわからなくて、東京の参加者としてあいさつしただけで、資料とかをもらって部屋にもどった。短い間に聞いた分科会の内容は、恋愛や、結婚などが主なテーマになっていたようだ。これまでに何度も取り上げられているので、あいさつの中で私はつい、「またこの議題なのか……」と、言ってしまったが、まだまだタブー視される問題なのだろう。

二十四日は、午前中が閉会式で、午後はバスで南部の観光コースを回ることになっていた。しかし、その日は沖縄特有の台風のような雨と風で、熱が下がったばかりの私には無理だった。東京に帰るのは二十五日の夜だったので、その日になんとか市内を見て回れればと思った。

翌日は天気が良くて、午前中観光タクシーで、守礼の門やサポテン公園、ひめゆりの塔などを、三時間ほど見て回った。最後の日になってやっと、沖縄に来たという実感がわいた。

那覇空港十六時発の便に乗り込んだとたん、四日間がなんと長かったのだろうと、ため息が出た。Uさんもホッとしたような顔をしていた。旅行行行って、介護者や周りの様々な人に、こんなに迷惑をかけたのは初めてなので、ただただ申し訳ないと思うばかりだ。



## 臨教審「審議経過の概要(その3)」を発表

臨教審は、四月に第二次答申を取りまとめる予定だが、それに先立って一月二十二日、第一次答申提出後の審議の状況を公表した。全文二十一万字という膨大なもので八章から成り、臨教審の考える「教育改革」の骨格を知ることができる。

注目すべきは、第一章「21世紀に向けての教育の基本的在り方」だ。ここでは「教育荒廃を生んだ原因・背景を分析、(日本社会・国民意識)〈文明史的課題〉と広くとらえ、学校・家庭・地域、いずれにも原因があるとしながら、教育制度・政策についての批判・反省は鈍い。さらに、家庭機能の低下に乳幼児期における母子相互作用の不足をあげ、敗戦の結果としての父性原理の否定のために、内面的抑制力、規範力、自主性、たくましい自我を育ててこなかった。極度に形式主義的・瑣末主義的な「管理教育」は、父性原理の衰弱を示していると述べているのは問題だ。「能力に応ずる機会均等」こそは、悪平等の弊害に陥らずに、個性の尊重、個人の尊厳という原

則を貫きつつ、自由と平等の均衡を保つための中庸の道である、と。ここに、臨教審のいう個性の尊重のまやかしがはつきり出た。

第二章「生涯学習の機会の拡大」でも、母子相互作用による親子の絆および母性の形成にとって重要とされる乳幼児期に、安心して育児に専念できるようにするためには、育児休業制度および女子再雇用制度の普及が必要と、助成措置をうたっている。働き続けながら子を育てる親への配慮はない。また、父親の育児参加推進といいながら、それは母親の精神的な支えになるため、というのだ。

この章で、家庭科について触れている。

「長期的、根本的には、よき家庭人となるために必要な心、知識、技能が習得できる学習体系について、学校教育、社会教育を含め、年齢段階に応じた内容・方法を検討する必要がある。学校教育においても、このような観点から、家庭科の位置付けや内容などを中心に、他の教科との関連を含め、見直す」。この項のみだしは、「学校教育における将来親となるために必要な学習の重視」である。家庭科とは、将来親になるための教育をす

るものか？

第四章「初等中等教育の充実・多様化」は

・学習指導要領の大綱化・中学の選択教科の拡大・小学校高学年の教科担任制拡大・小学校低学年の教科の総合化・徳育の充実、道德の内容の見直し・高校修業年限の弾力化などと並ぶ。そして次の記述がある。

『技術・家庭』『家庭一般』については、共通必修にわたる内容と、生徒の興味・関心に応じ選択し得る内容とに区分して履修する方法を検討する』。

昨年秋季発足した教育課程審議会に細部を任せるつもりか、この章は大変そっけないものだが、その中で、技術・家庭と家庭一般を、共通必修と選択とに内容を区分するとしたことに注意しよう。

第五章「教員の資質向上」は、「いじめ」「体罰」などからんで、最も注目を集めていたが、教員採用手続きの早期化・初任者研修制度導入、期間一年・現職研修の体系化・社会人活用の拡大、特別免許状の創設・教育実習の見直しと続く。「教職適性審議会」は賛否両論があることを明記し、教委活性化策に務めてさらに検討するという。全体を通して男女平等の視点が欠落しているばかりか、母親の学校給食への参加、手作り弁当など性別役割を強調している。

(半田)



# Weになつてもいいから、 なつても聞い



◆一月号の「Weに何でも言おう」

「……、稲邑さんの文を読み、私も思いあたるフシがありました。私もWeをすすめた人に「むずかしすぎる」と言われた経験があります。そのような時、「どこが?」「どうして?」とつっこんで聞かず、「そうかなあ。そんなにむずかしいのに」と思いつつ過ごしてきたことが悔やまれます。

Weの内容は、人間が誰しも生きていく上で避けて通れない問題を扱っていて、しかもそれらは、現代の「問題」になっています。「問題」になっているのに、考えたたり自分の問題ととらえたりする習慣風潮が少ないので、そのことが解決されないのだと思います。管理教育を親がどうみるかとか、消費生活をどう考えるか。一月号のくらしや文化のこともそうでしょう。本当は考えるのが必要な問題

なのに、考えていないから、自分と合わないと感じて「むずかしい」という反応になるのではないかと思います。清く、正しく、美しく、というのも、現代うけしないものです。だけれど、基盤をしっかりとさせておかないと、同じ教育のことを問題にし、「管理教育はよくない」と考えても、それではどうしたらよいのか、という方向がおかしな所に行きかねません。

これほど問題としていいる事柄に無関心でいられるほうがおかしいというべきでしょう。「フツウの主婦」が考える、その層が厚くなる、ことが、大きな力だと思えます。現実はどうだから、とそちらに合わせるのではなく、あくまでも理想は動かさない。理想がなくて現実にばかり合わせているのが、今の世の中ではないかと思えます。

やはり一月号の小林美恵子さんの文も共感しました。管理はよくないが、管理が必要不可欠となつてしまった今の「学校」。必要不可欠な「善意の管理」であっても、それはやはり管理に違いなく、それを生徒も期待するところがあリ、また管理せねば成り立たぬ現実です。管理は教育ではないから、教育の自身がなくなり、多くの人が、管理することを教育だとすりかえて受け取っているのです。



うが意義がある、ということです。

極端になってしまいました。多くの人の反感を買うところだと思えます。が、学校や教育をめぐる情勢は、今の社会科学の理論や、少数の良識ある人々の善意で、もはやどうなるというものではない、と思います。今の社会科学を土台に、それをも乗りこえたものがなければダメだろうと思います。五年目のWeが、さらに充実したものとなるよう、支援します。

### (三島・梶原公子)

◆一月号の「波」を読んだら、村瀬氏の『子ども体験』が取り上げられていて、しかも「初めてうなずけた」とありましたので、うれしくなりました。まったく賛成だからです。この方の論文には、私も詩誌「あんかるわ」でずっと以前から、かなりの人だと注目して、多くを学んでいるものです。「いじめ」のことをさんさんっぱら考えたとき、この人と芹沢俊介氏の考察には多くを共感しまし

た。

### (横浜・植垣一彦)

◆連載が終わるということは、読者としてはこれまでそのことばや生き方に触発され、魅了され氣にかけてきた部分がなくなってしまうのでさびしい氣がします。長谷川公一さんが「ことばの力を信ずるものに幸あれ」と力強い祈りをこめてブックランドを終了したことも心に残ります。

「教室の窓」も終わるのでしょうか。チャーちゃんの姿によってもう一つの自我のページをめくることになったという植垣さんのことばに、人と出会うことの何たるかを教えられます。

「距離の悲劇が、いじめや自殺や暴力という形で現れているのだとしたら、私は教師として人間として、教室という膝の中で、一人ひとりの子どもの愛らしさを手離さず感受していきたい」と、私が理解した植垣さんのことばは、そのまま児玉すみ子さんのことばに重なることに氣がきました。

はじめ見たいものを見ようとすると、見る、見つめる、やがて映されて……、次第に生徒との間の距離が小さくなっていく心の変化を語るが、ついには愛に満たされて語る時は、生徒が鏡であることさえ氣にならなくなるという、その精神の極みにおいて語るお二人のことばに、私は耳を傾けます。

武田秀夫さんの霞通信も、長い間楽しませていただいたので、名残惜しいです。「内面の闇から発するうながしによっておこる突然の変容、そこに私はきわめて危険な気がします」とありましたが、霞通信こそ、きわめて危険で、刺激的・文学的美を感じさせます。

単行本「当世教師廃業事情」の中の「愛のなごり」が、私には印象的でした。「白く魁偉な雪の山は死の表徴なのだ」ということばが乳腺腫の組織検査をしたばかりの私の身には、それこそ天啓のように響いてきたものです。悪性で

はないことがわかった今だからこそ白い雪の山の厳肅な美がみえてくるのかもしれない。

ことばとは、人と人を時空をこえたようなところの出会いに導いてくれる。人間の大きな遺産なのでしようか。などと生意氣なことを言えるくらい、Weは、いろいろなことを、私に教えてくれています。

### (仙台・加藤弘子)

◆児玉すみ子さんのカウンセリングは、本当にもう終わってしまうのですか？ 残念です。私はいつもここを最初に読んでいました。

医者―患者のような診断を下す人下される人という位置関係を固定したままで説かれるカウンセリングや、よい「大人」になるため「人と仲よくできる」ためのカウンセリングが多い中で、これはカウンセラーがクライエントと一緒に変わっていくことをあたり前にしていくところがすごいと思います。ぜひ続けていただきたいかったです。

### (東京・杉本千代)

## 序にかえて

武田 秀夫

いまから二十年前、私が亀有から青梅の中学校に転任したばかりの冬の夜のことです。畑にかこまれた大きな農家の二階に下宿していた同僚のKさんと宵から酒をのみだしてあまだ七時かと思つたのも束の間、気がついてみたらもう十一時になっていました。今晩は泊まっていけとKさんがいい、そうだなと二階の部屋で寝ました。今晩気がつくあたりはまっくらだ。おやおもって首を動かしてみろが、どちらともまっくらだ。一瞬なんだか不思議な気分になりました。やがて、ああそうか、ここは自分の部屋ではないのだと腑におちました。するとKさんがごそそと起きて下におりていきます。手洗いにでもたつたのでしょうか。自分もしきりにのがかわいてきました。のんだ酒が口の中でベトベトになり唾もねばっこくなつて水でうすめてくれとせがんでいるような感じです。Kさんがあがつてきて、スタンドを消して、また寝入った気配。どうしようかな、水へのみにいこうかな、どうしようかなとしばらくかんがえて

いましたが、ヨイショと立ちました。するとKさんがまだ寝ていなかったらしく「階段の下に電気がついているから」といいます。「ああ」と答えて下におり、お勝手におりて水をのうとしました。すると、外が真白なのです。ああ、雪だと思いました。それから水をのんで廊下をギシギシ歩いて厠に行きました。厠の窓から見ると、やっぱり真白だ。ああ雪だなあといいながら外を見ていました。しかしそれにしてもあんまりあたり一面が真白なので、霜に月の光がさしてああんっているのかと思ひました。なんだかそんな風景をいつか見たことがあるような気がして、霜に月の光かなと思ひました。しかし、でもやっぱりあれは雪だなとひとりうなずいて厠を出ました。

二階へあがつてKさんに、

「外は雪らしいな」といったら

「あれは霜だよ。茶の木の上なんかだろう？」

と言います。

「そうかなあ。でもあれは雪だぜ」

「いや霜だよ。よくああ見えることがあるんだ。霜だよ」

「そうかなあ。そういえば、たしかに霜に月の光があたつてそんなことがあるからなあ。霜かも知れないなあ」

そういつてまた寝ました。ねむりにはいつていきながら、いま見たばかりの真白な風景やKさんとの会話の調子などから、なんだか自分が童話の中にいるようだなあとぼんやりした気分になり、そうなりながらいつそう深くねむりにはいつていきました。

あくる朝おきてKさんが雨戸をあけたら、やっぱり、あたり一面

見事な雪でした。

いまから思うと、あの夜の私の中には、宮沢賢治の「なめとこ山の熊」が生きて動いたのです。

いまでは熊のことばだつてわかるような気がするほど熊が好きで、それでいて熊捕りの名人である淵沢小十郎はある年の春近く、淡い六日の月光を浴びて向いの谷をみつめている熊の母子に出会います。後光がさしているような気がして釘づけになったように立ちどまった小十郎の耳に、甘えるような子熊の声がきこえてくる。「どうしても雪だよ、おっかさん、谷のこち側だけ白くなっているんだもの。どうしても雪だよ。おっかさん」と母親の熊が言う。

「雪でないよ、あすこへだけ降るはずがないんだもの」

「だから溶けないで残ったのでしょう」

「いいえ、おっかさんは、あざみの芽を見にきのうあすこを通ったばかりです」

月の光が青じろく向うの山の斜面をすべっていく。

「雪でなければ霜だねえ。きつとそうだ」

ほんとうに今夜は霜が降るぞ。お月さまの色だつてまるで氷のようだと小十郎は思う。

「おかあさんはわかったよ。あれねえ、ひきざくらの花」

「なあんだ、ひきざくらの花だい。ぼく知ってるよ」

「いいえ、おまえまだ見たことありません」

「知ってるよ、ぼくこの前とつて来たもの」

「いいえ、あれひきざくらではありません。お前とつて来たのきざざげの花でしょう」

「そうだろうか」

子熊はとぼけたように答え、小十郎はもう胸がいっぱいになつて、月光を浴びて立っている母子の熊の方に風が行くな行くなと思ひながら後じさりする。と、くろもじの木匂いが月のあかりといつしよにすうつとさす。

私がこれから「読書つれづれ草」で追及したいと思つているのは、他人の文章がいつのまにか私の血となり肉となつて私の内部で生きて動くようになったその消息についてです。私は、自分が「なめとこ山の熊」において読みえたと思ひこんでいたもの、つまり私の意識の表層にとどまっていた作品理解、そうしたものがいかに底の浅いものでしかないかを二十年前の冬の夜にはっきり知りました。あの冬の夜、私が半醒半酔の朦朧とした状態、意識のタガのゆるんだ薄明の世界にあつたまさにそのときに、「なめとこ山の熊」は私の内側でいかに自然に動いたのです。

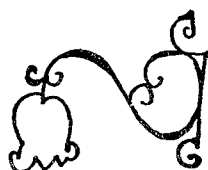
ああ、月下の霜かそれとも淡い新雪かと見まごうようなあの不思議なもの。あの花のようなもの。それを見ていたのは母子の熊だったのか、それともこの私だったのか。「なめとこ山の熊」という作品は私の外にあるのか内にあるのか。書いた賢治のものなのか、読んだ私のものなのか。

私はこれから、書かれたもの（作品）と読まれたもの（私の内なる作品）とが溶融する不思議な境界を、私の過去にさぐってみたいと思います。

# ワンポイント近代日本女子教育史……秋枝 蕭子

## 〈1〉女子教育の夜明け

「“I am a girl”の告白とA六番女学校」



明治二年、米国長老教会派宣教師カロザーズ夫妻が、東京築地の外国人居留地で開いた家塾には、新しい世界情勢や学問知識を吸収しようと、多くの男生徒が学んでいたが、その中に、男装した一少女が、ひそかに潜り込んでいた。ある日彼女は、大胆にも黒板に““I am a girl””と書いて教師たちを驚かせた。男装してまで学ぼうとした少女の好學心に打たれたカロザーズ夫人は、翌明治三年、その居住するA六番館で女子のための学校を開設したのである。A六番女学校と称されたその学校は、同年横浜に開かれたミス・キダー女学校とともに、我が国最初の女学校となったが、後に紆余曲折を経て、明治二十二年に統合改組し、東京麹町に移転して「女子学院」となり、今日に至る名門女学校となった。

ところで、太平洋の東のアメリカでは、A六番女学校が開かれた前年、すなわち一八六九年には、名門ボストン

大学が大学院まで女子に開放しており、また一八三〇年代以降、大西洋岸東北部を中心とした女子大学や、中西部を中心とした男女共学大学が数多く出現していたのである。

一方、日本では、徳川封建社会の代表的な女子用教訓書である「女大学」に象徴されるように、女子を天性の愚か者ときめつける男尊女卑思想や、「女はすべて文盲なるをよしとす」女の才あるは大いに害をなす、決して学問などはいらぬものにて、仮名本よむほどならばそれにて事たるべし」(松平定信の家訓書より)の考えが、明治維新後も一般的であった。したがって、女子教育が世界で最も早く進んでいたアメリカから来日した婦人宣教師たちが、無知の闇の中に閉じこめられていた日本女性たちに同情や義憤のごときものを感じ、彼女等の啓蒙に熱意をもったのも当然であつたろう。明治七年「女子小学校」(青山女学院の前身)を創設したスクーナーカー女史も「女子教育など無駄だ」と忠告した日本男性たちに憤慨して、敢えて女学校を開設したと回顧談で述べている。また前記A六番女学校開設者カロザーズ女史が明治六、七年頃教えていた上田女学校に学んだという青山千世(故山川菊栄女史の母)は、ある日女史より地球儀を見せられ、日本の位置を知った感激を、盲の目が明いたとき、一生忘れ得ぬものと回顧しているが(「女二代の記」)、婦人宣教師等によって、正に我が国女子教育の夜明けがもたらされたのである。



## 生きることは闘うこと

吉田和子

部落差別に抗して闘っている人々の姿を伝えたい。さて何から話そうかと考えてまず浮かんできたのは読み書き教室のこと。週一回ムラの解放会館で老人から30代半ばまでの年齢層の人々が、文字の読み書きを学んでいる。部落差別は、教育を受ける権利を奪ってきただ。部落の選挙事務を担当した市職員が、投票したい候補者名を代筆してくれと言う人が二百人程いたと語った。こうしたことは、この部落だけではなく全国にある。

読み書き教室は、そうした人たちの要求を受けて解放運動が取り組んできた。夜七時半「こんばんわ」と挨拶を交わしながら生徒も講師も早速机に向かう。「あいうえお」から勉強する人、漢字の練習をする人、自動車や調理師といった仕事に結びつく免許を得るため頑張っている人など様々だ。勉強ばかりでなく、おしゃべりにもぎやかだ。ある人は、「学歴聞かれた

ら、ありもせん大学いうたんねん」と笑わせる。丸岡秀子さんが、『岩波ブックレット49』の中で、「もし学歴を聞きたいなら、あなたの小学校はどこでした（中略）小学校を出ない人なんて、まったくいないんですもの」と書いておられる。しかし、読み書き教室の生徒たちは、「まったくいない」はずの小学校入学経験なしの人、中退の人、卒業証書はもらたけれどほとんど行けなかったという人たちだ。丸岡さんが書いてるように、小学校を出ない人はいない、という前提で聞く人がいたら、グツとつまってしまつて笑い話にだつてならないだろう。彼女の文章は、読み書き教室の生徒にとつては残酷だ。それ以上に文字が読み書きできない事実をもつて残酷だ。役所に行く時は右手に包帯をグルグル巻きにして行くと言う人、駅の切符販売機の前でにわかに目が見えないことにして人に買ってもらつた話。読み書き教室の話題は、そんなくちおしい深刻な話を笑い話にだつてできる場だ。仲間たちと、差別によつて奪われたものを奪いかえすために闘っているからだ。

鉛筆の持ち方から学んだ人が、十年余りかかつて調理師の免許を取つた、運転免許を取つたといった明るい話題も多くなつた。そんな時、皆が喜びを分かちあう。解放への闘いは、素晴らしい可能性だと読み書き教室の灯が教えてくれる。

# 詩

## 娘は発掘をする

羽生 槇子

「見にくる？」と考古の発掘をする娘が言ったから見に行く  
そこは前田の殿様の屋敷だった

殿様の屋敷内 家臣が住む長屋だった

長屋を斜めに突っ切る形で現代の建物があり

その現代の建物の改築のための発掘だ

柱石がある 溝がある 小穴が点々とつづくのは塀でもつくったんだね

井戸がある 古図面と同じ位置に井戸が二個 深井戸だ ローム層だ

土を円形に深く掘って何百年 びくともしない土の固さだ

井戸の並びと直角に長屋がのびていたはず 二列に並んだ長屋のはず

そしてなぜか地下式坑がある 不規則に掘られた穴ぐらがぼこぼこ幾つもある

さて穴ぐらの使いみち とわたしは考える

いくさとなったときのための食べものの貯蔵庫

スワ一大事というのがちよくちよくあった時代だ

人でも物でもそこにまるくなつてひそむ場が要る

敵がおそってきたらハネ戸や何やら通つてたどりつく

江戸は火事が多かったから そういうときの何かの使いみち

いいえ かくれキリシタンだったらそこでお祈りをする

地下式坑は図面がない 穴ぐらから特別の遺物は出てこない  
殿様の家来となつて長屋で並んで暮らしながら

一軒一軒家の内に不規則に穴ぐら掘つて

穴ぐらについては口にのぼせないで

「おはようござる」とか「それではごめんつかまつる」

とか言つて 殿様ではないからさんまを焼いて食べたります

セト物のかけらが発掘される とつくりが発掘される

「ササ一献まいろう」という

台所では「おかんはこのくらいかしら」てたしかめる

掘りあがつた全ぼうを娘は「見た？」という

見た見た いじらしい人の営みを見た

人の営みとは つまり

人が土に向かつて それぞれ穴ぼこをあけること

大小の穴ぼこ 切りこみや段差をなめるようにあとを追つて

かたちどつてくつきり浮きあがらせると空の下の 壮大な土自身の自己表現だ

斜めに流れる長屋の営みより もっと古い時代の

けもののおとし穴が いっしよに長細くあいて

そこでも人の営みを告げている 古い人の呼び声がする

何層につづくのか 人は折り重なって起き伏しし 通りすぎる

その層の上 わたしの娘は微笑して

穴ぼこといっしよに さんさんと降る日の中だ



## わたしの身体は わたしのもの

酒井和子

大塚駅から五分、商店街を左に曲がって十軒

目、たばこ屋さんの前に六坪あまりの小さなお店がある。手作りの小物などが並んだショールウインドーの下には、手書きで『赤かぶ屋』と書かれた看板があり、その下に小さく——リサイクル、思春期相談室、教科書問題を考える豊島区民の会、酒井和子を支える会……とある。

『赤かぶ屋』は共同事務所兼オーブンスペースとして、なんとか地域の中に根づこうとしている。この一年間『赤かぶ屋』の周辺で起こったことがらでつづてみたいと思う。

最初は、近所に住むジュンちゃんのお母さんの話——。

「三歳児検診で保健所に行ったら、ホーケイだから手術した方がいいって言われたのよ。真性包茎だから早い方がいいって。泌尿器科に連れていったら子どもはできないって断られて、あちこち捜してやっと手術してくれる病院みつけて何万円も払ってやってきたのよ。ジュンは痛いって泣くし、大変だったわ。でも最近そういう子が増えてるって。それにこの子は言葉が遅いって。このままだといい幼稚園に入れない

から、お絵かきとか字を教えてくれる塾に入れることにしたの、月一万八千円——内職してがんばらなくちゃ」

一歳の妹と追いかけてっことをしているジュンちゃんを目で追いながら、最近包茎まで早期治療の対象にされているのかしらん、と驚いた。私も男の子が二人いるが、保健所にはツベルクリン反応に連れて行ったきり。一歳児や三歳児検診で何が調べられているのか知らなかった。

政府はわが国の母子保健は世界のトップクラスであるとして、今後は障害児の発生予防・早期治療を推進するとか。そのために、現在の「母子健康手帳」にかわって、成人時全ての女性に「母性手帳」を持たせようという、母子保健法改悪の動きがある。障害児は生ませない、「健全」な子を生み育てるために、女の生き方を「母性手帳」で管理しようというわけだ。

ジュンちゃんのお母さんのように親心が逆手にとられて、自分と家族の健康は自分で管理する力すら奪われるのがこわい。



## 第1回はなぜか“肉べん”

春になったらおべんとうを作らなきゃっていう人や、今も作ってるけどマンネリで……という人、いやいやマンネリどころか毎日何にしようかと頭を悩ませている人、など、おべんとうにはいろいろな思いを持つものです。

今月から登場の私め、中学生二人の子持ちであります。給食なきため毎日弁当づくりです。正確には毎日というよりほとんど、です。たまには子ども自身が作って持っていくますから。それもなぜか弟が姉の分まで作るのです。

さて、今回はわが家自慢の「肉べん」をのっけからご紹介。あ、断わっておきますが、私、料理研究家という職業人ではありますが、世にはんらんしているお子さま向きチャラチャラべんとうは決してこさえませんので御承知おき下さい。おいしい、健康によい、ということにおとなも子どももありませぬ。うちの子たちが「ママ、おいしかったよオ」と、彼らの胃と心が喜んだもののみ書きます。

### “肉べん”の作り方

豚肉肩ロースかロースの薄切り肉一人3〜4枚。一人分でしたらね。酒、みりん、しょう

ゆ、水各大さじ1を煮立たせ、そこへ肉を広げ（この手間惜しむとちちんで小さく見える）、一枚づつ入れていき、ハシで動かしつつガーツと中火以上でうらおもて煮る。

煮えてくるとスキ間が出来るのでここへピーマンを適当に切ってさつとゆでて放りこむ。ゆでるのが面倒なら生でもいいけどとなりのコンロでさつとゆでる位なんでもないはず。肉はすぐ火が通ってツヤツヤにいかにもおいしそうに煮える。引きあげる。ピーマンがまだなら湯か水を少しじゃつと足して強火でまたガーツと煮立たせる。

肉をごはんの上にまたまた広げてのせ、ピーマンもところせましとのせる。いかにも肉びつしりの感あり。

つけ合わせは人参を線切りにして塩と酢少々でもんだものが色も味もよく合う。

さあ、やってみて下さい。春のべんとう！というわけではないけれど、脂が固まらないこの季節、とてもおいしいわが家の「肉べん」！なのです。

# \*経済の目

## 生活サイドからみた経済

貿易摩擦① 月謝が払えない！

## \* 福島 澄香

神奈川の公立高校月謝の支払いは年三期に分け各家庭の銀行口座から引き落とす。今年一月十八日の支払い日、口座に三万五百円のお金がなく、払えなかった生徒一〇五名(全校七五一名なので一〇五名というのは七人中一人の割りで月謝が払えなかったことになる)中にはうっかり組もいような想像以上に生徒の生活背景は厳しくなっているのではない。生徒のアルバイトも増え、母親のパート状況も厳しいようで胸が痛む。

一九七〇年のドルショック、二回の石油危機以来、景気の小さな波はあっても全体には

主要国、地域の貿易収支(単位:億ドル)

		1982年	1983年	1984年
① O	E C D	▲ 203	▲ 154	▲ 47
	先進7カ国	40	▲ 38	▲ 445
	アメリカ	▲ 365	▲ 611	▲ 1,074
	カナダ	150	149	160
	日本	181	315	443
② E	C	34	106	85
	フランス	▲ 155	▲ 82	▲ 38
	ドイツ	267	233	218
	イタリア	▲ 79	▲ 31	▲ 45
	イギリス	42	▲ 11	▲ 55
	非産油発展途上国	▲ 480	▲ 240	▲ 120
③ O	P E C	630	440	620

通商産業省編、1985年版「通商白書」、6ページ ▲赤字国

① 西側経済協力国

② 欧州共同体(オランダ、ベルギー、ルクセンブルグを含む6カ国)

③ 石油輸出国

深刻な長期の世界不況が進行している時代です。一般に不況時は好況時にくらべ国内ばかりでなく国際的にも経済的な強者との格差差別が、さまざまな生活の場に広がるといわれている。

日本の貿易黒字は今年五百億ドル、十二兆円におよぶのではといわれ、表のように日本の黒字は世界の中で突出している。この異常な黒字は大企業を超過利潤の大きさと深く関連している。これに比し庶民の実質賃金上昇

率は4.5%。それも税金、社会保険料の負担増で吸いとられ、住宅ローン、教育費など重く自由に使えるお金は年々少なくなり、特に母子家庭高齢者層の家計は赤字で借金もできない人が多いという。

日本は戦後、輸出国をめざして再建した。

一九六〇年代高度成長の好況期には日本の輸出額はGNPの10%前後で、雇用労働者の増大と賃金上昇を通じて国内需要を広げ収益をあげていた(第二次大戦前後、世界不況の続く一九三五年輸出依存率20%近くに比し、はるかに低く安定している)。ところが長期世界不況に入ると日本の財界は再び産業構造と企業体質を輸出指向に変えてきている。財界にとって働く庶民は自らの生活を充実させ国内需要を支える消費者ではなく、もっぱら安い賃金、著しく長い年間労働時間によって輸出競争力を強める低コスト労働力ではないようだ。

貿易摩擦緩和、世界不況の軽減のためには、労働時間の短縮、賃金増、安い公共住宅、過大学級、千七百名近いマンモス学校の解消、公園、下水などの生活基盤や福祉の充実によって日本国内の需要拡大をはかるべきでしょう。

## CMの中の女と男

愛情に名を借りた

役割押しつけ

昨年にひきつづき今年も放映されている風邪薬のCMに「夜の咳に、妻の愛とコンタック」というのがある。風邪を引いて

が謳われている。従来日本のテレビCMが繰り返して描き続けてきた「男は外で働き、女は家で家事・育児」という定型的な男女役割は当然批判の対象となり、CM制作者はその対応をせまられている。

咳の止まらない夫のために、薬を求めて妻が夜の街をひた走る、というものである。一昨年

「亭主の『ながいき』は、女房のつとめです」(タケダメデイカル、中村メイコ・神津善行)

私たちは関西で「コマージュ」の中の男女役割を問い直す会」を結成して、昨年実施した第二

というように、あからさまな役割押しつけCMはもはや姿を消してゆくであろうが、それに代わって今後しばらく「愛情」を強調するCMが増えることが予想される。「母の愛」「妻の愛」

を「そろそろやめてCM」のひとつに選んだが、こりもせずこのCMは現在も流されつづ

……これも結局は定型的な男女役割の言い替えにすぎないことに気づかないほどに、日本の

けている。

昨年日本政府も批准した国連の「女子差別撤廃条約」

男たちは呆けてしまっているといえる。「あらゆる形態の差別」

の行動プログラム第四章には、広告を含むマス・

に対して、根気よく発言しつづけてゆかなければならない。

メディアにおけるあらゆる形態の差別の撤廃

(吉田清彦)

## いろんな十代人

「6を8にすると

ママはよろこぶ」

「おばさん、大人の字書ける？」突然わが家にとびこんで来た女の子はコートも脱がず、こんなにちわ！も言わずに私に聞くのよね。

？の私は「あがれば？」。あがって来た彼女に聞けば「62点」を「82点」にかえてほしいのと、

○印のついていない無印の所に正解を書くから大人の感じで○印をつけてほしいと言うわけ。

「なんで？」「だってさア、この間の英語のテストで私はサッチ(幸子という子のアダ名)に15

点まで、その前のテストで2点まで、だから82点

になれば少しかてる。「なんでそんなバレーのようなことすんのさ」と私。聞

けば実にアホらしいわけがあったんですよ。

彼女のお母様は娘の点数一覧表

&情報からの他人様の点数一覧表をお持ちあそばして「勝

った！負けた！」をやっているという。だから「大人の字でこ

まかして勝ったことにしておかないと後が大変だア」とさわ

ぐ。この手の母上様は結構たくさんおりまして。勝ち日は負け

子の親に会うとそっくり返って「お元氣？」。負けると「コソコ

ソ」。当の娘は「たまんないよ。テストの勝ち負けで自分の子や

よその子の人格を決めちゃったり、よその家庭の様子を探った

りさ。今時さ、負けるもんか！なんて勉強する子いるのかな

？」と嘆く。半分大人みたいな字で6を8に変装させたよ私。

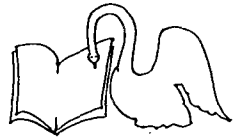
テストって勝ち負けのためにやるんじゃないもんね。再確認を

するのにやるんだもんね。学校も親もこのことわすれてるみた

い。子供は本当にやりきれないだろうね。

(鈴木みち子)

## 今月の読書から



半田 たつ子

### ◆斎藤茂男 編著

『生命<sup>いのち</sup>かがやく日のために』

共同通信社 価一、一〇〇円

ダウン症の赤ちゃんは生きてちやいけな  
んですか。どうして！ 若い看護婦さんの一  
通の手紙で始まったルポルタージュ。それは  
障害児の出現によってあぶり出される現代社  
会の意識状況を鮮やかにとらえた。急速回転  
しつつける効率と経済合理性を極限まで追求  
する競争社会の歯車。いつ、どこでできてし  
まったのか、テクノロジの高度化の集積の  
上に、いまよりもっと巨大な利得をもたらす  
幸せ社会があるのだという「国民的合意」。

一見多様な選択肢があるように見えながら  
実際は一元的な価値観に束ねられている私た  
ち。多数派の流れに歩調を合わせていないと

絶えず不安であり、逆行したり、テンポが遅  
れたりすれば「いじめられっ子」となって生  
き辛い今の社会。そこから、どのような社会  
に向かって歩いていくべきか、子どもたちに  
何を残してやるべきかを追求しようとしたす  
ぐれた本。高校生や大学生がこの本をテキス  
トにじっくり話し合えたらすてきだ。

### ◆早川勝広 編

『なにすんねん いたいやんけ』

— 子どものことばとの出会い —

乳幼児発達研究所 価一、〇〇〇円

保育園のY君、本屋の店先のかいじゅう絵  
本に見入っていて、保母に呼ばれた。ハッと  
気づいて歩き出した時、横の喫茶店から出て  
きた京大生とぶつかり、Y君はしりもち。  
京大生 あつ、すいません。(ていねいに)  
Y 君 なにすんねん。いたいやんけ。  
京大生 ……。  
Y 君 ぼうもつてるし、こけるやんけ。  
(Y君は散歩の時、道端でいろんなものを拾  
うので、歩き進むにつれて荷物がふえる)  
ヒョロツと青白い京大生。保母はちよっぴ  
りいい気分。

ここから書名が生まれた。編者の早川氏  
は、「なにすんねん。いたいやんけ」に、保  
母はちよっぴりいい気分だったけど、あなた  
はどう出会いましたか？ と問いかける。

A 男 せんせい、なにがた？

保 母 血液型は、O型や。(子どもたち、  
口ぐちに自分の血液型を言う)

B 男 ぼく、そんなきめてないもん。

C 男 ぼくかて、そんななかてにきめ  
たいないもんなあ。

B 男 なあ。

C 男 きめたかったからきめさ。(6歳)  
● 自分の知らないことが話題になって、く  
やしかったよね。

保 母 あのね、たきびのうたうたおうか  
A 児 たつきゅうびんのうたか？ (2歳)  
● 自然とじかにふれあう生活に恵まれない  
子どもたちの生活。

コメントもいい。閉じたことばを開き、こ  
とばで支え合い、ことばを豊かに展開し、こ  
とばで心を写す。子どものことばを拾いなが  
ら、メンバー自身の人生観・人間観を問われ  
た一年間の討議は、厳しく激しかった、と。

◆中谷君恵 著

『子育ての歴史』

―若い母たちにおくる―』

三一書房 価一、九〇〇円

「お父さん、お母さん、先生、そして若い保育者のみなさん、どうか人間を信じ、愛することを忘れないで下さい。お互い愛しあう心を育てようではありませんか。」

高等保育学院で「言語」「文学」を担当する著者からの心のこもったメッセージが中身の濃い本になった。古事記、日本書紀をはじめ、昭和二、三十年代までの文学作品、東西の豊富な文献を駆使する著者のまなざしは、若い人の目をピタリと見つけ、あたたかい。自身の子育ての歴史もあからさまに開いて、「しつけ」と「おしつけ」の違いを、「抱きしめて」「おろして」「ほっといて」という言葉で語る。

子ども叱るな来た道じゃ

年寄笑うな行く道じゃ

「私のこの本は、しよせん、この二行のことばにさえ及ばぬさやかな試み」と言い、結びの章に、著者の教え子二人の作文を飾ったところに、シャイな人がらを見た。

◆国立市公民館保育室運営会議 編

『子どもを育て自分を育てる』

―国立市公民館「保育だより」の実践―』

未来社 価一、八〇〇円

十三年も前になるのか。『主婦とおんな』を〇をつけ線を引きながら、やや興奮して読んだのは。油のよく沁みこんだ木の床をギシギシ鳴らせ、国立市公民館を訪ねた日もあった。その公民館活動は、あれから大輪の花を咲かせた。花びらの芯には伊藤藤子さんがいた。

おとなの女が学ぶとは、子どもをあずけるとは、子どもから自立するとは、そして老後……。ごくあたり前の女たちが、日常の暮らしの積み重ねを深く生きていく姿を、私は伊藤さんの著書で見てきた。その中に、藤村美津さんとの対話「育児力」もあった。

「保育室だより」十年を記念してまとめたこの本を読むと、子どもを育てることで自分育ててきた国立の母親たちが、すでに伊藤さんから藤村さんからひとり立ちを始めたことを知る。彼女たちはこの本を編むことで、登りがいのありそうな山々をみはるかす峠に立ったという。学びの中で育てた友情にも祝福を！

◆村瀬 学 著 長新太 絵

『小さくなあれ』

大和書房 価一、二〇〇円

様々な生活があり、思いがあり、それらが起こっては消えていく私たちの日常。二度と見たくない光景、チラリとも思い出したくない出来事もあるのに、何ということもないのに、この光景は忘れずに覚えておこうと思うこともある。その何でもない心と体の動きが深い感性でふんわりととらえられ、詩片となった。

「娘たちに」と名付けられたⅡ章のたのしさ。それはこの号の村瀬さんの文章でも味わえるけれど……。Ⅰ章は、不思議な深い色あいのハーモニー。たとえば「すれちがい」おかしなことに、「そして「いい」。「いい」の一節。カメラのピントを合わすみたいに／気持の中で何かを急にOKにする／するとそこで

「いい」／という感じが出てくる／……：なんでもないのに／とにかくOKだ（それでもいい）／っておもうことがあって／するとふと自分がいままでめつたに／こんなふうにOKする／ってことをしなかった／ということに気がつくのです

# 波

幼い日

半田 たつ子



私は倦いた

働かずに自立できるか 働きさえすれば自立しているのか  
女同士が言いつのることに

私は倦いた

男の女の本質的な差は、あるのか ないのか

データをつきつけ合うことに

私は倦いた

機会均等法は女の未来を拓く、女の現在をつぶす

目を吊り上げることに

私は倦いた

三歳までは母の手で子育てを！ 集団保育のよさを知らないの？

母性愛の不足が非行を生む！ 父性愛は不足してもよいの？

男も家事・育児を！ 専業主婦の域を荒らさないで！

こんな論争に

そして、私は頭をかかえる

いじめは教師の力量不足、とんでもない。親の愛情不足

テストが子どもを勉強嫌いに追い込む

とんでもない。テストなしに子どもが勉強する？

事件が起きるたびに

深刻ぶったり顔で 調査し 分析し

自分を安全地帯に置いて 他人だけを責め

手あかのついた言葉を操って納得している 私たちおとな

社会が変わらにやどうにもならぬ、社会に適応しなきゃ馬鹿をみる

だからといって

わたしだけが大事、わたしらしさを冒すものすべてをきらい

啓蒙はイヤ、暗い重いしんどいはイヤ、清く正しく美しくもイヤ

自分は一步も動かず、そんな社会に安住する 私たちおとな

おとなは忘れてしまったけれど

おとなにも 幼い日があった まぶしい日があった

欲もない 打算もない 媚びもない 見栄もない はったりもない

幼いひとの黒い瞳にみつめられ

生まれたての若葉のようにみずみずしいことばを聞き

いのち そのものにふれるとき

ああ、そのときだけ

私のひからびた細胞は やわらかくうるおう

私の子育てで、たった一つよかったと思うのは、二人の子の克明

な育児日記をつけたこと。幼い子とともにある私を紙面に刻んだこ

と。倦んだ時、傷ついた時、帰ってゆく所がそこに在るから。

★めぐみ（二歳と36週）

るみ子ちゃん、六月四日、五日修学旅行、めぐみちゃんはおばあちゃんと、農協婦人部の遠足で、六月九日に金沢に行く。ちよつとした騒ぎで、修学旅行のことを、シイガツヨツカ。自分の行く日はココノガツなどと言い、るみ子ちゃんのリュックを出しては、一日中かついでまわっている。そして、あーあついななどといっておろしたり、リュックに大変な興味関心を示している。着るものに大変興味があり、毎日どれを着ようかと思索する。

おまつりのおべべが大好き、修学旅行に行ってきたチャーチャン（お姉ちゃん）を迎えに行くので、カタカタと鳴る下駄を出したら大よろこびをして、カタカタ、カタカタと鳴らして歩きまわる。

言うことをきかない時、アイスクリームのことを持ち出すと、きまつて「ハイ」とよいお返事をして、きわめて素直になる。

着物を着た時は、すそに氣をつけて、手ですつとなでおろしてはきちんとすわる。そして両手をついて「おめでとうございます」とおじぎをする。お正月の時の「おめでとうございます」というあいさつが印象的だったのだろう。

お金も大好き、ほしいほしいと言い、アイスクリームなど、おばあちゃんが、あまりいくつにもなるので「もうお金ない」というと「ワタシのおカネで買えばいいが」という。そして実際に、そのお金で買って「もうおカネなくなってもたで、ちょうだい」とママにいう――

★めぐみ（二歳と40週）

食があまりすすまない。牛乳をたくさん飲むからだが……。

おなかをさわつて「あ、モウモウパイパイナマケ（だらけ）だ、

ごはんがちつともない」というと、「あんよの方へいったのよ」という。足をさわつて「やっぱりモウモウパイパイナマケだ」というと「とけちゃつたのよ」という。そういう臨機応変の答えを実に巧みにやつてのける。

私が好きで、日曜などふつと氣がついて「今日、ママちゃん、学校いかん？」ときく。月曜日の朝「今日、ママちゃん、学校いかん？」とまたきく。「いく」というと「どうして？ 雨コンコ降ってるのにいかんときなさいよ」という。

私が帰ると、何でも「ママちゃんの方がいい」「ママちゃんにしてみらうの」といって、おばあちゃんにさせない。

テレビの「みんなの歌」にあわせて二人でいつも踊る。そして「パパちゃん見て、見て」とさいそくする。

たもとのおべべが好きで湯あがりに必ず着て「およめさん、およめさん」をひとしきりしたあと、パジャマに着かえずに寝ることが何日か続き、朝起きて「ウーン、こんなにくしやくしや」といって、着物を引っぱる。「だから夜はパジャマか、ペコちゃんのおべべに着かえてねましようね」というと「ハイ」という。よくわかつた時は、実にすなおで氣持よく「ハイ」という。

お友達を求めるようになってきて、お風呂に入りきたゆきえちやんと二人でしばらく遊び「ダレコウタンヤ」「ママちゃん」「フーンドコデ？」「フクイマチデ」などと、話はずんではいる。笑ってみていると「ママちゃん、笑ってるが」といって照れる――

子どもは大人の父だ、とうたつた西歐の詩人がいた。陽のために空のために歌う鳥のように、理屈でなく存在そのもので輝く幼い人たち。ためらわず、そのまなざしに答えられる私たちだろうか？



〈We兵庫の会〉

◆一月十二日(日)、まだお正月気分が抜けきらないといった顔で集まってきた面々、十三名。第11回テーマは「私たちのくらしの中の日の丸・君が代」でした。前もって参考資料として『一人でもたたかえる「日の丸・君が代」(菅孝行・名取弘文)、『日の丸・君が代』(季刊「教育法」)、『これからの天皇制』(法学セミナー増刊)を紹介し、各自学習してこようということ、この日を迎えたのでした。

こんなに仰々しく書きますのは、このテーマで一度話し合いたいという提案があったのは夏の終わり。そして実際に持てたのは、一月。やはりすぐに真正面にテーマにすえるにはためらいがあったのでしょうか。地ならしの必要を感じたのでした。こんな所に、この問題の重大性があるように思います。

吉田清彦さんがレポーターを申し出てくれ、先ず「私が生まれてからの日の丸・君が代とのかかわり」を、一人ずつ語りました。若い世代からは「祝日に国旗として日の丸を掲げることを受け入れていた」「無批判。しかし、なぜ天皇には敬語を使うのかと、母に尋ねたことがあった」など。戦争体験者からはどうしても戦争一色にぬりつぶされた青春の空しさへの憤りがほとばしり出る。しかし、校門に立てられた日の丸になじんでいる自分でもあることが語られる。たとえ、それが気になっても、職場で話し合えない雰囲気がある。真正面から取り上げると、却って周囲から浮いてしまうのではないかというためらいがある、など。

吉田清彦さんからは「あの戦争が何であつたか、日本人は被害者意識が強いが、ほんとうに反省していない。一人一人が加害者であったことを、もっと深刻に考えるべきである。天皇制の復活をねらう人たちは、そのムード作りに巧妙な手口を使い、徐々に迫っている。靖国神社の公式参拝、国家機密法の制定、母子保健法の改悪など、一連の動きに、私たちは今後「あきらめない」「ムキになる」「私の今の考え方を周囲に明らかにする」姿

勢を持ちつづけたい。

神戸市庁の屋上にも、ユニバシアードを契機に日の丸が立った。ユニバも終わり、ユニバの旗は下ろされたが、以来日の丸は立ったまま。何か事があると、巧妙に日の丸・君が代が入り込んでくる。天皇在位60年の祝賀行事に無関心であってはならない」と鋭い口調で語られ、私の胸にもグサリと突き刺さりました。

とりつきにくいと思っていたテーマだったが、話し合うほどに臨教審への無関心、日本人としての自覚の強調が気にかかり、解放教育に取り組めば組むほど日の丸・君が代にひっかかり、人権学習ではさけて通れないものであることが、お互いに自分の問題として語られました。やっぱり話し合ってたよかったです。

次回は、再び「家庭科の男女共修について」三月九日(日)、勤労会館で。(入江一恵)

〈We田無の会スタート!〉

◆一月二十六日、田無駅近くの中央公民館で初めての「We田無の会」を開きました。何人集まるだろうかと、不安と期待でドキドキ。

半田さん、以前からの読者の山崎さん、公民館講座仲間の勝野さん、本告さん、地域で



ネットワークづくりをしたいという土井さん、はるばる三鷹から自転車で駆けつけてくれた小林さん、そして呼びかけ人二人の計八人。岩崎さんの手造りのケーキなどつまみながら楽しくじつくり話ができました。

「田無の会」を何か一つの目標のための運動体としてではなく、それぞれがかかえている問題を多面的に考え合う場にしたい、行動を起こす前段階として自分の足元をもう一度確かめたいと、呼びかけ人から意図説明。

ここできいきなり私の愚痴話が始まってしまふのです。「育つ」「育てる」ことに関して最近気持が減入ることが重なり、人間関係をどうつくっていくか、その子が持っている嫌な部分ではなく、いい面を素直に出せる環境をつくるためにどうすればいいのか、日々悩むことばかり。こどもがファミコンに夢中で困っていると本告さん、自分はこどもを育てたのではなく逆にこどもに育てられていたと今になって思うと山崎さん、受験期のこどもを持ち親の価値感を問い直されているという土井さん、小林さんが長年やっている「はらっぱ」の話も。

現在の状況の中で生きていく力をこどもにつけるのがいいのか、次代のこどもたちのた

めにも状況を少しずつでも変えていくべきか、盛りあがったところで時間切れ。

今回は三月九日(日)二時から中央公民館で。近くの方も遠くの方も、待ってまっす。

〈姫野順子〉

《We愛知の会》

◆一月例会は、'85年のまとめ(Weの会と共修運動をふりかえって)と、'86年にやりたいことを話し合いました。'86年にやりたいことの中からいくつかを。

○We誌を読んだの感想や意見を例会参加者でハガキに寄せ書きにして出したら? ……

二月の例会から始めてみます

○臨教審ってなんだ? 勉強会

○教課審委員と話し合いの機会を持ってないか

○「21世紀の日本」シリーズ読んでみない?

○母子保健法のことも知りたい

○育児時間の岡崎さん、育時連のますのさんの話も聞いてみたい

さて、どれだけ実現できるか楽しみだなあ。

次回は、二月二十二日(土)午後二時―四時三十分、勤労婦人センターで。

《Weの会集い・大阪》

◆日教組教研が開かれた大阪中の島公会堂。ときは一月十九日、夜六時半から九時まで。

地元大阪の方たちはもとより、大幸(?)して兵庫から。神奈川、東京、富山、石川、京都、奈良、滋賀、愛知、和歌山、福岡、熊本……五十数名がすてきな出会いを持ちました。

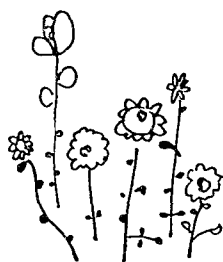
司会は岩瀬志津子さんと入江一恵さん。ひとことずつの自己紹介でも、それぞれの方のお人柄がにじみ、どの方も困難な状況の下で闘っていらっしやるのだなあと思いました。

星の教研集会での状況も語られ、ファミコンについて、「いじめ」についてどのような発言があったのかなど、興味深く聞きました。家庭科以外の方々が多数参加されたこと、特に「現代社会」担当の先生がこられたことなどから、家庭科と社会科の接点など、時間があれば話し合いたかった、と思いました。

関千枝子さんから、全国高等学校PTA連合会の鹿児島大会での決議を撤回させるための署名運動と、そこから感じ考えたことをうかがい、つい見過ごしてしまう日常の問題に鋭敏になり、声を挙げていけない限り、私たちは黒い大きな波にさらわれてしまうことを各々肝に銘じたのでした。(半田たつ子)

◆湘南・三浦の会のご案内 四月十三日(日)午後二時から五時まで 藤沢市民会館

## 私から あなたに



◆増刊号は、懐かしくて、一息に

読みました。改めてしみじみと、Weに出会えてよかったなど、感激を味わい直しています。大きな体験でした。

あのフォーラムの中で、私のテーマが少しずつですが、見えてきました。青木さんのお話、心から消えません。丸木美術館、指紋押捺拒否。それらを知ったのではなく、事実に肉体が激突したと思っています。

自分に何ができるか、考え続けています。事実（歴史的な、そして現在の）を正しく知ること、周りの人に伝えること。まだ、この二つしかめざせません。それすら

にもつまずいています。

昨年の十一月初め、「ひろしまを見たひと」「原爆の図」のスライド上映会をしました。もちろん私一人ではなく、仲間と共に。でも、私の思いを行動につなげる初めての体験でした。

上映会は成功ではありませんでした。参加者が少数だった上に、話し合いができなかったこと。企画段階での問題など、次回に向けての反省はいろいろあります。

でも、残念です。渡せる限りのチラシをまきました。公民館でも幼稚園でも、杜宅でも、個人的に呼びかけもしました。精一杯やったと思っていたのに不成功。その

事実を受け止め、私の思いをもっともつと強くしていこうと思えます。「甘ったれ」からの脱出を」痛いです。行動力、行動力。言っているだけでは何にもならない。力をつけたいをつくづく思います。

Weの忘年会は、とても楽しかったです。知らない人ばかりだからと、少々臆していたのですが、初対面同様の方とでも、いろいろな話ができ、Weに集う人々の懐の深さを改めて思いました。あの後、横山れいこさん、小林志夫さんと、十時半すぎまでお話できました。違う立場にいる者同士が出会える場。本音を出せ、受けとめてくれる場。私にとって、大事な大事なWeです。Weに出会えてよかったと、ホクホク気分で帰りました。

忘年会に出て、強く思ったことがもうひとつあります。かれとの関係が、こんなに変わったんだな、うれしいなあ。一年前までは、自分のために泊りがけで家をあけるとか、夜、「飲みごと」で外に出る

など、想像もできませんでした。人と人との関係は変わるものなのですね。あきらめた方が楽、と思いがら、あきらめきれずにやってきて、よかった、と思います。思い出したこと—フォーラムの「女と男の部屋」で、かれとのことを話しながら、「でも、できない」と思っていたことができた。私はこうやって、フォーラムに参加できた」と発言した時、その場のみんなが拍手してくれました。とてもあなたが拍手してくれた。それだけでも来たかいたが、あったと、涙っぽくなりました。

◆一月号に、生徒たちの文を載せていただきました。ありがとうございます。

（東京・姫野順子）

Weが届いた日、夫が「どんな目的で感想文を書かせているのか？ 感想のひきだし方が甘い。実践の次の段階につながっていくような感想がひきだせないなら、意味がない」というようなことを言って

いました。その時は、せっかくだい気分であるのに、とムカムカツとしましたが、あとで考えてみると、ほんとうにこれで終わっているのは「ゆかた」を取り上げた値うちがない、と思いました。

「日本の衣生活の合理性やその美しさを学ばせ、その中から、現代的な課題を捉える力が養われるはずだ」と書きましたが、どれだけ「現代的な課題を捉えられ、のり越える力がついたか」を検討していかなくてはならないでしょう。

それに、仕上げた頃から考えているのですが、和服の非活動性をどう克服していけるのか、洋服の流れと和服の流れを合流させていけないものか。それらを被服製作の授業でどう展開していくか……と考えるつづけています。具体的には、腰巻型になっている二部式ゆかたの下衣を、ズボン型に作りかえていく作業をまず自分でしてみたいと思っています。

なにか戦時中の「ぜいたくは敵、

きものをもんぺに」という暗い時代のイメージがあるみたいですがカラッと明るく、自分の衣服を自分のしたいように整えることを、楽しめたらいいな、と思います。

楽しい、いいアイディアがあれば、教えて下さい。(界・村上昌子)

◆十月号の中嶋さん提案に大大：

：賛成！ 鳥取へもいらした？

あーちよっと編集部へ問い合わせ、鳥取We読者窓口代表(自称ですがネー)の私をお探しいただきましたら、本当のWeグループ”と

もに”の元気な女たち五人が、「イエイ！」の掛声とサインで威勢よくお迎えしましたものを……残念、無念、四角面(?)！

さて”ともに”の面面は、子連れ、各一人連れ合い有り。話せば朝までだつて、生き生き女<sup>メーデン</sup>している、していたい”ともに”。

「お連れ合いは？」何かの折に尋ねると、「仕事の仲間のこと？」

「ああ、ご主人のことね」という

反応を数々受けた私は、それにも

メゲず、出会ったこの生きのいい女たち。女の一人は、一冊のWeを読み終えると「ネエ、全部、持つてだけ貸して」この反応の違い。うれしくて、泣けてきて、創刊号からのWeの一人であり続ける私は、モチのロン、バックナンパーを全部ガバツと抱き、熱き思いをおつとつと、一掬たりともこぼしてなるものかと、そんな馴れ初めの女と女なのであります。

出会おうよ、出会いたいネ、元氣印の女たち！ そうして、子どもよ、男たちよ♡

(鳥取・前田・藤井享子)

◆十一月号「私からあなたに」の福田緑様の嫌煙、禁煙教育、とても興味があります。

うちのお店、モンペハウスはかなり古い建物の地下街にあるので、換気設備がありません。そこで前のお店のおじさんたちが、ろ

うかにイスを並べて、スパス吸うのでたまりません。空気が汚れるし、ヤニのおいしさはすこいし、で

も一たびつくりする事は、他人の迷惑はしらない、たばこを吸うのは勝手なのだから、吸わない者が

がまんすればいい、という考え方なのです。たばこを吸う人がすべ

てこう考えているとは思いません

が、多かれ少なかれ共通した感覚

なのかしら？ なんて思いました。

そんな風で毎日たばこの煙に苦しめられているので、福田様の文章に、ワァーと思ったわけです。We

の誌上で初めて嫌煙、禁煙という言葉に出合った気がします(読み

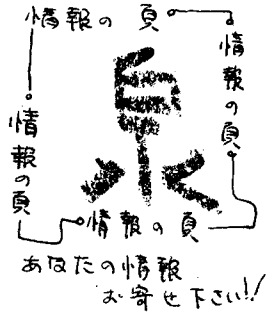
おとしがあるかもしれません)。

第一回のフォーラムで最終ミー

ティングに託児の問題がでまし

た。その時、ほんとうにすばらしい意見がたくさんありましたが、中

でも、ミーティングの場に子どもが参加できて、大人がたばこをすわない配慮をして……とチラリとのべられた女性の方がいらして、とてもすてきでした。嫌煙・禁煙教育、みな様の御意見、おききしてみたいです。(東京・内山裕子)



◆We公開ゼミナール◆「育つ・育てる・育ち合う」今、自分が生きる場でー」

・日時 3月29日(土) pm1時半～5時

・所 中野区勤労福祉会館 (03-380-6941)

・連絡先 ウイ書房 (詳細は本誌30頁参照)

◆女性民教審の集い◆女たちの教育改革

・日時 4月4日(金) pm12時半～4時半

・所 銀座ヤマハ・ホール (03-572-3139)

地下鉄銀座駅下車)

・第一部「一周年記念公開審議会テーマ」聞こえますか? 崇くん」司会・樋口恵子、

永畑道子

・第二部「私たちの教育改革」ー女性民教審の提言・「がんばれ! 女たち」特別出演・遠藤豊吉、斎藤茂男、筑紫哲也 他

・参加費 当日券千円(前売八百円) 小・中・

高生五百円

・事務局 女性による民間教育審議会 〒162 新宿区市谷加賀町2-5-23 03-268-7968

◆集会◆ 家庭科の男女共修をすすめる会

「男も女も『家庭』も『技術』も

・日時 4月5日(土) pm1時半～4時半

・所 婦選会館 (03-370-0238・国電新宿駅南口下車8分)

・報告 坂本典子(新潟大学)

・問合せ先 ウイ書房

◆上映会◆ 「女たちの報酬」スタートした

均等法を歌と映像から考える

・日時 4月6日(日) pm1時半～5時

・所 飯田橋セントラルプラザ15F (03-235-1140 国電飯田橋駅下車)

・内容 上映「女たちの報酬」(オーストラリア)・歌・青葉はる、話・中島通子

・協賛費 千円

・主催・連絡先 行動を起こす会 女と仕事グループ (03-357-9565)

◆「チカップ・内藤美恵子さんの肖像権訴訟を勝訴させる会」結成◆

・「私の写真を無断で『アイヌ研究書』に使ったのは許せない」とチカップ・内藤美恵子さん(東京都八王子市在住)が東京地裁に提訴した「肖像権侵害訴訟」を応援する

「会」の結成集会が85年9月16日開かれた。

「この裁判に勝って、アイヌ研究のあり方を正そう」と決意を固めた。当面は裁判報告、勉強会、講演会の開催、季刊「イルメ」、裁判資料の発行、会員と支援者の拡大、カンパ活動、抗議行動など

・年会費一口千円

・申込み、問合せ先 豊川重雄 〒063札幌市西区発寒8条10丁目3-4 011-664-7125

◆冊子◆「長野県における男女共学『家庭一般』のあゆみ」 長野県高等学校教職員組合教育文化会議・家庭科教育研究会

・内容 「長野県における『家庭一般』『男女共学のあゆみ』『家庭一般』男女共学を導入した経過、実践内容」「家庭一般」自主編成の各分野の実践」「資料」

・B5判・125頁・500円

・問合せ先 湯沢静江 〒398-04長野県上伊那郡辰野町羽場 0266-41-1601

◆冊子◆ 「性別役割分業—おんなは家庭？ おこは仕事？」 かながわ女性会議

・性別役割分業を超えた生き方を女も男も選択できる社会を願って開催した'84、'85年の性別役割分業シンポジウムをまとめたもの。「性別役割分業を超えて」の資料も。

・A5判・44頁・300円

・連絡先 かながわ女性会議事務局 〒251藤沢市江ノ島1-11-1 県立婦人総合センター内 ☎0466-27-2111

◆通信◆ 「余里徑俱樂部通信」

・大阪の中心から近い南森町に、ティーンエイジャーのたまり場Free Space 余里徑俱樂部が'85年12月にオープン。  
自主出版を中心とした私設「余里徑図書館」や、不平不満や悩みを同世代が聞く「テレフォン・ライン」も。

「大人の人間のガンバリ方、ガンバル姿もスポンジが水を吸うように吸収してるみたいですよ」と(通信より)。

・余里徑俱樂部めんばー募集中。年会費千円、通信の発送、イベントのお知らせetc  
・連絡先 余里徑俱樂部 〒530大阪市北区天

神橋1-19-16 木田商ビル2F・E ☎06-357-7813

◆通信◆ 「ぬう nous」

・「生き物の住む地球をこれ以上汚したくない、という想いを抱いて出会った者が、便利だけど不安な今の暮らしをもう一度見つめ直し、新しい暮らし方を探ろうと歩み始めた」  
「錆ついてしまったこの手で、暮らしに必要なものを作ってみたいと思います」と。  
nous (ぬう) はフランス語で「私達」。三月には牛乳パックで紙をすいてみようと思案中、とか。

・発行 ぐるうぶ・ぬう

・連絡先 矢口峰子 〒114東京都北区豊島5-5-7-532 ☎03-911-3511

——○読者のためのスペース○——

◆休眠衣料活用運動実行委員会の住所◆

・アフリカ難民の人々、または大洪水にすべての財産を失ったパングラデシユやフィリピンの被災民の人々に、日常生活を少しでもあたたかくと衣料品で救援活動が続けられた休眠衣料活用運動実行委員会。

We'86年1月号で杉山信子さんが紹介したと

ころ住所の問合せがありましたのでお知らせします。

〒541大阪市東区安土町1-23 新船場ビルB1 日本救援衣料センター ☎06-271-4021

◆高校生が作ったパンフレット「女性その生き方を問う」「アジアと日本」◆

「いま、私は、とても幸せです」との多くの若者の発言があります。しかし、大きな危険が津波のごとくおしよせてきている今、「教育の重さ」をことさらに考えさせられます。

私は、学び、考えるチャンスを与えられ、ときの生徒のすばらしい成長を確信する社会科の教師です。『歴史部』として「戦争と人間」をテーマに、生き方への追求を進めてきました。『戦争と女性』『反核』『近代における女子教育』『ファシズムと女性』、そして『アジアと日本』(加害の立場から)。この五年間の学びを①「女性その生き方を問う—戦争と女性—近代における女子教育」②「アジアと日本」の二冊にまとめました。ぜひ多くの方に読んでいただきたいと願っています。・製作実費 ①一五〇〇円 ②一〇〇〇円

・連絡先 日出学園高等学校 宇野勝子 〒272 市川市菅野2-21-12 ☎0473-24-0071

# 十字路

■北海道 性知識は貧困、でも性体験は低年齢化（道新12／9）

道内でも十代の妊娠、出産が増えているが、札幌市医師会では市内の高校を卒業した満十八歳の女性二百二十八人を対象に性に関するアンケート調査を行なった。その結果、

三六・四％が既に性交を体験しており、年齢は大半が十六・七歳と答えていた。ところが「性に関する講義でどんな内容を求めるか」の問いに、「避妊の知識」「中絶について」「性病について」など具体的な内容を知りたい

がっており、これらの結果から、小六義久会長は「女子の性行動が低年齢化しているのに、彼女たちの性知識は極めて貧困、家庭、学校両方で性教育を早め、充実するのが急務だ」と強調する。

■青森 人生八十年時代、ながーい余生（東奥日報1／15）

昭和の初め、日本の婦人は末っ子が成人したあと、平均して五年しか生きられなかった。それが現代は、子の独立後も三十年は生きる計算、夫が退職したあと、夫婦だけで過ごす

期間も二十五年程度ある。全国第四位の離婚県でもある本県、結婚二十年以上の離婚が五十九年に、三百七十一件あり、年々増加の傾向にある。

■岩手 小学生の性教育は学校で（岩手日報2／7）

県性教育研究会が、盛岡市内の小学生の父母約二百人に行なったアンケート調査によると、「性教育は学校で教える必要がある」が九二・四％に上ったが、家庭ではまだ早いと感じて話し合ったことがなく、九割以上が子どもから相談を受けていないことがわかった。

■宮城 有害図書自販機が激減（河北新報1／4）

青少年保護条例改正以降、販売機の台数が半分以上に激減して、県では「予想以上の効果」と気を良くしている。改正条例では「自販機に有害図書を収納した者は三万円以下の罰金または科料に処する」が新設された。

（加藤弘子）

■千葉 「いじめ調査」行き過ぎと批判（毎日1／10）

千葉市立院内小で昨秋、全校児童を対象に「いじめに関する調査」を実施したが、この中で、いじめたいと思う子どものタイプについて「きたない子」「自分よりよい子」「なまいきな子」など一八の選択肢を設定したり、記名式であったことなど「いじめを助長する恐れがあり、行き過ぎだ」と関係者から批判の声が上がっている。

■東京 小学生グループが平和を考える会（朝日2／3）

保谷市内の児童十九人が、平和を考える「今、平和かな、子供実行委員会」を発足。母親らの運動に刺激されて自主的にできたもので、母子連帯の平和運動は珍しい。運動は主に映画会の開催や広島行動への参加呼びかけなどになるという。

■石川 いじめ―実態知らぬ学校（北国12／5）

金沢地方事務局に相談を持ちかけた県内の小中学生のうち、耐え切れず転校したり、登校拒否に陥った児童生徒が、今年三月～十月までの三十件で七人にもものぼり、法務局から通報するまで校内の実態を知らない学校がほ

とんだった。

(山田千鶴子)

■福井 寄付の出所を明かさず(朝日1/28)

敦賀市では、建設工費の七十%以上を寄付に頼る嶺南学園敦賀気比高校が四月開校を目指している。同四月電力三社が建設費のほとんどを寄付した敦賀女子短大の場合と同じく出所について批判の声が出ている。

(高嶋みどり)

■米飯給食増やして(福井1/22)

福井市の花園幼稚園では、業者を通して、週に米飯、パン給食を各一日、三日間弁当持参にしているが、父母にアンケートをとったところ、「パンより米飯給食を増やしてほしい」との要望が多く、手作り弁当は「手間がかかり、栄養的には偏りがち」との意見が多かった。

(山崎京子)

■新潟 高校生に増えた無気力症候群(新潟月報2/4)

市立総合教育センターの教育相談に訪れる高校生で最近目立っているのは、どんなことにもほとんど関心を示そうとしない無気力な生徒たちで、同センターではこの原因について、「中学段階での輪切りの進路指導で、何の目的も持てないまま高校に入った結果、何が自分のしたいことが分からなくなっ

てしまっている」とみている。

(山口久子)

■長野 「女たちの信州」(仮題)刊行へ(信濃毎日1/16)

県下の女性は、どんなところで、どんな活動、活躍をしているか、暮らしの中で地につけて地道な活動をしている女性を中心に婦人問題を考えさせる本作りが、県下の活動家、研究者ら女性を中心に進められている。五月に長野市の銀河書房より刊行予定。

(三島久枝)

■愛知 父母は体罰肯定派?!(毎日1/18)

高校生を持つ父母の七十%は「場合によっては」の条件つきながら体罰を是認していることが県高職組の実施したアンケートでわかった。生徒の体罰経験(小、中時代も含む)は四人に三人もあり、「過去一年間に手を出した」教師も二人に一人と相変わらず体罰が、日常的に行われている実態が明らかにになった。

(岡本のりこ)

■兵庫 原爆圖書の抜粋集作(朝日12/9)

二十二年前、修学旅行の引率でヒロシマを訪れ、大きな衝撃を受けた、西宮市立真砂中の岡田龍一教諭は、以来原爆関係の本の収集を続け、その中から百六十二冊を選び「ヒロシマ・ナガサキを読む―平和を考える162冊」

を刊行した。投下の瞬間のドキュメントや被爆二世、学校、平和教育などのジャンルにわけながら一冊につき六百字ずつ抜き書きして紹介。読み通すと全体像が生々しく浮かび上がる。

(由良サダコ)

■岡山 県警が「いじめ補導班新設」(山陽1/12)

全国の警察本部で初めての「いじめ補導班」は、悪質ないじめで被害少年の保護に急を要する場合など「いじめ一〇番」への相談、通報や、各警察署などからの要請に応じて、県下全域をカバーする。

(豊田妙子)

■熊本 中学生の暮らしは変わった(熊日12/22)

県中学校生徒指導連絡協議会が、熊本市内の中学生とその保護者を対象にした調査によると、九年前の同様調査に比べて数字の上から変わってきたこととして、「お金の悩み」が増えていること、一人で家で勉強するより「学習塾に行く」傾向が進んでおり、読書の傾向も週刊誌の急増と、文学作品の急減、「読む」より「見る」に。非行や問題行動も増加しているが「非行増加の原因」について、保護者自身が「家庭に原因あり」と答えているのが興味深い。

(宮原由美子)

# ア　ン　テ　ナ



## ◆ 教課審—「家庭・社会・道徳」抜本見直し ◆

幼稚園から高校までの教育内容の全面的見直し作業を進めている文部省の教育課程審議会（文相の諮問機関、会長・福井謙一京都工芸繊維大学長）は2月17日、第7回総会を開き、審議に入るとともに、「家庭科」「社会科」「道徳」と「6年制中等学校」について、課題別の検討委員会を発足させた。家庭科、社会科の委員会については現場代表など専門調査員を新たに任命、6月ごろまでに各学校段階での教科の基本方針を決定、総会審議にかける。総会は、諮問事項の①教育内容の国際化、情報化②基礎・基本の徹底と能力・適性に応じた教育の充実などを、英語、コンピューター教育、個人差指導など具体的テーマで検討。10月には「中間まとめ」を、'88年6月に最終答申を出す予定。

家庭科は、現行の高校での「家庭一般」が女子のみ必修となっており、女子差別撤廃条約に違反するとされている。文部省は学識経験者による検討会議を設け結論を出そうとしたが、関係者の意見が激しく対立。一昨年末に出された報告では「事実上の男女とも必修」と「男女とも選択」の両案を併記して、教育課程審に決定を預ける形になっている。中学での技術・家庭の履修時間も検討対象。

家庭科教育委員会メンバー 青木生子・日本女子大学長、佐藤愛子・作家、諸井虔・秩父セメント社長、奥田真丈・横浜国立大学教授、縫田暉子・NHK解説委員、松田岩男・中京大教授。（朝日、2・18）

## ◆ 臨教審—審議経過の概要公表 ◆

臨時教育審議会は1月22日、総理府で第43回総会を開き、昨年の第一次答申以降の論議をまとめた「審議経過の概要（その3）」を決定、公表した。4月の第二次答申（基本答申）の素案となるもの。教員の資質向

上策や大学の改革に取り組んだのが特色で①新採用の教員に1年間の研修を義務づける「初任者研修制度」の導入②大学の春秋2回入学制の採用③大学院進学者に大学3年卒業を可能とする修業年限の弾力化④大学入学年齢制限の再検討——などを提言している。「教職適性審議会」は反対論も多く、引き続き検討することになった。

2、3月には東京、名古屋で公聴会を開き、「概要」で示した臨教審論議に対する国民の批判を受け、答申に反映させる方針。

答申は中曽根首相に提出し、首相は直ちに改革の手順、法案作成の時期などを明示した「教育改革大綱」を作成し、具体化に乗り出す意向だ。（朝日、読売、1・23）

## ◆ 教研集会—先生たちの反発と悩み ◆

日教組第35次、日高教第32次の教育研究全国集会が1月19日から4日間大阪で開かれた。田中一郎日教組委員長は教師に対する様々な批判が高まっている中で教育力を向上させる努力、体罰を許さない厳しい自省などを求めた。その一方、臨教審について国民の切実な求めに答えていないと激しく批判。とくに新卒教員の長期研修制、教職適性審議会の提案は絶対阻止する方針を明らかにした。家庭科をめぐる論議は、男性も含む小、中、高校合わせて146人の先生たちで白熱した。神奈川県報告によると、高校における男子の履修状況は、1984年度は9校45名にすぎなかったのに、'85年度28校258人とふえていることがわかった。

（朝日、1・20～25）

## ◆ いじめ15万5千件—全国公立校 ◆

文部省は2月21日、全国約4万の公立小、中、高校すべてと全教育委員会を対象に、いじめの実態と指導体制を調べた初の「総点検」の結果を公表した。それによると、昨年4月から10月までの7カ月間に、55.6



％に当たる21,899校で155,066件のいじめが起きていた。とくに中学では69％、大都市圏では73％を上回った。学年で最も多いのは小学6年で21,000件。いじめによる転校も、66市町村から報告。「体罰事件」は7カ月間に2819件。処分された教師も過去最高。(朝日、2・22)

#### ◆ 中野富士見中学校 ◆

東京都中野区中野富士見中2年生鹿川裕史君が2月1日いじめを苦に自殺した。学校関係者や区教委では学校再建のため模索を始めたが、解決法も見い出せず、別の事件も起きている。同中では昨年4月から「いじめ、体罰、生徒規則」を生活指導の3本柱にして、問題のある生徒の指導や研修会、地域懇談会など、「考えられる対策はほとんどやった」(生活指導担当)という。それでも防げなかった「犠牲」に学校の限界が感じられる。(朝日、2・4～22)

#### ◆ 教員試験成績を公開 ◆

埼玉県は来年度から公立小、中、高校など教員採用選考試験の成績を、県の情報公開制度によって受験者本人に公開すると発表した。情報公開制度をより徹底するために実施する。教員採用選考試験の公開は、全国で初めて。教員の採用が公正に行われているかと疑問視する声が根強い中、小さいながらも風穴を開けるものとして注目される。公開の方法は、学校の種類別、教科別に総合評価を段階に分けて実施。一次試験は不合格者だけを三段階区分。面接などの二次試験は五段階。(朝日、2・18)

#### ◆ 検閲的な検定一段と一中学教科書 ◆

日本出版労連は1月17日、来年4月から使われる中学校教科書に対する文部省の検定実態をまとめた「教科書レポート'86」を発表した。レポートは80年代に入って強まった「思想検閲的な検定姿勢」がさらに徹底され、「防衛費は突出していない」「自衛隊の役割、安保の目的を書け」など、防衛・核問題などについて踏み込んだ指示が目立ち、検定の政治化が一段と進んだ、としている。全体に政府、自民党などの政策を肯定する検定姿勢が貫かれており「80年以降の検定のいわば『総集編』になってい

る」と結論づけている。(朝日、1・18)

#### ◆ ビル解禁へ研究班 ◆

経口避妊薬(ピル)をめぐる、日本産科婦人科学会と日本母性保護医協会、日本医師会や民間団体の日本家族計画連盟が臨床試験の実施を認めるようにとの要望書を厚生省に出していた。これを受けて、ピル否認の方針を貫いてきた厚生省は、まず専門家の手で科学的にピルの有効性と安全性を評価してもらい、その結果を見て解禁に踏み切るかどうかを決めることにした。

実際には推定70～80万人の女性が「治療用ピル」を避妊目的に転用している。欧米ではホルモン量が1/10程度の副作用を弱めた「低用量ピル」が使われている。研究班の最終結論は早ければ夏ごろ、実用化までに数年はかかりそうだ。(朝日、2・16)

#### ◆ 「無添加」食品とは!? ◆

厚生省の「食品添加物表示検討委員会」の中間報告で、自然食ブームに便乗した“不当表示”商法の横行が明るみに出た。350種類近く認められている食品添加物の中で表示を義務づけられているのは2割余にとどまり、膨張剤、調味料、酸味料などは表示しなくてもよいことになっている。ところが表示義務のない添加物を使っていながら「無添加」と表示し、裏に小さく言いわけを書いている問題のある表示は10数種類。厚生省は行政指導で効果が上がらなければ強い措置を検討するといっている。

(朝日、読売、1・24)

#### ◆ 国立大が率先差別一色盲・色弱者 ◆

勉学や日常生活に支障がないにもかかわらず、国立大学の半数が色覚異常者(いわゆる色盲・色弱)を締め出している一日本眼科医会が'85年度の大学入試要綱を分析したところ、こんな実態が明らかになった。1学科でも制限がある大学は、私立大が6.6%(22校)、公立大12.8%(5校)、政府所管大学校27.7%(5校)、国立大は48.9%の46校。学部別では教育、医、薬、農、歯、理、工学部の順に多い。同医会では「米、英、西ドイツ、スイス、ノルウェーなどを調べたが、色覚異常を理由に大学入学を拒否する国はない」と。(朝日、2・17)

〈表紙のことば—加藤由美子〉

We 5 回目の春は何と、ハレー彗星と一緒にです。この4月11日には、わが地球に最接近とか。といっても相手は天文単位。私の思考の守備範囲を遥かにこえる悠久の世界。でもせっかくの邂逅、あやかりたいな。そのマクロ感覚。

★Weバックナンバーのご案内★

- 〈vol. 1〉 (品切れ)
- 〈vol. 2〉 (品切れ)
- 〈vol. 3〉 4月号 PTAって何
- 5月号 いまこそ、家庭科を問う
- 6月号 地域に生きる
- 7月号 少年・少女たち
- 8・9月号 “遊ぶ”ということ
- 10月号 支え合いつつ ひとり立つ
- 11月号 “病む”ということ
- 12月号 つきあいを考える
- 84年増 自分らしさをこそ
- 1月号 学び・教えるとは
- 2・3月号 “育てる”ということ
- 〈vol. 4〉 4月号 性をどう語る
- 5月号 結婚の風景
- 6月号 家族、その人間関係
- 7月号 離婚と子どもたち
- 8・9月号 法津と私たち
- 85年夏増 働き続けるために
- 10月号 いま、熟く女の時代
- 11月号 みのりの秋に
- 12月号 人間と土を生かす
- 85年冬増 自分らしさをこそⅡ
- 1月号 暮らしの文化を探る
- 2・3月号 水はいのちの泉

割引も)

(青木)

をぜひどうぞ。

(中野)

さい。

(馬場)

手な思いこみ)です。(半田)

◆ウィ書房の新刊、武田秀夫著『私塾霞国語教室風景』ができました。三年間の連載に新たな書おろしを加えた内容、読みやすいレイアウトと美しい装幀、是非ご一読下さい。

◆バレンタインにチョコは日本全国乗って、乗せられて。でも本を贈る日があってもいいのになと話していたら、ホント、できたんですね、今年から。四月二十三日「サン・ジョルディの日」

◆東京に大雪の降った夜、風呂屋を出ると、少し前を行く湯おけを持った小学校六年生ぐらいの男の子、立ち止まって、片足をキュキユ、また歩き出していった。投げ捨てられていたタバコの火を消したのだ。はずかしさと共に氣も洗われた

◆朝日新聞2・21付「ひと」と一欄、井戸端会議で皆の一致した意見は「自分の子はいじめられるよりいじめる側にいたほうがいい」ということ。自殺されてはたまらないとの発想から、とか。その夜文部省のいじめ調査の報道を聞き

新しい家庭科—Wk

Vol. 5 No. 1 1986年 3月20日発行  
¥530(年間購読料・増刊号含¥6700)  
編集兼発行人／半田たつ子

発行所／(有)ウィ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14  
☎03(326)1380 振替 東京6-59867  
印刷所／(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

旭川	京栄堂書店	テ、東京堂、八重洲ブック	やま書店、丸山書店、岡崎	田辺	多屋孫書店
札幌	北東京堂書店	センター<豊島>池袋書店、	書房、ナカオ正文堂	神戸	流泉書房、ヒカリ書
島松	矢野書店	紀文堂書店<杉並>木風舎、	江南	宮	店、日進堂、文進堂書店、アイ
苫小	熊谷書店	新愛書店、ブラサード書店、	豊橋	西	ヨ書店、幾久書店
伊達	新生堂	たつみ書房、<新宿>紀	田	宮	イカロス書房
函館	神田書店	伊國屋書店、模索舎、風書	崎	尼	塚新西武B.C
青森	成田本店	房、伊野屋書店、ジョキ	戸	崎	宣文堂書房
盛岡	東山書、みみず書房	<渋谷>すべーす・えいが	瀬	路	姫路丸善
花巻	誠山房	さく<葛飾>宏精堂、中村	旭	浅野	浅野八代書店
水沢	松田書店	書店<世田谷>やまべ書店、	郡	石	学友書房
仙台	こどもの本の店	江崎書店、ひまわり書店	愛	岡	ひさや書店
	ブーの家、八重洲書房、	<練馬>平形書店<北>愛京	刈	山	弘栄堂
	萩書房、高山書店、金港堂、	堂<板橋>裕弘堂<江東>吉	岐	子	今井MC本店
	千忠書店	田書籍部<品川>シグマ図	新	取	富士書店
古川	高山書店	書、雄文堂<吉祥寺>ウニ	小	雲	武田書店
泉	ホビット館	タ書房<三鷹>第九書房、	千	江	大学前園山書店
秋田	加賀屋書店	たべもの村<調布>みづほ	新	島	やまびこ書店、
酒田	八文字屋	書房、神代書店<小金井>	長	出	いづみ書店、紀伊國屋書店
山形	高陽堂書店	かごや書店、緑町大洋堂	上	松	草間書店
	ほんべい	<府中>図府事店会、一二	板	田	岡田書店
尾花	鈴木書店	三書房<国分寺>吉野書店	三	口	西京書店
鶴岡	阿部久書店	<国立>増田書店富士見台	富	松	タカハシ書店
福島	岩瀬書店	店<立川>オリオン書房、	岡	高	松岡書店
	西沢書店	泰明堂<小平>和中書店、	松	音	みやたけ書店
郡山	松文堂	明文堂書店<清瀬>マルオ	飯	島	雄徳堂徳野書店
保原	ニシザワ	カ書店、飯田書店<町田>久	長	土佐山	ブックスエミール
藤岡	木村書店	美堂	上	北九州	依光書店
前中	川島朝日堂	横 文教堂、有隣堂、	中	福岡	北九州書店、白石書店、
田之	アルプス社	柴松堂、ともだち書店	信	二	黒崎いつりわBC
中田	島村書店	川崎 北野書店、早川	濃	日市	金文堂、横文館、金
水沼	至誠堂書店	書店、大塚書店	町	久留米	進堂
浦和	ツルヤB.C	相模原 中村書房	福	直方	丸山スコレ店
川口	岩瀬書店、須原屋	ブックス上溝	井	筑後	江頭書店
	新井書店	鎌倉 たらば書房	ひまわり書店、	大	菊竹金文堂
	ブックサトウ	相模大野 相模書房	じっぷじっぷ、吉川隆文	唐津	みやはら書店
越谷	日野屋書店	藤沢 東松堂	教	佐賀	金善堂
東松	比企文化社	厚木 内田屋書房	奈	長崎	吉田書店
和狭	山屋	綾瀬 藤美堂	大	佐賀	山口書店
蓮田	楓書房	栗 榎本書店	ユーゴー書店、樋口書籍、	津	まつら書店
大宮	マスダ書店	小 文泉堂	米原十六堂、藤川書店、学	佐賀	金華堂
	阿里書房	野崎 文泉堂	の友、西坂書店、呼文堂、	長崎	好文堂、童話館
	ペンギン書房	小田 伊勢治書店	もり、富士原文信堂、飯田	世保	紅屋書店、金明堂
飯能	めいわどう	平井書店	集英館、川口文堂堂、坂口	熊	教育文化用品KK、
	安藤芳文堂	塚 サクラ書店	書店、北村書店		三章文庫
入間	ヤマトウ書店	海老名 サンエ書房	東大阪	宮崎	松山書店
新座	みやかわ南口店	甲府 太平洋	和	延岡	池田書店
鴻巣	鴻文堂	静 百町森書店、吉	豊高	志布	開書堂、今村書店
富岡	みずほ書房	見書店、森上書店、	吹田	鹿児島	スズキ書店
船橋	前原かっぱ、西	磐田 あつみ書店	池田	大学生協	加世田書店
武B.C、	はつらつ書房	浜北 谷島屋書店	堺		
松津	元山書店	浜松 遠州堂、稲勝書店			
戸沼	大和屋書店	津 マルサン書店			
鎌谷	岡田書店	清 ランケイ社			
佐原	多田屋	水 戸田書店			
川	大杉書店、千里堂	宮 文正堂書店			
安	原勝書店	名 資然堂書店			
東葛飾	ブックスさかい	古 ウニタ書店、			
大原	井上書店	屋 ポランの広場、日比野泰			
東	<千代田>ピッピ、	文堂、谷口正文館書店、			
	日成堂、書肆アクセス、	白樺書房西店、白樺書店、			
	三省堂本店、書泉グラン	竹中書店、中目書房、きた			

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。

お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由とご指定のうえ、ご注文下さい。